



令和5年度

第72回 全道へき地複式教育研究大会

(全国へき地教育研究大会 北海道ブロック大会)

胆振大会研究紀要

■大会スローガン■

産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から

子どもたちに未来へ飛躍する力を



昭和新山と有珠山ロープウェイ

胆振大会実行委員会

令和5年度 第72回 全道へき地複式教育研究大会 胆振大会

《研究主題》

主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと
愛着をもった人間性豊かな子どもの育成

～児童生徒一人一人が仲間とつながり、

地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～



- 【期日】 令和5年9月13日(水)・14日(木)
- 【会場】 1日目 全体会・分散会 洞爺湖文化センター
2日目 公開授業・研究協議 胆振管内4会場
〈両日ともにリアルならびにオンライン開催〉
- 【主催】 北海道へき地・複式教育研究連盟
- 【共催】 全国へき地教育研究連盟
- 【主管】 胆振へき地・複式教育連盟
- 【後援】 北海道教育委員会・北海道教育大学・洞爺湖町・胆振管内教育委員会教育長協議会
苫小牧市教育委員会・室蘭市教育委員会・伊達市教育委員会・登別市教育委員会
豊浦町教育委員会・洞爺湖町教育委員会・壮瞥町教育委員会・白老町教育委員会
安平町教育委員会・むかわ町教育委員会・厚真町教育委員会・SoftBank
胆振管内校長会・胆振管内教頭会・北海道立教育研究所・胆振教育研究所
胆振西部PTA連合会・胆振東部PTA連合会

太陽となろう

～へき地教師のうた～

作詞 新渡戸 常晴

作曲 石山 美治

♩ = 104

The musical score is written in 4/4 time with a key signature of one flat (B-flat). It consists of four staves of music. The first staff starts with a *mp* dynamic. The second staff has a *mf* dynamic. The third staff includes markings for *11 cresc.*, *rit.*, and *mp a tempo*. The fourth staff starts with a *mf* dynamic. The lyrics are written below the notes.

やま あいのちい さながっ こう あおぞらとはな
とみどり がある つぶらなひとみの こらが ちか
ら いっぱいのび ている ともよ ともよ ーたいよ
う となつ て あす ひらくちえ を そ だ て よ う

太陽となろう
へき地教師のうた

作詞 新渡戸 常晴
作曲 石山 美治

一、 山間の 小さな学校

青空と花とみどりがある
つぶらな ひとみの子らが
力いっぱい 伸びている
教師よ 教師よ 太陽となって
あすひらく 智恵を 育てよう

二、 海辺の 小さな学校

潮風と波と光がある
明るい心の 子らが
力いっぱい 伸びている
教師よ 教師よ 太陽となって
あす築く意志を育てよう


三、 北国の 小さな学校

粉雪と 歌と 氷がある
元気な笑顔の 子らが
力いっぱい 伸びている
※教師よ 教師よ 太陽となって
あすつくる夢を育てよう

※くり返し


目次

挨拶	1
祝辞	4
大会開催要項	6
全体会（開会式・閉会式）次第・分散会一覧	7
公開授業校一覧	9
基調報告	
第Ⅰ章 北海道八き地複式教育研究連盟第10次長期5か年研究推進計画	12
第Ⅱ章 胆振八き地・複式教育研究連盟の研究	29
第Ⅲ章 全道八き地複式教育研究大会胆振大会に向けた研究推進	38
会場校の研究の概要	
◇第1分科会 洞爺湖町立とうや小学校	50
◇第2分科会 伊達市立大滝徳舜警学校	62
◇第3分科会 白老町立虎杖小学校	72
◇第4分科会 苫小牧市立樽前小学校	84
第72回全道八き地複式教育研究大会胆振大会実行委員会組織図	96
北海道八き地・複式教育研究連盟の組織	97
あとがき	98



『全国の牽引役として、時代の先端となる ハイブリッド型研究大会の確立を祈願して』

全国へき地教育研究連盟
会長 柿崎 秀 顕



『産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から子どもたちに未来へ飛躍する力を』を大会スローガンに、第72回全道へき地複式教育研究大会 胆振大会（ファイナルステージ）が世界遺産を誇る観光都市北海道洞爺湖町を全体会場として盛大に行われますことを心からお祝い申し上げます。

全道へき地複式研究大会は、北海道内行政区の持ち回りで、各地区2年連続の開催を単位として毎年研究大会を開催しているとお聞きしました。北海道の14もの行政区をまとめ、本大会を継続して開催するために、これまで数々のご苦勞があったことと推察いたします。関係の皆様方に心から敬意を表します。

さて、大会主題にも書かれています通り、今年度の北海道大会は、『ふるさとに夢や誇りを持って、未来の創り手となる子どもの育成』を研究主題とする本研究連盟第9次長期5か年計画の最終年度として、昨年度までの研究成果を引き継ぎ9次計画のまとめとして確かな足跡を残すとともに、10次計画へと導く大変重要な大会であるといえます。

そのような中、これまでの北海道大会では、国内初めての遠隔双方向授業の開催となり、宮崎大会開催の根拠となったオホーツク大会をはじめ、開催時期も相まって全国大会のリハール大会の意識をもち、毎年バージョンアップした大会運営を行っていただいております。

一方、全国各地に目を向けてみると、学校ではGIGAスクール構想をはじめとして、日本の教育スタイルが大きく変わる節目にあり、ICT機器の児童生徒1人1台端末を活用しての教育活動にかかわり、地域や学校による活用格差など新たな課題が見受けられ、その一つ一つの課題を解決しながら教職員のスキルアップも含め、更に研究を深めていくことが必要で、遠隔双方向による授業も含めた複式授業の技術力の向上など、へき地・複式・小規模校における実施の一助となるよう、全国的な交流等を図っていかねばならないと考えております。

全へき連といたしましては、昨年度のファーストステージを含む北海道ブロック大会の成果と課題を引き継ぎながら、へき地教育振興法の趣旨を生かす意味でも、それぞれの特色を生かした教育実践を全国の仲間へ発信し、研究の輪を一層広げることで、新たな時代を築く礎となる大会となることを心から祈念いたします。

結びに、これまでご指導とご支援をいただきました北海道教育委員会、全体会会場を引き受けていただきました洞爺湖町教育委員会をはじめとする関係市町教育委員会、後援いただいております北海道教育大学、教育関係諸団体の皆様、そして分科会会場校の教職員関係者の皆様、児童生徒の皆さんに心より感謝とお礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

第7 2回全道へき地複式教育研究大会胆振大会の開催によせて

北海道へき地・複式教育研究連盟
委員長 温泉 敏
(美瑛町立美沢小学校長)

「やってよかった全道大会」「参加した人が喜ぶ全道大会」。このような win-win になる大会。それが胆振大会ファイナルステージです。

ファーストステージ開始時は「えっ、配信?」「zoom?」だった方もいた? スタートですが、ちょっとだけ勇気を出して半歩踏み出したことで、今では配信はもちろん、様々なことに取り組み、チャレンジを楽しみ、本大会を迎えたと言えます。

昨年度、4つの分科会会場校が機材、接続、配信方法等を大会集録に公開しました。読んだ人は誰もがができるようになっていきます。これはまさに全へき連がいう「共同研究」ではないでしょうか。誰でもができる研究。それを率先して取り組んでくれました。

そして今回のファイナルステージ。あらゆる準備をして迎えたことと思います。どうか、ファーストステージ同様、思い切って運営、授業をしてください。

あわせて、役員の皆さんの大会に向けての姿勢はすばらしいものでした。実行委員会にはほぼ参加しましたが、その都度思うことでした。そのチャレンジ精神、積極性で最後まで途切れることなく取り組んでいただいたことに感謝いたします。

「2年続けての公開授業」は「大変だ」と思う方もいるでしょう。一方、「1年間の取組の成果をみてほしい」「やりなおしができる」ととらえる方もいるでしょう。胆振大会に関わった皆さんは後者の考えに立っていました。だからこそ、今があるのだと思います。

以前、道へき・複連情報誌でも触れましたが、「へき地はマイナス」というイメージはまだ続いているのでしょうか。もし、そうであれば視点を変換してみてもどうでしょうか。今求められている「個別最適な学び」「協働的な学び」「一人一端末を活用した授業」「遠隔授業」等、へき地・複式・小規模校はすでに実践をしているものばかりです。そうであれば、へき地・複式・小規模校は教育の先端を歩んでいるといえないでしょうか。


もう1つ。下に記したのは、ある学生が大学で、へき地教育について受講した後の感想の一部です。

一概にそうとは言えないが、高校進学タイミングで近隣の小規模校からきた子達は、少なくとも私の周りは皆、個人としてのスキルやポテンシャルが高く、まさに少数精鋭であったように感じた。本人達は、先生がたくさん手をかけられる環境にいたからだと言っていたが、ノートの取り方やグループワークでの積極性は、今思えば小規模校教育の賜もので、そういう子達が集まったのではなく、そういう子達に育て上げられたのだと痛感した。小規模校で行われているような授業は、本当に大切だと友人を思い出して改めて思った。

いかがでしょうか。胸をはって進みませんか。


今大会実施に向け、北海道教育庁胆振教育局長 針ヶ谷様には実行委員会に毎回お越しいただきました。また、教育支援課長、主任指導主事の方も毎回お越しいただき、胆振教育局の力強いバックアップ体制をいただいたことは、感謝しかありません。

結びに、胆振大会の開催にあたり、ご指導・ご支援をいただきました北海道教育委員会をはじめ、北海道教育庁胆振教育局、胆振管内各市町教育委員会等、関係機関の皆様にお礼申し上げます。そして、何よりも会場校の教職員の皆様、それを支えた協力校・加盟校等の皆様に厚くお礼申し上げます、挨拶いたします。



『多様性に満ちた胆振の地から、子どもたちに力を』
「へき地に光を」から「へき地から光を」へ

全道へき地複式教育研究大会胆振大会ファイナルステージ
(全国へき地教育研究大会 北海道ブロック大会)
実行委員長 前田道弘
(胆振へき地・複式教育連盟委員長 白老町立白老中学校長)



昨年9月14日からの2日間、洞爺湖町を全体会場として、全道へき地複式教育研究大会胆振大会ファーストステージが行われました。コロナ禍収束が見通せない状況の最中でしたが、関係者も含め全道・全国からのべ400名以上の参加がありました。

当初から参集および配信のハイブリッド型としての大会開催は、全道ブロック大会では初の試みであり、デジタル教科書の導入や一人一台端末の活用による遠隔合同授業の試行など、GIGAスクール構想実現に向け、創意工夫が求められた時期の大会実施でもありました。


一方で、他地区と同様に加盟校の減少が進行形であり、働き方改革が喫緊の課題ともなっており、足かけ3年にわたる大会準備の中では、立ち上げ当初から一致団結をみたわけではありません。

それでも全へき・道へきとのつながりをはじめ、関係していただいた方々の助力を受けた共同研究、へき地・複式・小規模校における研究の充実、学校や所属する教職員のため、そもそも、へき複・小規模校に通う子どもたちのために、「できることをやってみようではないか」という気持ちを軸に、ファーストステージに取り組みました。

子どもたち同士がつながること、大会参加者へどうぞ覧いただくかのICT利活用について考えることは言うまでもなく、あらためて授業の構築や地域とのつながりを考えていく中で得られた知見や技術は、へき地・複式・小規模校だけに必要とされるものではないことを実感しました。何より、開催校・協力校はもちろん、地区が一丸となって課題を追究していく姿勢が日々色濃く感じられ、大会実施を通しての大変大きな財産になったと感じています。生成AIをはじめ、教育界を取り巻く環境の変化は著しさを増すばかりです。これらの財産は、必ずや有効になると確信しているところです。


いよいよファイナルステージの開催となりました。前年度ご参加いただいた皆さんからの励まし、疑問、ご指摘、実践のご紹介等を受け、また、自分たちなりの振り返りをもとに、今大会を実施して参ります。道へき第10次長期計画のまとめの年ですが、実践研究はまだまだ完成形ではなく、今大会の実践と振り返りを、次年度上川大会に引き継いで参ります。どうか今大会についても忌憚のないご助言、ご示唆をいただき、研究のさらなる充実・発展を目指して参りたいと存じます。よろしく願いいたします。

結びとなりますが、2大会連続でご指導、ご支援をいただきました北海道教育委員会、北海道教育庁胆振教育局、胆振管内各市町教育委員会、北海道教育大学等、教育関係諸団体の皆様をはじめ、へき地・小規模・複式教育に携わるすべての皆様に心より感謝申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。



第72回全道へき地複式教育研究大会 胆振大会の開催に寄せて

北海道教育庁胆振教育局
局長 針ヶ谷 一 義



第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会が、全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会を兼ね、オンライン参加も含め、全道・全国各地から多数の先生方をお迎えし、管内の4会場で盛大に開催されますことは、誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げます。

北海道へき地・複式教育研究連盟におかれましては、長年にわたり、道内全域を会場に研究会を開催し、小規模・複式の特徴を生かした実践研究を積み重ねられ、本道はもとより全国のへき地・複式教育の振興・発展に寄与していただいておりますことに、深く敬意を表します。

さて、少子高齢化が進む今後の社会を展望したとき、広域分散型の本道においては、どの地域に住んでいても質の高い教育を受けることができる学びの保障と継続が求められており、全ての子どもたちが、充実した学びのプロセスを通じ、社会に出るための力をしっかりと身に付け、北海道の未来を担う人材へと成長するため、教育の果たす役割はますます大きくなっています。


本道は、広域分散型であるがゆえの様々な困難もありますが、だからこそ地域ごとに異なる特色があり、子どもたちが主体的に学び、社会の中で生きていく力を育てていくための絶好のフィールドとなります。

とりわけ、へき地・複式教育におきましては、子どもと教師の強い信頼関係及び学校と地域の協働性を基盤にして、異学年活動・自然体験活動等を通じて、個に応じた教育や自立的な学習などを推進し、社会に開かれた教育課程と生きる力を育成しやすい特徴を最大限生かすとともに、教師の多面的な力量を相互に補ったり、子ども同士の対話的な活動や交流活動を活性化させたりするために遠隔双方向システムを活用するなど柔軟な発想に基づく指導をすることが大切です。

このような中、本研究大会が、「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」を研究主題に、自ら学び、共に支え合いながら社会に貢献する子どもの育成を目指し、実践検証を進められますことは、誠に時宜を得た取組であり、多くの成果が得られるものと確信しているところです。

特に主体的・対話的で深い学びの実現に向けたICTの効果的な活用や、他者の思いや考えを結び付けながら自己の考えを深めるための指導の充実は、複式学級における授業のみならず、小・中学校の全ての授業の参考となることから、本研究大会で確認された研究の成果を各学校及び各地域におけるへき地・複式教育の一層の充実に向けた取組に積極的に活用されますとともに、各地域で広く発信していただきますことを御期待申し上げます。

結びに、昨年度の大会から引き続き、本研究大会の準備をしてこられた実行委員会の皆さんに深く敬意を表しますとともに、北海道へき地・複式教育研究連盟並びに胆振へき地・複式教育連盟の今後ますますの御発展と会員の皆様の更なる御健勝を祈念し、開催に当たってお祝いの言葉といたします。




第72回全道へき地複式教育研究大会 胆振大会の開催に寄せて

胆振管内教育委員会教育長協議会

会長 安藤 尚志

(白老町教育委員会 教育長)



この度、胆振管内の各市町を開催地・会場校として、第72回全道へき地複式教育研究大会が盛大に開催されますことに心からお喜びを申し上げます。

研究大会にご参加の皆様には、日頃から全道各地でそれぞれの地域の実態や状況を踏まえながら特色ある教育活動を展開され、地域とともにある学校づくりにご尽力されていることに深く敬意を表するとともに感謝を申し上げます。

さて、現代は将来の予測が困難な時代であり、その特徴である変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字を取って「VUCA」の時代と言われております。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響は、まさに時代を象徴する事態であったと言えます。このほかにも、人口減少社会やSociety5.0の到来、グローバル化の進展などにより、人々の価値観や生活様式、ワークスタイルが大きく変化しており、未来を生きる子ども達には、このような変化の激しい時代において、夢や希望をもち、様々な困難を乗り越え、多様な人々と協働しながら持続可能な社会の創り手として成長していくことが求められております。

そのための重要な要素として、日本社会に根差したウェルビーイングの向上が挙げられます。ウェルビーイングの実現は、多様な個人それぞれの幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなることであり、「幸福感」、「学校や地域でのつながり」、「協働性」、「利他性」などを向上させていくことが大切です。

このような中、北海道へき地・複式教育研究連盟は、第10次長期5か年研究推進計画において、研究主題「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」と設定し、2019年度から研究を進められてきました。

とりわけ、研究の手立てとして「学校学級経営の進化・充実」、「学習指導の深化・充実」を柱に、地域に根差した魅力ある教育活動の創造・発展に努めてきたことや、個別最適な学びの実現に向けた指導方法やICTの活用、指導目標の設定、学習指導過程や教材の工夫、学習活動における支援・評価方法の工夫に努めるなど、実践的な研修を進められたことは、道内のみならず、全国のへき地・複式教育へ大きな示唆を与えるものと確信しております。

今年度は研究の最終年度を迎えます。皆さんが高い志や使命感をもち、相互の連携を深め、様々な課題の解決に努力されてきた姿は、子ども達に生き方の範を示すことになるものと考えております。どうぞこれからも子ども達に多くの希望を与えていただくようお願い申し上げます。

結びになりますが、北海道へき地・複式教育研究連盟のますますのご発展を祈念するとともに、本大会の成果が全道のみならず全国に発信され、先生方の資質の向上や授業改善に寄与されることを期待し、第72回胆振大会の開催に寄せる言葉といたします。

第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会（ファイナルステージ）開催要項 ＜全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会＞

研究主題 『主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成』
～児童生徒一人一人が仲間とつながり、
地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

開催趣旨 全国へき地教育研究連盟5カ年研究推進計画の研究主題及び北海道へき地・複式教育研究連盟5カ年研究推進計画の研究主題を踏まえて、胆振地区におけるへき地教育実践をもとに、北海道ブロックにおけるへき地教育の研究成果を交流するとともに、へき地教育の今日的課題について研究協議し、もってへき地教育の充実を図る

胆振大会スローガン 「産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から 子どもたちに未来へ飛躍する力を」

- 1、主催：北海道へき地・複式教育研究連盟
- 2、共催：全国へき地教育研究連盟
- 3、主管：胆振へき地・複式教育連盟
- 4、後援：北海道教育委員会・北海道教育大学・洞爺湖町・胆振管内教育委員会教育長協議会
苫小牧市教育委員会・室蘭市教育委員会・伊達市教育委員会・登別市教育委員会
豊浦町教育委員会・洞爺湖町教育委員会・壮瞥町教育委員会・白老町教育委員会
安平町教育委員会・むかわ町教育委員会・厚真町教育委員会・SoftBank
胆振管内校長会・胆振管内教頭会・北海道立教育研究所・胆振教育研究所
胆振西部PTA連合会・胆振東部PTA連合会
- 5、期日：令和5年9月13日（水）14日（木）
- 6、会場：【全体会・分散会会場】洞爺湖文化センター（虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉142-140
TEL.0142-75-4400）
【歓迎交流会】洞爺湖町内で実施予定
【公開授業・研究協議会場】
第1分科会：洞爺湖町立とうや小学校 第2分科会：伊達市立大滝徳舜警学校
第3分科会：白老町立虎杖小学校 第4分科会：苫小牧市立樽前小学校
- 7、実施方法：【リアル開催】 参集形式にて各会場（全体会・分散会・分科会）にて実施
【オンライン開催】 ZOOMにてオンライン配信（全体会・分散会・分科会）

8、大会日程：

1日目 13日（水） 0L：オンライン配信

12：30 ～13：00	13：00 ～13：40	13：40 ～14：00	14：20 ～16：20	16：20 ～16：30	/	18：30 ～20：00
受付	開会式 0L	基調報告 0L	分散会 0L	閉会式 0L	/	歓迎交流会

2日目 14日（木）

8：30～	9：00 ～9：45	10：00 ～10：45	11：00 ～12：00	12：00 ～13：00	13：00 ～15：00	15：00 ～15：30
受付	授業公開① 0L	授業公開② 0L	開会式 研究発表 0L	昼食	研究協議 0L	閉会式 0L

- 9、参加費：参集による大会参加 4,000円
オンラインによる大会参加 2,000円

全体会（開・閉会式）次第・分散会一覧

【開会式】令和5年9月13日（13：00～13：40）洞爺湖文化センター：大ホール
（進行：胆振大会実行委員）

- 1 開式宣言 北海道へき地・複式教育研究連盟 副委員長 小野田 年 克
- 2 国歌斉唱
- 3 大会歌「太陽となろう」斉唱
- 4 主催者挨拶 北海道へき地・複式教育研究連盟 委員長 温 泉 敏
- 5 来賓祝辞 全国へき地教育研究連盟 会長 柿崎 秀 顕 様
北海道教育委員会 教育長 倉本 博 史 様
胆振管内教育委員会教育長協議会 会長 安藤 尚 志 様
- 6 来賓紹介 北海道へき地・複式教育研究連盟 事務局次長 道 下 誠
- 7 閉式宣言 北海道へき地・複式教育研究連盟 副委員長 小野田 年 克

【感謝状贈呈】

【次期開催地実行委員長挨拶】

※事務連絡

【基調報告】（13：40～14：00）洞爺湖文化センター：大ホール

【分散会】（14：20～16：20）

- I【学校・学級経営】 洞爺湖文化センター：第1会議室
- II【学習指導1】 洞爺湖文化センター：第2会議室
- III【学習指導2】 洞爺湖文化センター：サークル室

【閉会式】（16：20～16：30）洞爺湖文化センター：各分散会会場

（進行：道へき研究推進委員運営者）

- 1 開式の言葉 北海道へき地・複式教育研究連盟 研究推進委員
- 2 実行委員長挨拶 北海道へき地・複式教育研究大会 実行委員長 前田 道 弘
- 3 閉式の言葉 北海道へき地・複式教育研究連盟 研究推進委員

※事務連絡

【分散会一覧】

北海道へき地・複式教育研究連盟の長期研究推進計画に基づく実践研究の成果と課題について研究協議を行い、複式教育の充実・発展に資することを目的とする。

	分散会Ⅰ	分散会Ⅱ	分散会Ⅲ
課題	学校・学級経営（第1分野）	学習指導①（第2分野）	学習指導②（第2分野）
提言者	根室管内 別海町立上春別小学校 教諭 高橋 さゆり 氏	桧山管内 厚沢部町立鶉小学校 教諭 八木 良子 氏	十勝管内 音更町立西中音更小学校 校長 松井 眞治 氏
発表題	【第2課題】 「ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進」 ～共に学び、自ら学びを創る子の育成～	【第6課題】 「自分の考えを表現し、主体的に学び合う鶉っ子の育成」 ～考えを伝え合う算数科の授業を目指して～	【第5課題】 「小規模校の学校経営における効果的なICTの活用について」 ～複式授業の中でICTを活用し、自ら学び探求し、共に学び高め合える子どもの育成を目指して～
概要	①主体的に課題を解決する力を高めるための「学ぶ意欲が高まる課題提示」と「整合性あるゴールの設定」、「ふるさと別海のすばらしさ」を生かした教育課程の編成。 ②互いの良さを認め合い、より考えを深めるための「自ら学ぶ場面や共に学び合う場面」の効果的活用や1年を通じた異学年・異校種との学習活動。 ③学びの実感を持ち、客観的認知能力の育成を図るための、「身に付けさせたい力を明確化し、学びの連続性を目指した」振り返り場面の充実。	◎算数科における言語活動の充実を図る手立てについて ①間接指導時における対話的な学び、協働的な学びの手立ての工夫について ・学習の深化、課題設定のための「ふりかえり」の活用 ②ICTの効果的な活用について ・一人学年児童の対話的な学びの工夫 ・ロイロノートを活用したヒントカードやシンキングツール等教材の工夫	新型コロナのパンデミックによって、前倒しされた国のGIGAスクール構想によって、へき地の極小規模でも、光回線や一人一台端末など、ICT環境は劇的に改善された。 本校では、他校の先進事例に学びながら、効果的なICTの活用を模索・実践を通して、子どもたちの好奇心を刺激し、探究心に火を点け、彼らの将来に責任を負う教育の推進をする中で、ツールとしてICTの活用方法について、校内研修を中心に具体的に進めてきた。今回はそれらの成果と今後の課題についてご報告申し上げます。
討議の柱	ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進	間接指導の工夫やICTの効果的な活用による主体性を育てる学習指導過程の改善と充実	ICT機器の効果的活用など、学ぶ意欲を高める指導方法の改善と充実
助言者	北海道教育庁胆振教育局 義務教育指導班主任指導主事 中 脇 尚 子 様	北海道教育庁胆振教育局 義務教育指導班主任指導主事 関 川 恭 平 様	北海道教育庁石狩教育局 義務教育指導班主任指導主事 加 藤 慎 嗣 様

公開授業校一覧

第1分科会 洞爺湖町立とうや小学校 校長 山 下 文 人	
研究主題	単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探究
副主題	～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	算数 「3年計画・3年次」
公開授業1	授業者：佐々木 淳也 3年生 算数 「あまりのあるわり算」
公開授業2	授業者：吉村 亮 4年生 算数 「2けたでわるわり算の筆算」
助言者	北海道教育庁胆振教育局義務教育指導班 主任指導主事 中 脇 尚 子 様 音更町立東土幌小学校 校長 増 田 覚 氏

第2分科会 伊達市立大滝徳舜警学校 校長 羽 根 秀 哉	
研究主題	未来を創る児童・生徒の育成
副主題	～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導5】
教科等・年次	全教科 「2年計画・2年次」
公開授業1	授業者：池 田 桂 祐 (大滝徳舜警学校) 入 瀬 嘉 子 (関内小学校) 5年生 外国語 「Lesson5 Where is my treasure?」 ※伊達市立関内小学校との遠隔合同学習
公開授業2 (複式)	授業者：高 田 実千穂 5年生 国語 「たずねびと」 6年生 国語 「やまなし」
助言者	北海道教育庁胆振教育局 義務教育指導班指導主事 関 川 恭 平 様 北見市立西小学校 校長 堀 田 大次郎 氏

第3分科会 白老町立虎杖小学校 校長 関 東 英 政	
研究主題	わかった・できた・伝わったと表現できる児童を目指して
副主題	～個別最適な学び・協働的な学びを通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導5・6】
教科等・年次	全教科 「1年計画・1年次」
公開授業1 (複式)	授業者：長谷部 裕也(虎杖小) 石井 晴香(竹浦小) 3年生 国語 「ちいちゃんのかげおくり」 4年生 国語 「ごんぎつね」 *白老町立竹浦小学校との遠隔合同学習
公開授業2 (複式)	授業者：古村 瞭汰 5年生 国語 「たずねびと」 6年生 国語 「みんなで楽しく過ごすために」
助言者	北海道教育庁石狩教育局 義務教育指導班指導主事 加藤 慎嗣 様 留萌市立港北小学校 校長 村元 隆一 氏

第4分科会 苫小牧市立樽前小学校 校長 中 嶋 清 人	
研究主題	主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成
副主題	～リーダー学習の取組を通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	算数 「3年次計画・2年次」
公開授業1	授業者：小保内 知博 4年生 算数 「わり算の筆算(2)」
公開授業2 (複式)	授業者：奈良 美里 5年生 算数 「分数と小数、整数の関係」 6年生 算数 「円の面積」
助言者	北海道教育庁日高教育局 義務教育指導班主任指導主事 高嶋 優美 様 今金町立種川小学校 校長 黒川 貴功 氏

基 調 報 告

第Ⅰ章 北海道へき地・複式教育研究連盟

第10次長期5か年研究推進計画

第Ⅱ章 胆振へき地・複式教育連盟の研究

第Ⅲ章 全道へき地複式教育研究大会

胆振大会に向けた研究推進



世界遺産 縄文遺跡群 伊達市 北黄金貝塚

基 調 報 告

第 I 章 北海道へき地・複式教育研究連盟第10次長期5か年研究推進計画

I 北海道へき地・複式教育研究連盟の歩み

1 へき地・複式教育の黎明

北海道のへき地・複式教育は、過酷な自然条件の中であって、都市部のそれとは比べものにならない多くのハンディキャップを背負わされていた。したがって、その改善運動は、いろいろな形で行政当局や、地域・父母と教師の積み重ねで行われてきた。

昭和7（1932）年、北海道庁主催で第1回単級複式編制研究大会が開催され、翌8年には札幌師範・旭川師範代用付属（平岸小・神居小）が初めて指定校になった。

それから11年後の昭和19（1944）年には、全道14支庁に単級複式教育研究指定校が設置され、翌20年に単級複式教育研究指定協議会を空知、釧路、渡島の3地区で開催する運びとなった。この年に「単級複式教育」が発行された。このような諸々の活動が全道単級複式連盟（以下「道単連」）結成の契機となった。

道単連が結成されたのは、昭和23（1948）年のことである。同年11月7日には、札幌市において、石狩、空知、後志、胆振等、近隣地区の代表が集まって連盟を結成した。また、同年には年間予算17万円を計上し、全道研究大会を上川管内美深町立楠小学校で開催した。まさに、へき地・複式教育の夜明けである。

この後、道単連の仲間は、単級複式の教育研究と条件整備を車の両輪として、熱心な活動を続けていった。

昭和27（1952）年7月7日に、第1回全国単級複式教育研究大会が北海道十勝地区で開催され、同年10月全道大会が空知地区で開かれたことが契機となり、単複の研究活動はますます高まっていった。

この頃、北海道教育の特色といわれる「自ら学ぶ教育」の理念が示され、北海道立教育研究所から、その原理と原型（原理を追究することによって、理論的にも実践的にも教育現場の範例となるモデル）が打ち出され、複式教育の課題整理について論議を呼んだのも見逃せない教育思潮であった。これは、理論研究というより実践研究であり、児童生徒の自発的な学習方法の体得を徹底させることにより、児童生徒自ら生きて働く力をもつ態度形成が図られるとするものであり、「計画（実態把握・仮説設定）—実施（仮説に基づく実践・検証）—実践の記録・評価—再評価」の螺旋型の研究方法は、道単連研究推進のモデルとなった。

2 これまでの長期研究推進計画の経過

(1) 第1次長期10か年研究推進計画 昭和45（1970）年度～昭和54（1979）年度

◆研究主題 「新時代を開発し、主体的・創造的に生きる子供の育成」

～へき地・複式学校の特色を生かし、児童生徒一人一人を伸ばす

学校・学級経営と学習指導のあり方を研究する～

第1期（昭和45年度～47年度）は研究期として、長期10か年研究推進計画の全体構想を立て、研究目標、研究仮説、研究内容、研究方法を明確にした。このことにより、次期の研究方法に見通しが持てるようになった。

第2期（昭和48年度～50年度）は典型期として、第1期における複式教育研究の原理的なものと基本的なものをおさえた研究・実践を進めていった。それらの実践検証の中から各地区における実践モデルが生まれてきた。

第3期（昭和51年度～54年度）は検証期として、全道、全国で実践された典型を参考にして、各学校の実態を考慮して取り入れ、定型化を進めていった。定型とは、典型的な実践モデルを「いつでも」、「どこでも」、「だれでも」が地域や学校の実態に合わせて応用できるモデルのことである。

この10か年の研究の成果をつぎのようにまとめることができる。

○閉ざされたへき地・複式教育から、開かれたへき地・複式教育への発想の転換が進んだ。

○研究目標、研究課題が明確になり、典型的な実践モデルが数多く生まれた。

○新しい経営理念の創造と研究・実践が進み、独自性のある活力に満ちた学校経営が行われるようになった。

○学習指導法の現代化、最適化に挑む実践が各地で見られるようになり、数多くの典型が生まれた。

(2) 第2次長期5か年研究推進計画の経過 昭和55(1980)年度～59(1984)年度

◆研究主題 「たくましく実践力をもって、主体的・創造的に生きる人間性豊かな子供の育成」
～へき地・小規模・複式学校の特性を生かした学校・学級経営の近代化と
学習指導の最適化を目指して～

第1期（昭和55年度～57年度）は研究の典型期として、第1次長計の成果を継承するとともに、新教育課程（昭和55年度学習指導要領改訂）の精神に基づき、広さ、深さ、新しさを持たせ、研究・実践を進めた。

第2期（昭和58年度～59年度）は研究の定型期として、第1期の典型期を受けて、この期間に生まれた理論的・実践的研究成果をさらに授業実践による検証を通して、各学校で活用できるような実践の定型化を目指した。

第2次の研究成果を次のようにまとめることができる。

○複式形態の学習指導に着目し、基礎的、基本的内容の精選と指導計画や指導方法の様式化が進んだ。

○授業実践による検証という共同研究体制が確立され、教師の高まりと児童生徒の変容が見られた。

○児童生徒一人一人を生かすとともに、集団化を図った指導計画が作成され、実践が累積された。

○個に応じた指導から、集団化を図った実践の中で個を引き上げる指導がなされた。

○集合指導における分習・全習の研究で、児童生徒の「練り合い」や「深め合い」を追究した学習指導の深化・充実が図られた。

(3) 第3次長期5か年研究推進計画 昭和60(1985)年度～平成元(1989)年度

◆研究主題 「たくましい実践力をもって、主体的・創造的に生きる人間性豊かな子どもの育成」
～へき地・小規模・複式学校の特性を生かした学校・学級経営の近代化と
学習指導の最適化を目指して～

第1期（昭和60年度～62年度）は実践研究の検証期として、第2次長計の総括に基づく研

究内容、方法等の成果を確認し、第3次長計の研究領域、分野ごとの課題について、より確かな理論の確立と実践による検証をしていく時期としている。

第2期(昭和63年度～平成元年度)は実践研究の整理期として、これまでの長計による研究成果を双書「複式教育の創造」につなげるよう研究の深化・統合を図りながら、複式教育の実践論、方法論として整理・集大成するとともに、第4次長計を策定していく時期としている。

(4) 第4次長期4か年研究推進計画 平成2(1990)年度～平成5(1993)年度

◆研究主題 「郷土を愛し、たくましい実践力をもって、
主体的・創造的に生きる心豊かな子供の育成」

～へき地・小規模・複式学校の特性を生かし、

児童生徒一人一人を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実・発展を目指して～

第1期(平成2年度～平成3年度)は実践研究の検証期として、これまでの研究推進計画の総括に基づく研究内容、方法等の成果を再確認し、第4次長計の研究領域の課題について、より確かな理論の確立と実践による検証をしていく時期である。

第2期(平成4年度～平成5年度)は実践研究の整理期として、複式教育の実践論、方法論の整理・集大成を図り、第5次長計の策定を行う時期である。また、第4次長計に、次のような特徴的課題をもたせる。

- 一人一人の児童生徒に、学習の基礎的・基本的内容と豊かな人間性を身に付けさせ、激動する社会を自らの力で、たくましく生き抜く意志と実践力を付けさせる。
- へき地・小規模・複式学校の特性に立った学校・学級経営や学習指導を充実・発展させる。
- 国際化へと動きつつある現在、深く国際理解し、国際感覚豊かな人間を育成する。そのための第1段階として、郷土を愛する児童生徒を育成する。

(5) 第5次長期5か年研究推進計画 平成6(1994)年度～10(1998)年度

◆研究主題 「郷土の未来を拓き、たくましい実践力をもって
主体的・創造的に生きる心豊かな子供の育成」

～へき地・小規模・複式学校の特性を生かし、

児童生徒一人一人を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実・発展を目指して～

第5次では、特徴的な課題として以下の事柄を積極的に取り入れていくことが求められた。

- 心の教育を重視していくこと。特に、生命を尊重し、他人を思いやる心の育成を重視すること。(道徳教育、環境教育)
- 個性の伸長を図る教育の理念を明確にすること。特に、基礎的・基本的内容を児童生徒一人一人に身に付けさせることとの関連を明確にすること。
(個性の伸長、学習内容の重点化)
- 郷土の伝統・文化に関心を持たせること。諸外国の人々の生活や文化を理解し、尊重していく態度を育成すること。

(6) 第6次長期5か年研究推進計画 平成11(1999)年度～平成15(2003)年度

◆研究主題 「新しい時代を拓き、豊かな心で主体的・創造的に
たくましく生きる子どもの育成」

～へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性を生かし、

児童生徒一人一人を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実・発展を目指して～

第6次では、新学習指導要領の趣旨を生かし、学校週5日制の下、子ども達が生涯にわたって学び続けるための基礎的能力や自ら学ぶ態度の育成など「ゆとり」の中で「生きる力」を身

に付けることを基本理念に研究が推進された。

(7) 第7次長期5か年研究推進計画 平成16(2004)年度～20(2008)年度

◆研究主題 「自ら創造的に学び豊かな心でたくましく郷土を拓く子供の育成」

～へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性を生かし、

一人一人の児童生徒に「新たな時代を生き抜くための力」を育む

学校・学級経営と学習指導の充実を目指して～

第7次では、「たくましく生きる力“を持つ人の育成”と「ゆとりとうるおい“のある学びの環境づくり”を基本姿勢に、地域に根差し、「豊かな心」を育てる特色ある学校・学級経営と、児童生徒一人一人の個性を生かしながら「確かな学力」を育てる学習指導の研究に取り組んだ。

(8) 第8次長期5か年研究推進計画 平成21(2009)年度～25(2013)年度

◆研究主題 「主体的・創造的に学び、豊かな心でたくましくふるさとを拓く子供の育成」

～へき地・複式教育の特性を生かし、児童生徒一人一人に

未来に生きる力を育む学校・学級経営と学習指導の充実を目指して～

第8次では、「ゆとり」の中で、「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」のバランスのとれた「生きる力」を育成することを基本方針に研究を進めてきた。

(9) 第9次長期5か年研究推進計画 平成26(2014)年度～30(2018)年度

◆研究主題 「主体的・創造的に学び、豊かな心でたくましく

ふるさとを切り拓く子どもの育成」

～へき地・複式教育の特性を生かし、児童生徒一人一人に

未来に「生きる力」を育む学校・学級経営と学習指導の充実を目指して～

第9次では、北海道教育推進計画等の新しい教育の動向を踏まえながら、昭和45年より実績を積んできた長期・課題別・共同研究方式の継承し、年度ごとに改善を図りながら実践を積み重ねてきた。

Ⅱ 第10次長期5か年研究推進計画

1 計画策定のために

教育の今日的な動向

今日、少子高齢化や高度情報化、厳しい経済情勢や格差社会の現状を背景として、教育を取り巻く社会情勢は大きく変化している。学力・学習意欲や規範意識、体力・運動能力等に関する様々な課題が指摘され、この解決に向け、子どもから高齢者までの人の成長を見据えながら、学校・家庭・地域社会など、社会全体で教育に取り組むことが必要とされている。

そこで、国においては、教育を取り巻く社会情勢の変化を踏まえ、平成18年に教育基本法、その後学校教育法を改正している。さらに、平成29年3月には、新学習指導要領が告示され、平成30年度の幼稚園から、小学校、中学校、高等学校へと順次全面実施となる。この新学習指導要領においては、子どもたちが未来社会を切り拓くための資質能力の育成、理解の質をさらに

高めた確かな学力の育成、豊かな心や健やかな体の育成が求められている。

北海道においては、これまでの全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた取組が求められ、特に「学力の向上」は重点目標となっている。また、北海道教育委員会からは平成30年度からの5年間を見通した「新しい教育計画」が示され、その具体的実践と成果が求められている。

北海道「新しい教育計画」(平成30年3月)

北海道教育委員会では、これまで、中長期的な展望に立って教育施策を着実に推進するため、長期的な教育計画を策定し、教育施策を総合的かつ計画的に推進してきた。

平成18(2006)年10月には北海道が目指す教育の基本的な理念や目標などを明確にするため「北海道教育ビジョン」を策定し、このビジョンに掲げた教育の基本理念及び基本目標の実現に向けて、平成20(2008)年3月に第4次北海道教育長期総合計画である「北海道教育推進計画」を策定し、様々な教育施策に取り組んできた。その理念を継承しつつ、本道の将来的な課題を踏まえ、平成30(2018)年には、教育施策の総合的な教育計画として、第5次北海道教育長期総合計画である「新しい教育計画」を策定した。計画期間は、平成30(2018)年度～34(2022)年度の5年間である。

なお、この計画は、北海道行政基本条例に基づき策定された「北海道総合計画」(平成28年度施行)の特定分野別計画として位置付けられるとともに、知事が定める道の教育、学術及び文化の振興に関する「北海道総合教育大綱」(平成30年度施行)との整合性を図り策定されたものである。

(1) 社会状況の変化

①人口減少と少子高齢化の進展

本道の人口は、平成9(1997)年に570万人に達して以降、全国を上回るスピードで減少が続いており、生産年齢人口の割合も全国に比べ低い。また、若者の道内各地から札幌、札幌から本州への流出傾向が長年続いている。

②グローバル化と高度情報化の進展

本道においても、道内企業の海外進出や北海道産食品の輸出拡大、外国人観光客や在留外国人の急増によって、グローバル化が急速に進展している。また、IoTやビッグデータ、AIをはじめとする技術革新により、雇用情勢の大きな変化が予想されている。

③子どもの貧困など社会経済的課題

本道においても、生活受給の保護率が全国を大きく上回り、ひとり親家庭の増加など、経済的に厳しい家庭が増加している。そのことにより、経済的な格差が進学機会や学力の格差につながる懸念されている。

④学習指導要領の改訂や高大接続改革など教育改革の大きな流れ

国においては、未来の創り手となるための必要な資質・能力を身に付けることができる学校教育の実現を目指して、学習指導要領の改訂を行った。さらに、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的な改革が進められている。

(2) 本道の子どもの現状

①学力等の状況について

「全国学力・学習状況調査」によると、改善の傾向が見られるものの全教科において全国平均に届いていない状況にある。また、家庭における学習の時間が少ない、テレビゲーム等をする時間が長いといった生活習慣についての課題があることが明らかになっている。

②児童生徒の問題行動等について

「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」と回答した児童生徒の割合は増加しているが、依然としていじめに苦しんでいる児童生徒が多くいる。

③体力、運動能力について

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると、依然として男女ともに全国平均を下回っている。また、学校の授業以外における運動時間についても全国より少ない。

④特別支援教育について

本道の特別支援学校の児童生徒数や特別支援学級、通級による指導を受けている児童生徒数は、平成19年度からの9年間で約1.7倍に増加している。また、特別支援学校に在籍する幼児児童生徒の障がいが重度・重複化、多様化している。

⑤キャリア教育・産業教育について

本道においては、非正規労働者の割合が全国平均よりも高く、若者の完全失業率が他の年齢層と比較しても高い。このため、発達の段階に応じた小中高の学校間における体系的なキャリア教育や産業教育を一層充実させていくことが重要である。

⑥子どもの安全・安心の確保について

登下校時に子どもが事件・事故に遭う事案が依然として発生しており、安全確保に向けた実践的な取組や、子どもたちに危機対応能力を身に付けさせることが重要である。

⑦学校、教員を取り巻く状況について

教員の多忙化により、子どもと向き合う時間の確保等に向けた業務環境改善の取組が求められている。また、教員の経験年数の均衡が崩れ、知識・技能が継承されないという状況や、教職員の不祥事が依然として後を絶たない状況が問題となっている。

⑧子どもたちの生活習慣について

「全国学力・学習状況調査」によると、1日2時間以上テレビゲームをする児童生徒の割合は、小・中いずれも全国平均を上回っており、スマートフォン等で通話やメール、インターネットをする時間も同様の傾向となっている。基本的な生活習慣の定着が望まれる。

⑨学校、家庭、地域の連携について

学校の小規模化、人口減少による地域コミュニティの衰退、多様化する価値観、家族形態の変容などによる地域社会の変化に伴い、学校や家庭、地域の教育力の低下が懸念されている。

⑩生涯学習活動について

本道の生産年齢人口の割合は、2040年には50%に低下する一方、高齢者人口の割合は、40%に上昇し、全国を上回るスピードで高齢化が進行すると見込まれている。そうした社会状況の中、地域の人々が継続して学習できる機会の充実が必要である。

⑪文化活動について

道内の文化財は、保存や伝承が困難となっているものもことから、地域に伝わる民俗芸能に触れる機会を提供することで、郷土愛を育み、後継者の育成や民俗芸能の振興を図っていくことが重要である。

(3) 北海道教育の基本理念

この基本理念は、平成20年度以降おおむね10年間の北海道が目指す教育の理念や目標をまとめた「北海道教育ビジョン」で示されたものであり、今後5年間の教育計画においてもこの理念を継承し、「自立」と「共生」を基本理念の柱とする。

その上で、グローバル化の進展や人口減少など、これまでの社会情勢の変化を踏まえ、本道の将来を担う子どもたちが夢と希望にあふれ健やかに成長できるよう掲げたものである。

- 自立 自然豊かな北の大地で、世界を見つめ、
自立の精神にあふれ、自らの夢に挑戦し、実現していく人を育む
- 共生 ふるさとへの誇りと愛着を持ち、
これからの社会に貢献し、共に支え合う人を育む

(4) 計画の目標

教育を取り巻く諸課題や社会的要請を踏まえ、「自立」と「共生」を柱とする基本理念を実現するため、今後展開する施策の目指すべき目標を整理した。

この目標は、子ども一人一人に身に付けさせるべき資質・能力の育成や、教育環境づくりの観点から6つの視点を基に整理したものである。

- 1 社会で生きる力の育成
- 2 豊かな人間性の育成
- 3 健やかな体の育成
- 4 学びを支える家庭・地域との連携
- 5 学びをつなぐ学校づくりの実現
- 6 学びを活かす地域社会の実現

北海道の「へき地・複式教育」の特性と可能性について

(1) へき地教育の定義転換

へき地の特性は、北海道教育大学へき地教育研究施設が、1960年代に、

- ①自然的悪条件 ②僻遠性 ③文化的停滞性
- ④教育的低調性 ⑤社会的封鎖制 ⑥経済的貧困性

と、いずれもマイナスの特性として規定した。

しかし、北海道教育大学の玉井康之教授は、へき地教育の定義の転換の必要性と可能性を説く中で、へき地の特性の位置付けを変えることによって、積極面を伸ばす教育ができるとしている。また、現代の教育政策の基本方策の多くが、へき地で展開されてきた教育活動の中に残存しており、それを生かすことによってへき地教育は現代の教育改革の先進的な実践事例になりうる可能性を有していると結論している。

※（「子どもと地域の未来をひらくへき地・小規模校教育の可能性」教育新聞社）

《へき地性の評価のとらえ直し》

- 自然的悪条件 → 自然を豊かに活用した、「生きる力」の基礎を培うことができる。
- 僻遠性 → 都会の俗悪性の影響を受けずに、密接な人間関係を基礎にした教育を行うことができる。
- 文化的停滞性 → 伝統的な日本の生産・生活様式から由来する農・漁村文化を重要な文化と位置付けることができる。
- 教育的低調性 → 通塾率の低さとともに狭い意味での学力競争の雰囲気がないために、公教育の役割が大きく、現代的な課題に対応した教育や個に応じた教育が展開されやすい。

- 社会的封鎖性 → 都市と隔絶した独自の文化圏をコミュニティと位置付けるならば、誰もが子どもに関わることができるような地域の教育力に転化できる条件がある。
- 経済的貧困性 → 第1次産業の重要性を学び、従事活動を教育条件に意義付けることができれば、家事労働や勤労の重要性を伝える教育活動として位置付けることができる。

これらのプラス評価をつなげると、「へき地教育とは、都市の俗悪性の影響を受けず、豊富な自然や農・漁村の伝統的な文化を生かしながら、公教育の本来的な機能である「生きる力」の育成を重視した教育活動であり、学校・家庭・地域社会が一体となって展開する教育活動の総体である。」と定義付けることができるのではないだろうか。

(2) へき地教育の可能性

一般的にへき地・小規模・複式学級を有する学校（以下「へき地・複式・小規模校」と記述）の教育は、都市部・単式校に比べて教育環境が劣悪であるとのマイナスイメージでとらえられることが多い。また、児童生徒の一般的な特徴として、長所としては、①明朗で快活、②純真で素朴、③礼儀正しく仲がよい、④根気強く労力をいとわない、⑤協調性がある、などがあげられ、短所としては、①依頼心が強く計画性がない、②語彙に乏しく表現力がない、③思考や発想の多様性・論理性に乏しい、④社会性に乏しく主体性がない、などがあげられている。しかし、通信機器や交通網が発達した中で、へき地の特性や児童生徒の特徴がそのまま当てはまるかどうかは疑わしい。

我々は、個々の児童生徒の発達段階の特性を把握して、個に応じた適切な指導に努めるとともに、へき地性からもたらされるマイナス面があるとするなら、その是正を図っていかなければならない。また、「地域に根ざした教育」が求められているという今日的な動向から、その教育環境ゆえに新しい可能性を有するものとしてとらえ、プラス面に目を向けた教育活動を展開していく必要がある。

(3) 小規模性を生かす

へき地・複式・小規模校では、児童生徒数の少ないことを優位な条件としてとらえ、小規模性を積極的に生かした教育活動を展開することが可能である。

《へき地・複式・小規模校のプラス面》

- 教員と児童生徒の関係や児童生徒同士の関係が密接で、相互の信頼関係を形成しやすい。
- 学校と地域の関係が密接で、学校行事や学校運営において地域住民の協力を得やすい。
- 個々の児童生徒の到達状況に合わせた学習指導・生活指導を行いやすい。
- 複式であるがゆえに、逆に集団学習・自主学習を行う習慣を形成しやすい。
- 自然体験学習を始めとして、体験学習を教育課程に組み込みやすい。
- 異年齢集団による縦割り指導を行いやすい。
- 人数が少ない故に、誰もが児童会・生徒会やクラスの役員になり、活躍の場がある。

(4) 複式学級での指導

2個学年の児童生徒が1学級を編制して教育活動を営む学級を「複式学級」と呼び、次のような特質を踏まえて教育課程の編成・実施に当たらなければならない。

- ①教育課程編成の特例により、学年別によらない指導計画を作成することができること。

- ②学級編制基準により、2個学年で構成される学級であることから、個人（能力）差と学年差が生じること。よきリーダーとよきフォロアーの立場を経験できること。
- ③指導計画の類型により、学習指導過程を工夫しなければならないこと。

また、複式学級の学習指導にあたっては、「複式学級における学習指導の在り方」（平成13年発行、北海道立教育研究所：北海道教育大学）で述べられている以下のような事項を踏まえる必要がある。

《欠 点》

- 少人数のため、児童生徒は大きな集団での社会的経験の場が不足しがちになる。
- 学年別指導の場合、児童生徒は教師から直接的な指導を受ける時間が少ない。
- 2個学年で編制しているため、学級を構成する児童生徒が毎年変わることが多い。

《利 点》

- 少人数のため、教師は、個に応じたきめ細かい指導を行いやすい。
- 学年別指導の場合、児童生徒は、教師がつかない時間帯に数多くの自学自習を経験できる。
- 2個学年で編制しているため、児童生徒は、上学年と下学年という2つの立場を経験できる。

《利点を生かした学習指導を行うための基本的な考え方》

- 個に応じたきめ細かい指導を通して基礎・基本の確実な定着を図る。
- 数多くの自学自習の経験を生かし、自ら学び自ら考える力の育成を図る。
- 上学年と下学年のかかわりを通して、学年を超えて学び合う態度の育成を図る。

複式学級では、少人数指導・個別指導を重視して、個に応じた指導内容を計画・実施した方が、少人数学級のメリットを生かすことができる。また、授業では、ペア学習やグループ学習などの間接指導をしながら、教師が直接指導できない部分を補う必要があるが、そのためには、各単元の学習指導のマニュアル化を進めていくことと、直接指示をしなくとも子ども同士で進められる学習指導過程を工夫することが極めて重要である。

現在、複式学級での学年別指導では、長年の研究・実践に基づいて典型化・定型化された4段階の学習指導過程を「ずらし」て、教師の「わたり」によって授業を展開する類型を用いている。

へき地・複式・小規模校では、多くの学校で、教師の負担を軽減し、効率的な授業を行うための実践的な研究が進められてきた。そして、地域や子どもの実態に即した独自の学習指導方法が生み出されてきた。

特に、昭和45（1970）年以降は、「地域に根ざした教育」「たくましく生きる教育」「郷土を愛する教育」「郷土の未来を拓く教育」と、研究主題の変遷はあっても、長期・課題別・共同研究方式による計画的組織的な研究・実践が着実に進められ、「いつでも」「どこでも」「だれでも」が活用できるようにまとめられ、整理されてきた。

最近では、発展的工夫として、「2個学年の学習状況を同時に把握できる時間帯を設定して授業を行う場合」や「下学年の指導に重点をおいて授業を行う場合」など、学習指導過程の工夫された授業が展開されている。

今日の教育政策では、少人数指導方式や習熟度別指導方法が奨励され、大規模校においても研究・実践が進められている。そのような中では、へき地・複式・小規模校の授業実践は、先進的な事例として、今後も積極的に研究・開発していく必要がある。

地域の教育課題

へき地・複式・小規模校では、学校を取り巻く地域性を十分に考慮して教育計画を立てることを基本としてきた。それは、へき地という地域性からくる教育上の諸問題、あるいは小規模性、複式学級を有する学校という条件から生ずる課題に適切に対応することが、学校経営上極めて重要だからである。

(1) 地域の実態に即した教育

近年、児童生徒の家庭生活を含む地域の生活が大きく変化し、児童生徒の成長のために必要な自然体験や社会体験などの機会が少なくなっている。このことから、学校が地域の教育環境を積極的に活用し、教材化するなどして児童生徒が地域の事物・事象などに触れる機会を増やすことが必要である。

地域の教育環境を積極的に活用した教育活動を行うことの意義として、「地域の実態に即した教育課程」(文部科学省)では、以下の3点をあげている。

- ① 学習主体としての児童生徒の実態に注目しつつ、そこから教育活動を出発させようとするものである。
- ② 教室の中に児童生徒を閉じこめたまま定型的な授業を展開するのではなく、学校の置かれた地域の環境条件を活用して、創意工夫を加えていく積極的な学校教育の在り方をめざすものである。
- ③ 地域の実態に即した教育は、学校と地域社会との信頼、協力を確立することをめざすものである。

(2) 地域のもつ教育課題

へき地・複式・小規模校は、自然環境、歴史や伝統に支えられた生活・文化、家庭や地域住民の学校に対する期待の高さなど、その地域独特の教育環境の中にある。したがって、へき地・複式・小規模校においては、教育の今日的課題の他に、地域の教育課題を適切に取り入れた学校課題の解明・解決が重要であり、地域に根ざした教育活動の推進が強く求められる。

地域に根ざした教育活動というのは、教師の側からは、地域の自然環境・社会環境(地理・歴史・産業・文化)を取り入れた教育課程を編成し実施していくことであり、児童生徒の側からは、地域での自然体験・社会体験から学んだことを生かして、学校での学習にフィードバックしていく教育活動のことである。具体的には、児童生徒が地域の中で現実社会とかかわり、地域の課題を解明・解決するために必要な総合的な力を身に付けていく活動である。

家庭や地域住民の「学校に対する思いや期待」は多様であろうが、地域社会には以下にあげるような教育課題が存在すると考えられる。

- ①地域の自然環境・社会環境を基盤とした現状認識と将来展望から、社会の変化にしなやかに対応し、新しい地域社会を創造する能力を育てる。
- ②連帯感を基調とした「地域づくり」の実践を通して、郷土を愛する心や奉仕の心など豊かな人間性を育てる。
- ③厳しい自然環境に耐えて生き抜くたくましい実践力と、地域の歴史や伝統を尊重する節度ある生活態度を育てる。

道へき・複連の研究方法

これまで、道へき・複連は、全道のへき地・複式教育に携わる教師たちの英知と力を結集して、共同化・協業化による組織的・計画的な実践的な研究を進めてきている。そして、統一された研究主題に基づいて課題の解明・解決を図り、より多くの成果をあげている。

第10次長期5か年研究推進計画においても、課題の解明・解決に向けた実践的研究を基盤に、長期・課題別・共同研究方式を継承していく。そのためには、研究目標や研究課題を明確にし、長期的な計画に基づき、各学校による研究・実践を通して成果と課題を集約・整理することが大切である。

長期5か年計画のうち、前期3年間は、第9次長計までの研究の成果と課題を整理し、さらなる充実・発展を図るとともに、教育の動向を踏まえつつ、各学校の研究と整合性を図りながら研究計画を立て、実践し、検証していく期間とする。また、後期2年間は前期3年間の成果と課題を整理し、典型化・定型化に努め、研究・実践の一層の充実と発展を図る期間とする。

集約された成果と課題については、各学校に十分周知し、理解してもらい、さらなる課題解明・解決に向けて研究・実践してもらおうことが大切である。そして、「いつでも」「どこでも」「だれでも」ができる実践として典型化・定型化していくことが必要である。

へき地・複式・小規模校では、以下の3点に基づき、研究・実践していくことが大切である。

- ①三特性からくる児童生徒の学習・生活実態を十分に踏まえ、児童生徒一人一人の持つ課題を解決・解明するための実践的な研究を行う。
- ②「学校・学級経営」と「学習指導」という2つの分野それぞれの課題を焦点化し、両面から研究主題を追究し、相互の深化・充実を図る。
- ③道へき・複連により蓄積された優れた研究・実践の典型を自校にあてはめ、「いつでも」「どこでも」「だれでも」が実践できるような定型化を図る。

《長期・課題別・共同研究方式》

道へき・複連の研究方式が大きく変わったのは、第1次長計が始められた昭和45（1970）年である。それまで「研究大会」は、各地区の輪番で行われ、研究主題もそれぞれ異なり、研究の成果や課題などが整理されていなかった。したがって、次年度の研究へのつながりも積み上げも明確でなかった。そのため、各地区の優れた研究・実践が単発的なものにとどまり、道内各地への広がりが見られず、へき地・複式教育水準の向上までには至らなかった。

そこで、道へき・複連では、組織的な研究体制を築くための抜本的な改革をめざし、「何のために」「何をめざして」進めるかという目標（課題）を持つとともに、「いつまでに」「どのようなことを」「どのようにして」達成するかという長期的な展望に立った研究・実践の手順を示した。このように、研究主題を統一し、組織的計画的に研究を発展・充実させるための取組が長期研究方式である。

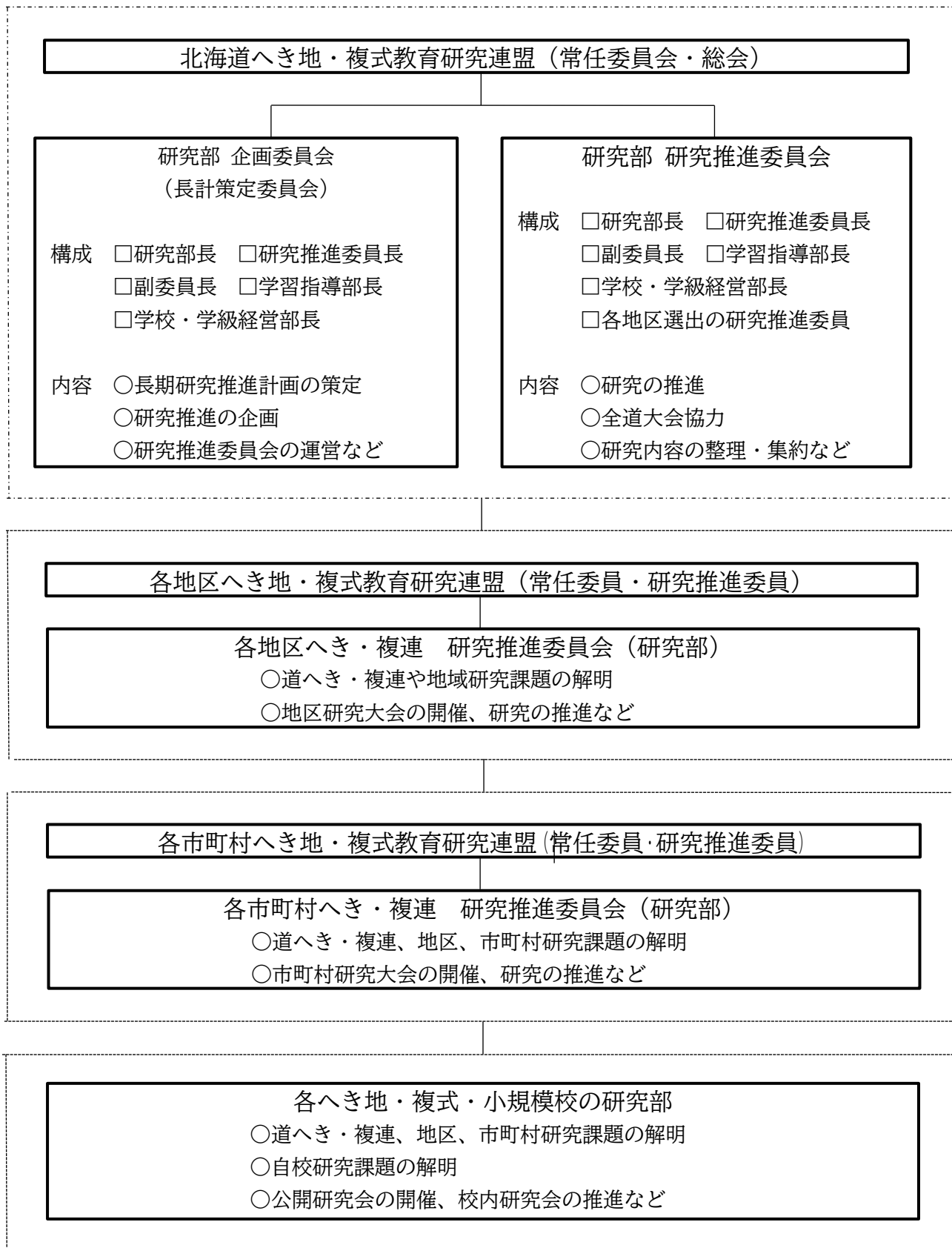
また、へき地・複式・小規模校では、三特性の劣性部分を克服するための課題に直面している。道へき・複連では、これらを踏まえ、課題解決・解明のため「学校・学級経営の深化・充実」と「学習指導の深化・充実」に関する分野別目標を掲げ、それら2分野を更に課題別に分類し、課題解明・解決のための具体的方策と研究内容を示した。このように、統一された研究主題に基づき、それぞれの課題の解明・解決に向けた組織的な取組が課題別研究方式である。これまで2分野8課題で解明・解決に当たってきたが、第10次長期5か年研究推進計画においてはそれらを整理統合し、2分野6課題とし、全国へき地教育研究連盟の課題との整合性をもたせた。

学校・学級経営分野では、学校や地域の実態を踏まえた教育課程の編成が課題となる。また、少人数であることから、合同学習や集合学習など、教師の協業化や学校間交流が課題となる。さらに、へき地の学校は、地域の文化センターとしての役割を持つことから、家庭や地域社会との連携

が課題となる。学習指導分野では、少人数・複式学級という特性を考慮して授業を展開しなければならないことから、学年別指導、同内容指導など指導計画や指導方法の工夫が課題となる。また、地域の自然環境・社会環境をプラスに生かした学習内容や学習指導過程の改善も課題となる。

一方、へき地・複式・小規模校では、学校のみならず、地域の抱える課題や教育の在り方そのものまでを含む幅広い内容を対象とした総合的な研究が求められる。そこで、全道の仲間の英知を結集し、共同化による組織的・計画的な実践研究を進めることや、実践研究の交流・討議する場を大切にしていくことにより、成果と課題の共有化を図ることが解決につながると考えた。このように、教師一人一人の技量に頼るのではなく、研究結果を共有財産として広く生かす取組が共同研究方式である。

《道へき・複連の共同研究組織》



2 計画策定のための基本方針

道へき・複連第10次長期5か年研究推進計画策定にあたっては、以下の基本方針に基づいて行った。

- (1) 第9次長期5か年研究推進計画に基づく研究・実践のまとめをもとに、研究成果と課題について検討し、その継承・発展としての研究推進計画とする。
- (2) 研究主題については、第9次までの主題を発展的に継承するとともに、全国へき地教育研究連盟「第9次長期5か年研究推進計画」との密接な関連を図る。
- (3) 長期・課題別・共同研究による研究方式をとる。研究期間は5か年とし、年度ごとにPDCAサイクルの発想を導入して改善を図りながら実践を積み重ねていく。前期3年は、研究・実践を蓄積しながら、創造的発展を図る期間〔実践研究検証期〕とし、後期2か年は成果を典型化する等、集約・整理する期間〔実践研究整理期〕とする。
- (4) 課題項目を6課題に整理統合し、全国へき地教育研究連盟の課題との整合性をもたせた。
- (5) 研究推進計画の立案・実施にあたっては、各関係機関・団体との連携を密にするとともに、道へき・複連会員の意向を反映させる。
- (6) 第10次長期5か年研究推進計画に、新しく告示された学習指導要領や北海道教育委員会より示された新しい教育計画、新しい教育の動向を踏まえた特徴的課題等を反映させる。

3 研究主題

「主体的・協働的に学び、
ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」
～児童生徒一人一人が仲間とつながり、
地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

研究主題の解説

今日の社会情勢は、高度情報化、グローバル化の進展、少子高齢化など、急激に変化している。子どもたちがこの社会の中で生き抜いていくには、様々な資質や能力が必要となる。新学習指導要領においては、「基礎的・基本的な知識及び技能の習得」「課題を解決するための思考力、判断力、表現力」「豊かな心や創造性の涵養」「健康で安全な生活」「豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実」などが求められている。また、北海道教育委員会から示された新しい教育計画では、自然豊かな北の大地で、世界を見つめ、自立の精神にあふれ、自らの夢に挑戦し、実現していく人を育む『自立』と、ふるさとへの誇りと愛着を持ち、これからの社会に貢献し、共に支え合う人を育む『共生』が、基本理念として掲げられている。

そこで、我が国や本道の教育の今日的な動向や、道へき・複連の第9次長期5か年研究推進計画の成果と課題を踏まえるとともに、新しい時代の北海道教育を創造的に築き担っていくことをめざして、上記のような研究主題を設定した。

《主体的・協働的に学び》

「主体的・協働的に学び」とは、児童生徒が自ら課題を見出し、自ら学び自ら考え、主体的に判断し行動する力を培うことであり、分かったことを伝え合い交換し合い、それらを統合し合うことでより高いものを求める、学びの連続性を志向するものである。

したがって、各学校では、基礎的基本的な内容と問題解決能力を身に付けさせるとともに、自ら学ぶ意欲を高め、生涯にわたって学ぶ姿勢を育てることが大切である。

そのためには、児童生徒同士の信頼ある人間関係の上に、児童生徒が相互に意見を発信し、耳を傾け、相互に啓発できる学習環境をつくる必要がある。また、地域社会の中で豊かな自然環境などを生かし、体験的な学習や問題解決的な学習を展開していくことが重要である。

《ふるさとへの誇りと愛着をもった》

少子高齢化による人口減少など、社会が大きく変貌を遂げている中、子どもたちにふるさとへの愛着や誇りを育み、地域社会の一員としてまちづくりにかかわり、ふるさとに生きる自覚を涵養することが求められている。特に人口の少ない過疎地においては、将来的に集落が消滅するなど限界集落の問題も深刻化している。

そこで、教育活動全体を通して、子ども自身が自分の生まれ育った地域に関心をもち、地域と関わり、郷土を学び郷土を愛する心を育む必要がある。そのためには、自然や文化などの地域の特色ある教育資源を積極的に活用したり、地域の人材を活用した学習を展開したりするなど、地域特有の文化や歴史、民族についての学習の充実を図る必要がある。

道へき・複連70年の実践的研究の根底には、「ふるさと」を舞台にして展開し創造してきた“地域に根ざした教育活動”があり、へき地・複式・小規模校においては、「ふるさと」の開拓に中心的役割を果たしてきたという自負もある。

各学校においては、今まで以上に学校を地域に開き、地域の教材化や人材活用など自然環境・社会環境を積極的に活用し、「地域に根ざした教育」を進めていく必要がある。

《人間性豊かな》

「人間性」は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力」とともに「生きる力」の根幹をなすものであり、知・徳・体バランスのとれた全人的な人格形成に必要な感性である。現在、社会全体のモラル低下や大人社会が「次世代を育てる心を失う危機」にあることから、児童生徒の健全な心を育成するために、家庭や地域社会との連携をより一層深めた取組が求められている。

そのためには、道徳教育の充実や、学校内外における社会的活動や自然体験活動を促進し、個性の伸長と多様な人々との協働を通して、「他人を思いやる心」「感動する心」「生命を大切にする心」などを育成していくことが大切である。

各学校においては、へき地・複式教育が蓄積してきた実践的な研究の成果を生かし、「ふるさと学習」など家庭・地域社会と連携した豊かな体験活動を通して、児童生徒の内面に根ざした創造性あふれる教育の充実に努めることが重要である。

研究副主題について

研究副主題である「児童生徒一人一人が仲間とつながり地域とともに『生きる力』を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして」は、へき地・複式教育の特性を積極的に生かし、仲間とのつながり、地域とのつながりを通して「生きる力」の伸長を図っていくことを目指している。へき地・複式教育がこれまでに積み上げてきた「学校・学級経営」は、家庭・地域社会と一体となった「地域に根ざした学校・学級づくり」であり、「学習指導」は、児童生徒が進んで問題をとらえ、仲間と協力しながら問題解決していく「主体的・創造的な学び合い」である。へき地・複式教育のプラス面を生かした教育活動は、「生きる力」を育成するという観点から、複式学級を有する学校のみならず、あらゆる学校が推進すべきものである。

第10次長期5か年研究推進計画の研究主題は、これまでのへき複の理念と、変化の激しい時代に求められる新しい力を合わせる形で設定している。そのために必要な「人や地域との関わり」と「生きる力」の理念を具体的に示すことが必要と考え、研究副主題に反映させた。

へき地・複式教育推進の観点

道へき・複連の第10次長期5か年研究推進計画（以下、第10次長計）は、全道各地のへき地・複式・小規模校が、長期・課題別・共同研究方式による実践的な研究を進める中で、それぞれのもつ教育課題を解明・解決し、相互に交流することによって、へき地・複式教育の一層の充実と発展をめざして策定したものである。

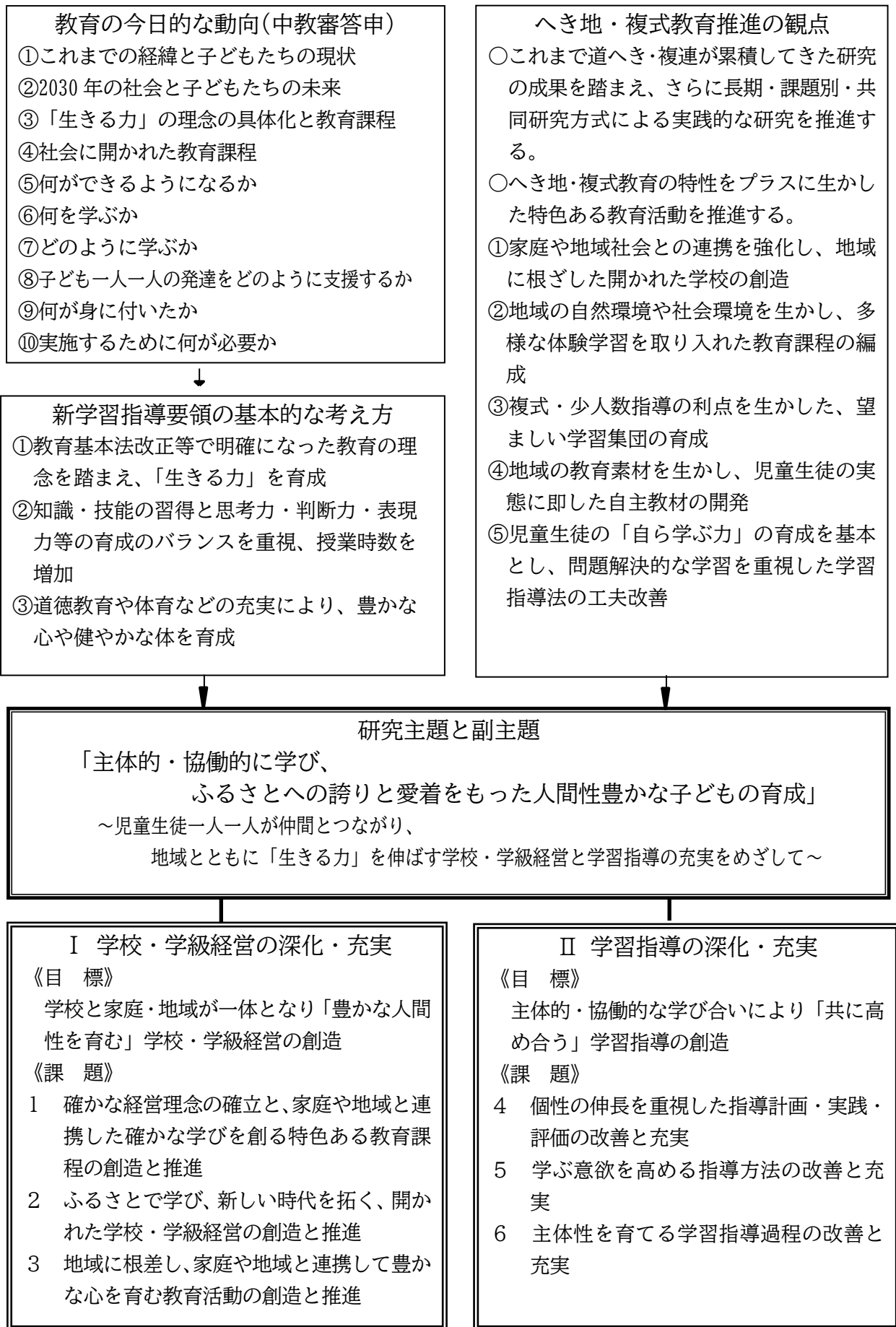
したがって、各地区・各学校においては、今までの研究の成果と課題を踏まえつつ、新しい研究主題・分野別目標の達成をめざして、さらに実践的な研究を積み重ね、成果の蓄積と典型化・定型化を図っていくことが大切である。

研究主題・分野別目標の達成と課題の解明・解決を図るためには、以下のような観点で、へき地・複式教育を具体的に推進していくことが大切である。

- (1) へき地・複式教育の特性をプラスに生かした特色ある教育課程の編成に努める。
- (2) 地域に根ざし、家庭や地域社会との連携をより充実させ、「開かれた学校」の創造に努める。
- (3) 地域の自然環境や社会環境を生かした体験的な学習を積極的に取り入れ、児童生徒の感性を育む教育活動の推進を図る。
- (4) マネジメント・サイクルを生かした教育課程の検証と改善を図り、「集団化」と「個別化」を適切に機能させた、きめ細かい指導計画の創意・工夫に努める。
- (5) 地域の自然・歴史・伝統・文化・産業等を素材とした教材開発の創意・工夫に努める。
- (6) 児童生徒の主体的・創造的な学習態度の育成を基本とし、問題解決的な学習を重視した学習指導過程の創意工夫に努める。

近年、交通機関の発達、高度情報化の進展、伝統的な生活様式や習慣の希薄化、若年者の都市への流出など、へき地・小規模・複式学級を有する学校を取り巻く環境は大きく変化した。それに伴い高齢化・過疎化、統廃合による学校減少が一気に進み、へき地校は経済的・社会的にも厳しい状況となっている。しかし、「へき地には教育の原点がある」「へき地にこれからの教育の展望がある」との言葉をかみしめ、自信と誇りを持って教育実践に向かう熱意が大切である。また、「地域に根ざした教育」「地域に開かれた学校」の意味を踏まえ、「生きる力」を育成する教育理念の実現のため、児童生徒一人一人を伸ばす教育、豊かな自然を活用した体験学習、家庭・地域社会との密接な連携による教育活動を取り入れた積極的な実践研究が推進されることを期待している。

4 第10次長期5か年研究推進計画の全体構成



第Ⅱ章 胆振へき地・複式教育連盟の研究

胆振へき地・複式教育連盟の基調と構想

【研究主題】

主体的・協働的に学び、

ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成

～児童生徒一人一人が仲間とつながり、地域とともに

「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

1 胆振へき地・複式教育連盟のあゆみ

胆振のへき地・複式教育研究は、昭和23年の道へき・複連の結成とともに始まり、現在に至っている。

平成8年度には、全道から660名の参加者を迎え『陽光あふれる胆振の大地で、すこやかに育つ子らに、ふるさとのぬくもりと感動を!!』を合言葉に、第45回全道へき地複式教育研究大会胆振大会（14市町村、14分科会会場）を開催した。20年度はプレ大会の準備年度として管内ブロック研究大会を一時休止。21年度にはプレ大会を開催した22年度は第59回全道へき地複式教育研究大会胆振大会（9市町、9分科会会場）を開催し高い評価をいただいた。22年度は東西ブロック研究大会、教員研修会をともに休止したが、平成23年度からは再開し、管内のへき地複式教育の充実に向けて研鑽を重ねてきた。

令和2年度には、新型コロナウイルス感染症の流行により、参加者が集まる会同式の実施ができないために、教員研修会は中止、東西ブロック研究大会はオンラインを活用した実施を試みている。

令和3年度は、東西ブロック研究大会および教員研修会を実施せず、全道大会に向けて市町ブロック研究の体制を取り、本大会に向けて学校の特色や地域性を意識した研究を進めてきた。

令和4年度は、第71回全道へき地複式教育研究大会（全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会）を参集型とオンライン配信並行のハイブリッド型で実施した。コロナ禍でありながらも400名ほどの参加があり、授業の在り方について御示唆・御助言をいただくことが出来た。

年度	研究大会			学校教員研修会		
	東西	ブロック	学校名	東西	ブロック	学校名
19年度	西	新A	豊浦大和小	東	新C	苫小牧樽前小
	東	新D	むかわ生田小			
20年度	プレ研・全道研 準備年度			西	新B	伊達大滝小

21年度	全道へき複研 胆振プレ大会			東	新D	むかわ富内小
22年度	第59回全道へき地複式教育研究大会 胆振大会					
23年度	西	A	豊浦礼文華小	東	C	安平安平小
24年度	西	B	伊達市黄金小	東	D	むかわ仁和小
25年度	東	D	苫小牧樽前小	西	A	壮瞥久保内小
26年度	東	C	白老社台小	西	B	室蘭喜門岱小
27年度	西	A	豊浦大岸小	東	D	むかわ宮戸小
28年度	西	B	伊達大滝小	東	C	安平安平小
29年度	東	D	むかわ富内小	西	A	豊浦礼文華小
30年度	東		安平遠浅小(中止)	西		伊達関内小
31年度	西		伊達黄金小	東		白老虎杖小
令和2年度	西		洞爺湖温泉小	東		苫小牧樽前小(中止)
3年度	開催しない(各校の実践を深め、各地区にて研究推進)					
4年度	道へき胆振大会ファーストステージ					
5年度	道へき胆振大会ファイナルステージ					

2 胆振へき地・複式教育連盟の現状

時代の変化に柔軟に対応しながら、実践研究を中心に積み上げてきた胆振へき地・複式教育連盟の研究であるが、社会環境の大きな変化と少子化に対応した学校の統廃合が進み加盟校が減少している。平成8年度には加盟校が管内14市町村39校、22年度は9市町18校、令和3年度は8市町13校、令和5年度からは6市町10校(小学校9校、義務教育学校1校)体制となる。今後、統合の可能性がある小規模校もあり、加盟校の減少は研究推進において厳しい状況になっている。

しかし、目の前に子どもが一人でもいる限り、我々へき地教師は共に手を携えて、へき地三特性(へき地・小規模・複式形態)をプラスに捉え、「少人数だからこそできる教育」「地域の自然や人材をフル活用したへき地だからこそできる教育」を地域に応じた「特色ある教育活動」として力強く推進し、地域や保護者の信頼や負託に応えていかなければならない。

少子化により新たに複式校となる学校もあるが、連盟未加盟校の学校もあり、複式授業の研修機会を担う本連盟の役割は大きい。ICTの効果的活用や遠隔授業の展開など時代の変化に則した今後のへき地複式教育の実践・充実に向けて、実態や課題に応じた研究を進めていく。

3 道へき・複連 第10次長期5か年研究推進計画と胆振へき地・複式教育連盟の研究推進について
これまでの胆振へき地・複式教育連盟の研究は、道へき・複連の研究推進計画に基づいて進められてきた。従って、令和元年度から、第10次長期5か年研究推進計画（1年次に基づいた2分野6課題との関連を図りながら、学校や地域の特性を踏まえ、地域に根ざした魅力ある教育活動を推進する中で、胆振の未来を担う子ども達に、豊かな心と確かな学力を育成するために、各学校がそれぞれに研究主題を設定し課題究明にあたってきた。

前期3年間は、第9次長計までの研究の成果と課題を整理し、さらなる充実・発展を図るとともに、教育の動向を踏まえつつ、各学校の研究と整合性を図りながら研究計画を立て、実践し、検証していく期間とする。また、後期2年間は前期3年間の成果と課題を整理し、典型化・定型化に努め、研究・実践の一層の充実と発展を図る期間とし、令和4年度からは2年間、道へき複連研究大会胆振大会を実施する。

(1) 研究主題

「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」
～児童生徒一人一人が仲間とつながり、
地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

(2) 研究の基本的なおさえ

①研究の基本構想

i 道へき・複連第10次長期5か年研究推進計画との関連を見通し、学校の特性を生かし、2分野6課題による課題別研究方式を継承した研究推進に努める。

◇学校・学級経営の深化・充実

《目 標》

学校と家庭・地域が一体となり「豊かな人間性を育む」学校・学級経営の創造

◇学習指導の深化・充実

《目 標》

主体的・協働的な学び合いにより「共に高め合う」学習指導の創造

ii 第10次長期5か年研究推進計画においても、課題の解明・解決に向けた実践的研究を基盤に、「長期・課題別・共同研究方式」を継承していく。また、「へき地・小規模・複式形態」の三特性をプラスに生かした特色ある教育活動の推進、「生きる力」の育成、「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力」育成のバランス、「豊かな心や健やかな体」の育成を基本としたへき地・複式教育の推進を図る。

iii 学習指導要領、北海道教育委員会より示された北海道教育推進計画、中教審答申等の主旨を踏まえ、実践研究の交流を活発に行い、望ましい指導方法の改善・充実に努める。

iv 各学校の研究や各市町における研究・実践の成果等を継承・発展させるため、研究紀要を発行する。

②へき地複式教育の三特性を生かす

《へき地性》

- ・短所～①依頼心が強く、計画性に乏しい、②語彙に乏しく表現力が不足し、③思考や発想の多様性・倫理性に乏しい、④社会性が乏しく、主体性に欠ける。

生活が便利になり、他律の方向に流される近年の児童の一般的な傾向

- ・長所～①明朗で快活、②純真で素朴、③礼儀正しく仲がよい、④根気強く労力をいとわない、⑤協調性がある。

心の豊かさ、人間性の基盤として大切な資質。地域の自然や共同生活の中で培われた文化



◎へき地性の長所を生かした教育活動の推進

《小規模性》

小規模校の定義→小学校5学級以下・中学校2学級以下の複式学級を持つ学校

小規模校のよさ



- ・個に応じた指導、児童生徒一人一人が主役となる活動の推進
- ・少人数であることを生かし、地域に根ざした体験的な学習の推進
- ・教師と児童生徒、児童生徒同士の好ましい人間関係の構築
- ・学校、家庭、地域総がかりで、地域に根ざした教育の推進

《複式形態》

複式学級編制基準→他の学年と合わせて16人までのときは、これをもって1学級とする。(1年生を含む時は8人)

三特性の中で最も重視すべき特性



- 2つ以上の学年で構成され、能力差・学年差が生じやすい。
- 大きな集団での社会的経験の場が不足しがちになる。
- 指導計画の累計により、学習指導計画を工夫しなければならない。
- 教育課程編成上の特例により、学年別によらない指導計画を工夫できる。
- 個に応じたきめ細かい指導を行うことができる。
- 上学年と下学年を交互に経験することで、リーダーと協力者の両方の立場を経験することができる。



☆複式形態による異年齢集団での体験を人間形成上、大切な要素と捉えた教育活動の推進

③研究方法

《長期 研究方式》

いつまでに・どのようなことを・どのようにして・何のために・何をめざして

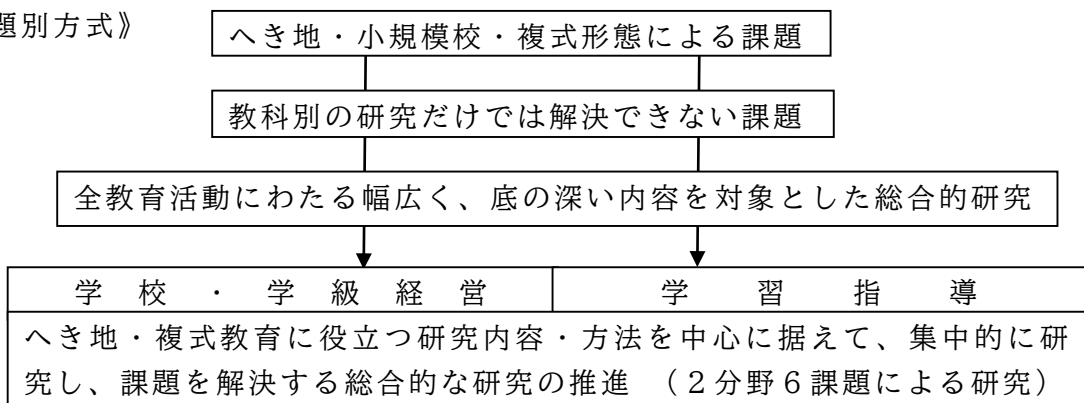
研究主題を統一し、組織的計画的に研究を発展・充実させるための取組

すぐれた研究の集約、累積、継承、発展を図る

内容・方法（第10次長期5か年研究推進計画）

前期3か年	10次長計の研究の成果と課題を整理し、実践研究を通して創造的発展を図る。
後期2か年	前期3年間の成果と課題を整理し、典型化・定型化に努め、研究・実践の一層の充実と発展を図る。

《課題別方式》

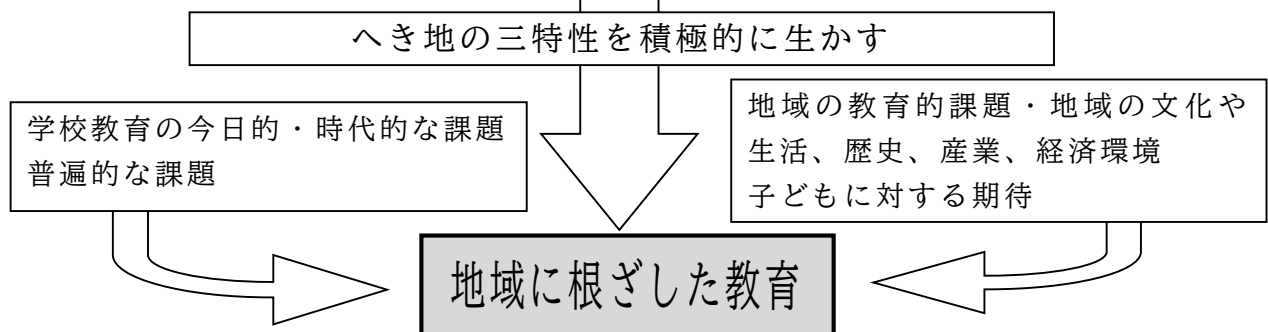


内容・方法

- 三特性からくる児童生徒の学習・生活実態を十分に踏まえ、児童生徒一人一人の持つ課題を解決・解明するための実践的な研究を構築する。
- 「学校・学級経営」と「学習指導」という2つの分野それぞれの課題を焦点化し、両面から研究主題を追求し、相互の深化・充実を図る。
- 道へき・複連により蓄積された優れた研究・実践や各校の優れた実践の典型を自校にあてはめ、「いつでも」「どこでも」「だれでも」が実践できるような定型化を図る。

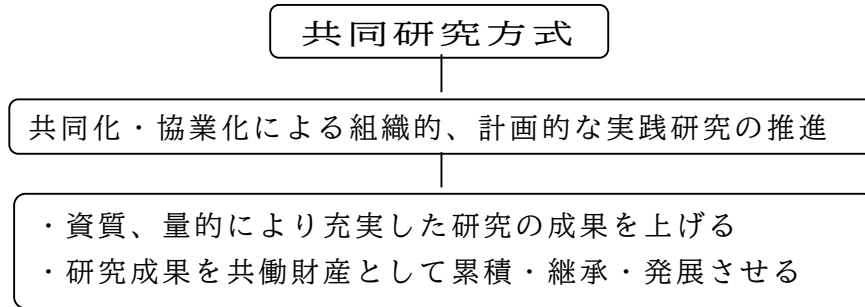
☆地域の教育課題

- 地域の実態に即した教育課程 ———
- ・学習の主体としての児童に注目しつつ、そこから教育活動を出発させる。
 - ・教室の中だけで定型的な授業をするのではなく、地域の環境条件を活用し創意工夫を加えていく。
 - ・学校と地域社会との信頼、協力を確立する。

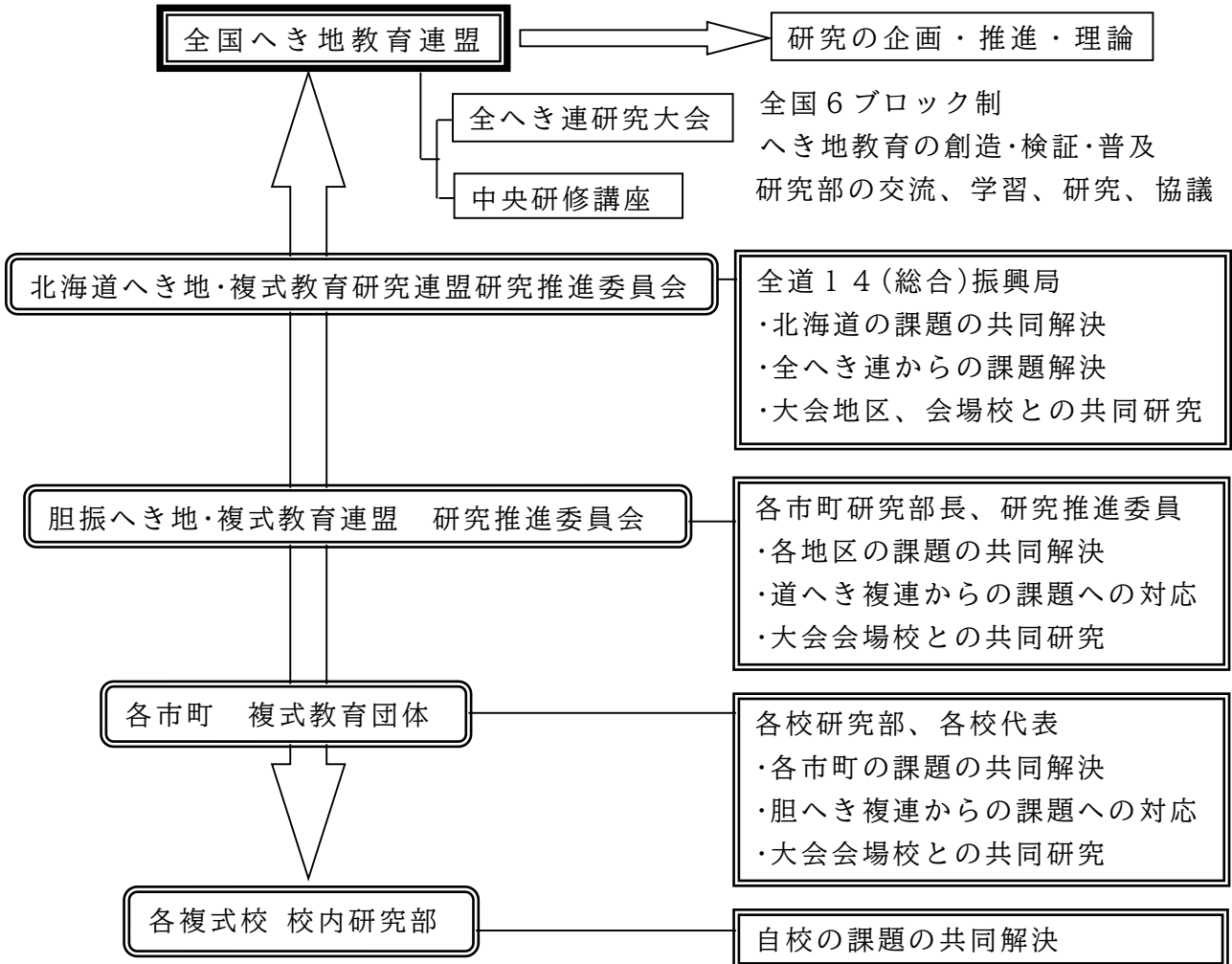


《共同研究方式》

◎ 意義



◎ 研究組織及び研究内容



(3) 研究の重点

- ①道へき・複連第10次長期5か年研究推進計画の実践とその推進
- ②教育課題、研究事業推進に関わる関係機関や団体との連携
- ③研究紀要「いぶりへき地複式の教育」の発刊

(4) 活動内容

- ①管内研究大会による共同研究体制の確立と実践研究の推進
【令和4・5年度は道研究大会開催】
- ②研究推進委員会による研究推進体制の確立、及び道へき・複連研究推進委員会との連携による共同研究体制の確立

(5) 胆振へき地・複式教育連盟研究大会及び研究推進体制

- ①各学校の研究主題と道へき・複連第10次長期5か年研究推進計画2分野6課題との関連性を図る。
- ②胆振管内8市町（登別市、厚真町を除く）を東西の2ブロックに再編し、ブロック毎に課題の解明に向けて協議、意見交流をもとに研究を推進する。また、研究推進委員会を中心に、課題の解明や大会に向けての積極的な協力体制を図る。
- ③研究推進委員会は、胆振へき地複式教育の研究体制の確立、第10次長期5か年研究推進計画の研修、研究紀要等の作成にあたる。（年間2回の実施）
☆構成 ①研究部長1名 ②研究推進委員長1名 ③研究推進副委員長2名
④各市町村研究推進委員（8名）
- ④研究紀要の概要については、各学校では、2分野6課題にそった研究実践を紹介する
- ⑤研究部長、研究推進委員長、研究推進副委員長による研究推進役員会は、研究推進委員会における企画・運営・理事会との連絡調整に当たる。（役割分担は、研究部長は道へき複連の業務、研究推進委員長は胆振へき複連研究推進委員会の業務）
- ⑥令和3～5年度は、東西ブロックではなく、研究大会に向けて、市町のブロック（開催校と協力校）ごとに研究を進めている。
- ⑦令和6年度からは、加盟校減少により、平成19年度より実施してきた東西ブロック体制を改め、近隣地域ごとの3ブロック体制で研究を進めていく見通しである。

ブロック	地域	学校
東部ブロック	苫小牧、白老	樽前、虎杖、竹浦
中部ブロック	室蘭、伊達	喜門岱、関内、大滝徳舜瞥
西部ブロック	洞爺湖、豊浦	とうや、洞爺湖温泉、礼文華、大岸

(6) 研究推進委員会の活動

①研究推進委員研修会（年間2回）

i 第1回研究推進委員研修会

ア. 本年度の研究組織並びに研究計画、研究内容について

- ◎組織確立と管内研究大会の推進体制の確認、学校教員研修会の参加・準備
- ◎胆振へき複連としての研究推進課題の検討と決定

イ. 道へき複連研究推進との関連

- ◎全道へき地複式教育研究大会への参加

ウ. その他

ii 第2回研究推進委員研修会

ア. 胆振へき地・複式教育連盟研究大会の推進計画

イ. 各学校研究推進概要報告

ウ. 第10次長期5か年研究推進計画の学習と実践交流の推進と反省

エ. 研究紀要の作成について

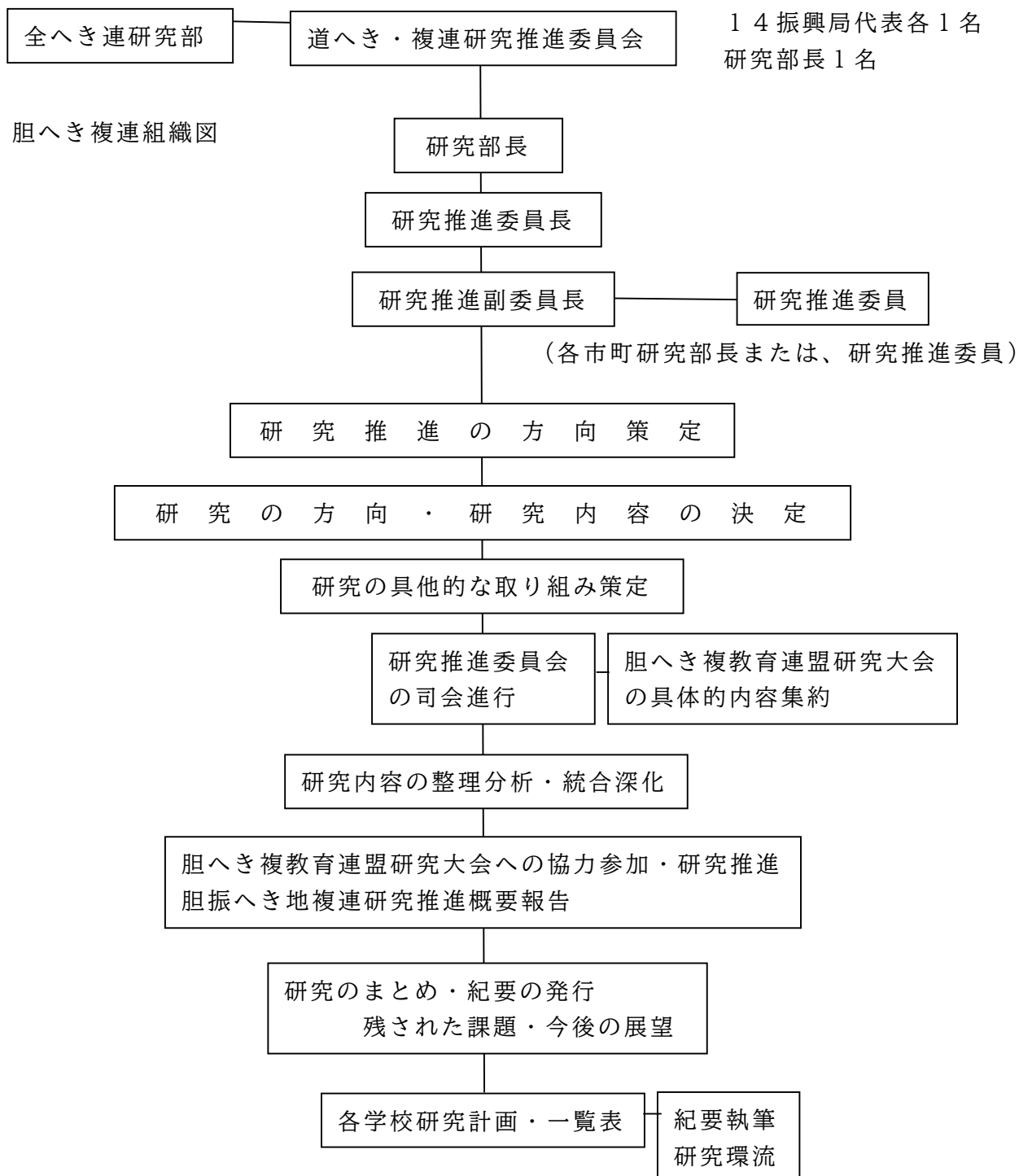
- ◎研究推進委員会として発行する「研究紀要」について

（各校の研究内容と実践をまとめ、各加盟校に配付するもの）

(7) 研究部通常業務日程（令和3～5年度はのぞく）

期 日	事業名称及び内容等	備考
6月 6～7月 8月	◎第1回研究推進委員研修会「研究推進計画など」 ◎胆振へき地複式学校教員研修会	参加支援
9～10月 9～11月	◎第2回研究推進委員研修会「胆へき複連研究大会」 計画「研究紀要」の作成等について ◎全道へき地複式教育研究大会 ◎胆振へき地複式教育連盟研究大会	参加支援

(8) 研究部組織



研究主題・副主題	
<p>「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」 ～児童生徒一人一人が仲間とつながり、 地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～</p>	

分野別目標と課題		
学校・学級経営の深化・充実	目標	学校と地域・社会が一体となり「豊かな人間性を育む」学校・学級経営の創造
	課題	1 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進 2 ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進 3 地域に根差し、家庭や地域と連携して豊かな心を育む教育活動の創造と推進
学習指導の深化・充実	目標	主体的・協働的な学び合いにより「共に高め合う」学習指導の創造
	課題	4 個性の伸長を重視した指導計画・実践・評価の改善と充実 5 学ぶ意欲を高める指導方法の改善と充実 6 主体性を育てる学習指導過程の改善と充実

研究の手だて				
過程	年次	I 学校学級経営の深化・充実	II 学習指導の深化・充実	継続
実践研究検証期	2019年度 (一 年次)	1 9次長計の成果・課題を整理し、10次長計の課題及び研究内容を明確にして、各校の特色ある教育課程の編成・実施・評価・改善に努める。	1 9次長計の成果・課題を整理し、10次長計の課題及び研究内容を明確にして、一人一人の個性の伸長を重視した指導計画・実践・評価の改善に努める。	空知大会
	2020年度 (二 年次)	2 年次ごとの研究推進計画を策定する。とりわけ、地域に根ざした魅力ある教育活動の創造・発展に努める。	2 年次ごとの研究推進計画を策定する。とりわけ、指導目標の設定、学習指導過程や教材の工夫、学習活動における支援、評価方法の工夫に努める。	檜山大会
	2021年度 (三 年次)	3 学校や地域の特性を踏まえ、年次ごとに研究理論を構築し、その実践化に努め、記録を累積する。 4 近隣校・異校種学校や地域社会との共同研究体制の確立に努める。	3 年次ごとに研究理論を構築し、その実践化に努め、記録を累積する。 4 近隣校・異校種学校や地域社会との共同研究体制の確立に努める。	オホーツク大会
実践研究整理期	2022年度 (四 年次)	1 実践研究検証期の基盤に立ち、一人一人の個性を伸長し、豊かな心を育てる研究の系統的・発展的実践と記録の累計を図る。	1 実践研究検証期の基盤に立ち、一人一人の個性を伸長し、確かな学力を育てる学習指導方法の究明に努め、典型化・定型化を図る。	胆振大会
	2023年度 (五 年次)	2 研究内容に即した評価方法の工夫に努める。 3 第10次長計の研究内容をまとめ、成果と課題を明らかにし、第11次長計への展望を明確にする。	2 少人数・複式指導研究に即した評価方法の工夫に努める。 3 第10次長計の研究内容をまとめ、成果と課題を明らかにし、第11次長計への展望を明確にする。	胆振大会

第三章 全道へき地複式教育研究大会 胆振大会に向けた研究推進

1 研究主題

主体的・協働的に学び、

ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成

～児童生徒一人一人が仲間とつながり、地域とともに

「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

2 大会スローガン

産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から

子どもたちに未来へ飛躍する力を

3 胆振大会の方針

(1) 道へき・複連の第10次長期5か年研究推進計画(5年次)は、全道各地のへき地・複式・小規模校が、長期・課題別・共同研究方式による実践的な研究を進める中で、それぞれのもつ教育課題を解明・解決し、相互に交流することによって、へき地・複式教育の一層の充実と発展をめざして策定したものである。学校の特性を生かし、2分野6課題による課題別研究方式を継承した研究推進に努める。

I 学校・学級経営の深化・充実

《目標》学校と家庭・地域が一体となり「豊かな人間性を育む」学校・学級経営の創造

II 学習指導の深化・充実

《目標》主体的・協働的な学び合いにより「共に高め合う」学習指導の創造

(2) 「へき地・複式教育の特性をプラスに生かした特色ある教育課程の編成」「地域に根ざした開かれた学校の創造」「多様な体験学習を取り入れた教育活動の推進」「マネジメント・サイクルを生かした教育課程の検証と改善を図り、きめ細かい指導計画

の創意工夫」「地域の自然・歴史・伝統・文化・産業等を素材とした教材開発の創意工夫」「主体的・創造的な学習態度の育成を基本とし、問題解決的な学習を重視した学習指導過程の創意工夫」「GIGA スクール構想の趣旨の証明」を基本としたへき地・複式教育の推進を図る。

(3) 第10次長期5か年研究推進計画に、学習指導要領や北海道教育委員会より示される北海道教育推進計画等の主旨を踏まえ、実践研究の交流を活発に行い、望ましい指導方法の改善・充実に努める。

(4) 市町のブロック（開催校と協力校）のネットワークを形成し、「ICTを効果的に活用した授業改善」「個別最適な学びと協働的な学びの実現」「遠隔合同授業」「デジタル教科書を活用した授業」などの研究を進める。

(5) 各学校の研究や各市町における研究・実践の成果等を継承・発展させるため研究紀要を発行する。

(6) 実践並びに研究に関する教育関係機関や団体との連携を図る。

4 研究内容

第10次長期5か年研究推進計画の4・5年次として、実践研究整理期を迎え、2分野6課題との整合性を念頭に置き、第10次長期計画の推進を見据えて胆振大会に向けて実践を行ってきた。

「I 学校・学級経営の深化・充実」においては、年次ごとの研究推進計画を策定し、地域に根差した魅力ある教育活動の創造・発展に努め、学校や地域の特性を踏まえた研究を進めてきた。「II 学習指導の深化・充実」においては、個別最適な学びの実現に向けた指導方法やICTの活用、指導目標の設定、学習指導過程や教材の工夫、学習活動における支援・評価方法の工夫に努める等、研究を進めてきた。

5 「I 学校・学級経営の深化・充実」における研究の取組

(1) 目標

学校と地域・社会が一体となり「豊かな人間性を育む」学校・学級経営の創造

(2) 課題 1

確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進

1 学校の教育目標の達成に向け、児童生徒の確かな学びを創る経営の創造と推進

2 へき地三特性（へき地性、小規模性、複式形態／以下「三特性」）を生かし、地域に根差した、特色ある教育課程の創造と推進

3 児童一人一人の個性や能力を生かし、多様な体験を重視した教育活動の充実

《課題把握のために》

へき地・小規模・複式学級を有する学校（以下「へき・複・小規模校」）では、基礎的・基本的な知識や技能の習得に向けた確かな学びを創るために、学校のもつ三特性を自校の教育活動の中に積極的に生かし、家庭や地域と密接な連携を図り、教育活動を推進していくことが求められている。さらにその三特性を生かすため、学校・学級経営の構造を明確化して、特色ある教育の実践を進めることが必要である。また、「生きる力を育成する教育理念を実現するために、「へき地に教育の原点がある」という言葉の意味することを踏まえつつ、これまでのへき地・複式教育が積み上げてきた実績を反映させた積極的な研究・実践が重要である。したがって、各学校においては、各教科の指導や言語活動、伝統や文化に関する教育、総合的な学習の時間等を充実させ、児童生徒一人一人の個性や能力に応じた学習指導を展開し、教職員が協働して確かな学びを創るための特色ある教育活動の充実を図ることが必要である。

(3) 課題 2

ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進

1 ふるさとへの愛着と誇りの育成を図る学校・学級経営の創造

2 新しい時代を、国際感覚豊かにたくましく生きる力を育成する経営の創造

3 異校種間との交流・連携等を通じた豊かな教育の推進確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進

《課題把握のために》

へき・複・小規模校では、生涯学習の基礎を培うという観点から、変化の激しい社会

を主体的に切り拓き、心豊かにたくましく生きる力をもった児童生徒を育てていくことが求められている。また、国際色豊かな新しい時代の中で、自己を確立し心豊かにたくましく生きていくためには、ふるさとで育ってきた自分を意識し、ふるさとに誇りをもつことが重要である。したがって、各学校においては、家庭・地域との連携を強化し家庭・地域の教育力を積極的に活用することにより、ふるさとへの関心を高めるとともに、新しい時代に対応した教育を充実させた経営を創造することが必要である。

(4) 課題3

地域に根差し、家庭や地域と連携して豊かな心を育む教育活動の創造と推進

- 1 地域との連携を密にし、豊かな心を育む教育の創造
- 2 伝統と文化を継承・発展させ、個性豊かな文化を創る教育の推進
- 3 人間尊重の精神に基づいた、教育の指導計画の充実と教育活動の推進で学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進

《課題把握のために》

へき・複・小規模校では、「地域が学校や児童生徒を育てる」といった特質が存在し家庭や地域が一体となった教育が行われている。学校には、家庭や地域と連携し、心豊かな児童生徒の育成を推進していくことが求められている。そのため、地域の特性や環境を生かした教育課程を編成・実施し、児童生徒一人一人の個性や能力に応じた教育活動を、各教科・道徳、特別活動等の関連を図りながら計画的に実践していくことを通じて、豊かな心を育成していくことが重要である。また、各学校においては、地域と一体となった主体的な活動を通じて、人間尊重の精神を高め、郷土理解を深め、社会性を培う教育活動の充実を図ることが必要である。

6 「Ⅱ 学習指導の深化・充実」における研究の取組

(1) 目標

主体的・協働的な学び合いにより「共に高め合う」学習指導の創造

(2) 課題4

個性の伸長を重視した指導計画・実践・評価の改善と充実

- 1 基礎的・基本的な内容の定着と、個性を生かした指導計画の作成や実践の充実
- 2 地域の教育資源を生かし、主体的・対話的で深く学ぶ指導計画の作成や実践の充実
- 3 わかる喜びを味わわせる指導方法や指導体制、評価の工夫と改善

《課題把握のために》

へき・複・小規模校では、各教科の目標や特性を踏まえつつ、指導すべき内容を重点化し、児童生徒一人一人が意欲的に学習に取り組みながら、基礎的・基本的な内容を確実に定着させる指導計画を作成することが大切である。そのためには、学校をとりまく豊かな自然や地域性などの教育環境を効果的に活用しながら、児童生徒一人一人の知的好奇心や探究心を喚起し、自ら考え主体的に課題を解決しようとする学習活動を展開していくことが必要である。さらに、児童生徒一人一人に「わかる喜び」を味わわせるために、少人数ならではのよさが生きる指導方法や指導体制、評価の工夫と改善を図りながら、「何ができるようになったか」を教職員全体で共有し、一人一人の学びの力を育てていくことが重要である。

(3) 課題5

学ぶ意欲を高める指導方法の改善と充実

- 1 学ぶ楽しさや成就感を体感できる、へき地・複式教育の特性を生かした指導方法の改善と充実
- 2 学習効果を高める個別化・集団化などの指導方法の改善と充実
- 3 地域や家庭との連携を深め、児童生徒の学びを豊かにする学習内容及び指導方法の改善と充実

《課題把握のために》

へき・複・小規模校では、身近な題材をもとに児童生徒が五感をフルに使って多様に感じたり考えたりする力を育てるとともに、少人数の特性を生かして「確かな学力」を身に付けていくことが大切である。そのためには、体験的な学習活動を多く取り入れ、実際に体感させたり活動させたりすることを通して児童生徒一人一人に学ぶ楽しさや成就感を味わわせるとともに、個々が学び方を身に付けるような指導方法の工夫・改善を図ることが必要である。さらに、小規模・少人数だからできる学習内容の個別化や、小規模・少人数では支障が生じる学習内容の集団化を図るなど、柔軟且つ多様な指導方法を工夫しながら、児童生徒の「自ら学び 自ら考える力」を育てていくことが重要である。また、地域からの学びを積極的に推進するには、地域や家庭の教育力を大いに活用して、児童生徒が身近な人々との交流や体験から豊かに学び、地域に主体的に関わろうとする意欲的な態度を育てる指導方法を工夫することが重要である。

へき・複・小規模校では、生涯学習の基礎を培うという観点から、変化の激しい社会

を主体的に切り拓き、心豊かにたくましく生きる力をもった児童生徒を育てていくことが求められている。また、国際色豊かな新しい時代の中で、自己を確立し心豊かにたくましく生きていくためには、ふるさとで育ってきた自分を意識し、ふるさとに誇りをもつことが重要である。したがって、各学校においては、家庭・地域との連携を強化し家庭・地域の教育力を積極的に活用することにより、ふるさとへの関心を高めるとともに、新しい時代に対応した教育を充実させた経営を創造することが必要である。

(4) 課題6

主体性を育てる学習指導過程の改善と充実

- 1 主体的・対話的で深い学びの視点からの、児童生徒一人一人の多様な考え方や学年差・個人差に即した学習指導過程の改善と充実
- 2 教科の特質に応じた問題解決的な学習指導過程の改善と充実
- 3 地域内外の異校種間連携や交流学習等による新たな学習指導過程の改善と充実
地域に根差し、家庭や地域と連携して豊かな心を育む教育活動の創造と推進

《課題把握のために》

へき・複・小規模校では、児童生徒が自分らしさを発揮しながら、課題意識をもって主体的・対話的で深い学びになるように指導過程を改善・充実していくことが大切である。そのためには一人一人の能力や適性に応じたきめ細やかな学習指導を行い、学年差・個人差に配慮する必要がある。また、間接指導場面においても、相互に学び合い高め合う学習指導過程の在り方を追求しながら、児童生徒の実態に即した学習を展開していく必要がある。さらに、これまで典型化・定型化されてきた「複式四段階」の学習指導過程を基本としながらも、柔軟で弾力的な学習指導を行い、児童生徒が「自ら学び自ら考える力」を身に付けるように、教科の特質に応じた問題解決的な学習を取り入れた学習指導過程の改善と充実を図ることが必要である。また、幼・保・小・中・高の異校種間連携や、市町村の枠を越えた学習には、これまでの既成概念にはとらわれない弾力的な運用と実態に即した教育課程の編成と実施が求められている。

7 ファーストステージの成果と課題

(1) 大会の概要

令和4年9月14・15日の2日間、洞爺湖町を全体会場に胆振管内4市町4会場において、第71回全道へき地複式教育研究大会ファーストステージを開催しました。

本研究連盟では、大会開催に向けて2年前より実行委員会を組織し、準備を進めてきました。大会に向けた授業研究においては、北海道へき地複式教育連盟の第10次長期5か年計画に掲げる「学習指導の深化・充実」に係わる3つの課題を受け、主体的・対話的で深い学びと一人一台端末をはじめとしたICTを活用した授業改善による「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて、公開校と協力校による共同研究を行ってきました。また、開催方法においては、参集とオンライン配信によるハイブリッド型で計画し、コロナ禍に対応した新たな研究大会の実施を図りました。

こうした取組を経て、開催された胆振大会ファーストステージは、道外・管外・管内より全会場合わせ、延べ400名ほどの参加がありました。

(2) 分科会

第1分科会 洞爺湖町立とうや小学校 校長 山下 文人	
研究主題	単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探究
副主題	～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	算数 「3年計画・2年次」
公開授業1	授業者：吉村 亮（担任） 3年生 算数 「あまりのあるわり算」
公開授業2	授業者：福山 美沙（担任） 4年生 算数 「割合」
助言者	北海道教育庁学校教育局義務教育課 主任指導主事 富田 元 様 音更町立東土幌小学校 校長 増田 覚 氏

第2分科会 伊達市立大滝徳舜警学校 校長 羽根 秀哉	
研究主題	未来を創る児童・生徒の育成
副主題	～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導5】
教科等・年次	全教科 「2年計画・1年次」
公開授業1	授業者：木村 あゆこ（担任：大滝徳舜警学校） 大谷 真由美（担任：関内小学校） 2年生 道徳 「黄色いベンチ」 ※伊達市立関内小学校との遠隔合同学習
公開授業2	授業者：高橋 淳（担任） 3年生 算数 「重さ」4年生 算数 「式と計算の順序」
助言者	北海道教育庁胆振教育局 義務教育指導班主任指導主事 中尾 育夫 様 北見市立相内小学校 校長 堀田 大次郎 氏

第3分科会 白老町立虎杖小学校 校長 関東 英政	
研究主題	共に高め合う児童を目指して
副主題	～児童の発達に応じた主体的・協働的な学びを通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導5・6】
教科等・年次	全教科 「1年計画・1年次」
公開授業1	授業者：小野 郁 恵（担任：虎杖小学校） 石井 晴 香（担任：竹浦小学校） 5・6年生 道徳 「千羽鶴」 ※白老町立竹浦小学校5・6年生との遠隔合同学習
公開授業2	授業者：古村 瞭 汰（担任） 3年生 国語 「すがたをかえる大豆」4年生 国語 「ごんぎつね」
助言者	北海道教育庁胆振教育局 義務教育指導班指導主事 渡辺 浩輔 様 留萌市立港北小学校 校長 村元 隆一 氏

第4分科会 苫小牧市立樽前小学校 校長 深松 一宏	
研究主題	主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成
副主題	～リーダー学習の取組を通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	算数 「3年次計画・1年次」
公開授業1	授業者：小保内 知 博（担任） 5年生 算数 「わり算と分数」6年生 算数 「円の面積」
公開授業2	授業者：奈良 美 里（担任） 3年生 算数 「かけ算の筆算(1)」4年生 算数 「わり算の筆算(2)」
助言者	北海道教育研究所研究部 研究研修主事 佐藤 昭彦 様 今金町立種川小学校 校長 黒川 貴功 氏

(3) 各分科会の成果と課題（抜粋）

第1分科会	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用することにより、時短やスムーズな授業進行に役に立っていた。 ・児童がICTに慣れることで、意見交流がスムーズに行えていた。自分の意見に自信がもてない児童にとっては友達の見意見を気軽に参考にできる環境が作られていることはとても良い。 ・リーダーによる学習の進め方に子どもの成長が感じられる。リーダーを育てることで、複式で担任が離れたときにも学習が進む。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTの活用方法は、交流だけに限らず、その他どんなことに活かしていけるのかを探る必要がある。 ・ジャムボードの用意など、事前の準備が少し大変な面が感じられる。 ・ジャムボードは考えを消しやすいため、児童が誤答を消してしまう面がある。全体で取り上げたい考えを、少人数の子どもの思考の中から見つけ出す工夫も大切にしていきたい。
第2分科会	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・「めあて」「課題」の提示により、児童生徒が身に付けるべき学習内容を明確化させることができた。「ふりかえり」の時間に、適用問題に取り組んだり、学習について感じたことを発表したりすることで、学習内容の定着や今後の活用の見通しをもたせることができた。 ・他校との遠隔授業は、児童が多様な考えに触れることができる一つの方法として有効

大滝徳舜督		<p>であり、自分の考えを形成し表現することもできていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ スクールタクトやジャムボードの活用により、お互いの考えを比較する場面を取り入れることで、書くことを基にしたコミュニケーション活動の充実の一助となった。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多様な考えに触れたり共有したりする場面を持つことはできたが、話し合いのような考えを深めていく場を設定できなかった。自分と人の思いや考えを結びつけることで学びを深めることができるようにしていく必要がある。 ・ ICT の活用場面を選定し、より効果的な活用を図る必要がある。また、使用時において、文字や記号の入力の仕方が分からない場合の対応やルール of 徹底を行う必要がある。 ・ 端末とノートを目的や利点によってどのように使い分けるか考慮する必要がある。
第3分科会	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主体的に判断し、行動し、児童がリーダーとなり、学習活動を行うことができるようになってきている。 ・ 課題解決へ向かう力を高めるために単位時間の「ゴール」を提示することで、見通しを立てて児童が学べるようになってきているので、今後も継続していきたい。 ・ 楽しさや達成感を感じる授業づくりのために、めあて・課題の設定を子どもたちが行ったり、ガイドに沿って授業をリーダーが進めたりしているので、今後も継続していきたい。その中で、より一層楽しく、達成感ある授業にしていくための検証を継続する必要がある。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲間と共に考える部分に関しては、児童同士が支え合ったり、助け合ったりし、課題を解決していく習慣はついてきている。今後も発達段階を踏んで、指導に努めていきたい。 ・ 自己の考えを「広げる」ことは、集団学びや交流の発表を通してできるようになってきているが、自己の考えを「深める」ことができるような研究をしていく必要がある。
第4分科会	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題や見通しについては、数学的な見方・考え方を意識することで、効果的な手立てがとられていた。それに合わせて、ICTを含め解決の方法がいくつか用意されていたし、教材の準備もできていて良かった。 ・ 単元の見通しとして、「たしかめよう」の最後の問題にチャレンジさせるのを続けていく。また、後輩に向けて書いた振り返りも蓄積していき、来年度に還元していく。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何を使って誰に向けて発表するのか、その目的を明確にして発表させるようにしていく。 ・ 本校では、「同時間接指導」は取り入れていないが、必要に応じて小わりも入れている。ただ、指示を出し忘れたりどうしても渡れなかったりすることから、学習リーダーを育てていくことで、そういう事態にも対応できると考える。 ・ 教科書は児童のつまづきについても想定した内容になっているので、しっかりとその内容を吟味して授業をつくっていく。 ・ 計算力は、算数科の力を下支えする大切な力であるが、一方で個人差も大きい。1分間計算プリントなどを用いて、個別最適な学びができるようにして向上を図っていく。

(4) 分科会運営

【分科会】

- ・ 公開授業や各校研究の内容については、一定の評価とともに多くのご示唆を頂戴した。今後の各校および管内の研究の成果と課題の把握につなげていく。
- ・ コロナ対策もあり、授業会場を体育館等広い場所に設定する必要があった。感染対策を講じたうえで参観者の密を避けるような会場設定が必要であった。
- ・ オンライン参加者向けの授業配信は、洞爺湖文化センターを配信本部として実施し

大きなトラブルなく実施できた。ライブ配信では、オンライン参加者それぞれの視点で参観できるように各会場 2 画面または 4 画面で配信した。表情の見えづらさや音声等の聞こえづらさはあったものの、概ね学習の様子や児童の思考を伝えることが出来たと考える。また、協議に参加できないオンライン参加者向けに研究協議の配信も実施した。

【配信関連】

- ・洞爺湖文化センターで、配信に関わるデータの一元管理を行った。トラブルがほとんど無かったことと分科会会場の負担軽減の面から有効であった。
- ・必要機材の集約と手配をもっと早めに進めておく必要があった。（特に配信機器に関わって）
- ・全体会、分散会のオンライン参加者からの音声不明瞭の指摘があった。今後、協議中の音声について、集音マイク等の機材の整備が必要である。

【連絡手段】

- ・LINEworks による連絡・情報交換は、遠隔地でもタイムラグが少なく効果的であった。道へき・全へきとの連携を、これまでの大会よりも取ることが出来た一因となった。

【その他】

- ・次年度の胆振管内加盟校は 3 校減り 10 校となり、今後も減少することが予想される。そのような状況で、これまで積み重ねてきた研究成果と新たな ICT 活用による取組を生かし、本大会を開催できたことは大きな意味があったと感じている。本大会の成果や課題を大会運営や各校の研究に反映させ、更なるへき地複式教育の充実発展を目指し、来年度のファイナルステージに向けて取組を進めていきたい。
- ・配信技術や機材選定、映像の画面構成等の工夫などは大いに学びとなり、児童生徒にも還元できる部分が多いと思われる。音声対策をさらに工夫し、オンラインでの協議参加も模索できると良い。

8 ファイナルステージに向けた研究推進

胆振大会のミッションである「ICT時代に対応した授業や新たな情報発信の在り方を示す」ために、これまで取り組んできた実践および成果・課題を整理し、次の内容を含めて各校が設定した研修課題による研究を推進する。

- ・ ICT 環境や最新設備を活用した授業改革の推進
- ・ 一人一台端末を活用した個々の到達度に応じた個別最適な学びの実現
- ・ ICT 環境を活用した時間的・空間的制約を超えた協働的学びの実践
- ・ ICT を活用した少人数・複式指導における評価等の工夫
- ・ 児童生徒が主体的に取り組む学びの推進

また、配信方法についても、ファーストステージの成果を生かした工夫・発展により、ハイブリッド型の研究大会の充実を図っていくこととする。

9 各校の研究推進

加盟校 10 校のうち、分科会会場校を除く 6 校について、学校規模、研究主題、分野・課題を掲載する。第 10 次長期 5 年研究推進計画に基づき、自校の課題解決に向けた研究主題を設定し研究を行っている。

1	学校名	豊浦町立大岸小学校	学級数	3	児童数	12
	研究主題	主体的・協働的に学び合う子どもの育成 ～算数科の学習を通して～				
	分野・課題	I 分野	3	II 分野	6	

2	学校名	豊浦町立礼文華小学校	学級数	3	児童数	10
	研究主題	目標に向かって努力し、学び進める子どもの育成 ～「主体的な学び」を実現する算数の授業づくりや 家庭学習の推進を通して～				
	分野・課題	I 分野	1	II 分野	4	

3	学校名	洞爺湖町立洞爺湖温泉小学校	学級数	7	児童数	37
	研究主題	主体的に学び、ともに高め合う児童の育成				
	分野・課題	I 分野	2	II 分野	5・6	

4	学校名	伊達市立関内小学校	学級数	4	児童数	16
	研究主題	全ての児童の可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現 ～ICT 機器を活用した学びの充実～				
	分野・課題	I 分野	3	II 分野	4・5・6	

5	学校名	室蘭市立喜門岱小学校	学級数	3	児童数	22
	研究主題	「生き生きと学び、考えを広げる子の育成」 ～伝え合い、認め合い、高め合う国語科の授業力向上を通して～				
	分野・課題	I 分野	1	II 分野	6	

6	学校名	白老町立竹浦小学校	学級数	4	児童数	26
	研究主題	自分の考えを広げ、深める子の育成 ～分かった！できた！楽しい！を生む探究型授業を通して～				
	分野・課題	I 分野	2	II 分野	5・6	

会場校の研究概要

◇第1分科会 洞爺湖町立とうや小学校

◇第2分科会 伊達市立大滝徳舜瞥学校

◇第3分科会 白老町立虎杖小学校

◇第4分科会 苫小牧市立樽前小学校



恐竜化石 むかわ竜

第1分科会

【研究主題】

単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探求
～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～



洞爺湖町立とうや小学校

特色ある教育活動



地域の方たちから学ぶ農業体験
(写真は地域の方の田んぼでの田植え体験)



地域の食材を地域の子どもたちのために
栄養教諭、調理員、生産者が連携した給食
と食育(写真は2年生の給食センター訪問)



洞爺湖へのヒメマス稚魚の放流
生活科の学習



縄文遺跡群にある入江・高砂貝塚館にて
縄文文化学習での土器作成



洞爺湖有珠山ジオパークを活用した
昭和山登山



地域人材を活用したプログラミング学習

第 I 章 学校の概要

1 地域・児童の実態

(1) 地域の特徴

本校は、洞爺地区の4つの小学校を統合し、平成18年に誕生した新しい学校である。洞爺地区は洞爺湖町の北端に位置し、洞爺湖岸から北の丘陵地に発達した農村地帯である。校下は、地形的に下台地区と高台地区に分けられる。下台地区は洞爺湖北岸に位置し、比較的温暖な地域である。そのことを生かし、水田やメロン、セロリ、電照栽培の赤紫蘇等のハウス栽培農家が多い。また、旧洞爺村の中心地として、郵便局、消防署、商店街の町並みを形成している。高台地区は羊蹄山の南山麓に開けた農村地帯で、ジャガイモ、ビートを中心に寒冷地畑作や酪農を主とする農業や軽種馬を育成する牧場等が営まれている。

(2) 児童生徒の実態

本校の児童は明るく素直で、友達を大切にし、礼儀正しく協調性があり、縦割り班活動をする事が多いことから上の子が下の子の面倒をみる場面が多く見られる。また、清掃や給食当番等の与えられた仕事には一生懸命に取り組む姿勢も見られる。その反面、主体性や創造性に乏しく、依存心が強い傾向にある。また、深く考える力や最後までやり抜く力が不足している。一人一人が目的をもってチャレンジできるようにするため、学習や生活において目的意識や課題意識をもたせ、教師や級友からの信頼と励まし等により、自尊感情やチャレンジ精神を高めているところである。

2 児童数・学級編成・職員構成

(1) 児童生徒数・学級編成

(令和5年4月1日現在)

学年学級	1	2	3	4	5	6	特別支援	合計
男子	5	2	7	4	4	5	5	32
女子	5	4	8	3	7	4	1	32
合計	10	6	15	7	11	9	6	64
編成	1	1	1	1	1	1	2	8

(2) 職員構成

	職名	氏名	担任	校務分掌等
1	校長	山下 文人		
2	教頭	田中 研吾		
3	教諭	長谷川 純	1年担任	教務部長
4	教諭	(福山 美沙) 野田 祥美	2年担任	研修部
5	教諭	佐々木 淳也	3年担任	指導部
6	教諭	吉村 亮	4年担任	研修部長 ICT推進委員
7	教諭	田中 泉	5年担任	研修部 へき複研究推進委員
8	教諭	苔米地昭彦	6年担任	指導部長 地域連携教員

9	教諭	菅野 知子	ひまわり学級担任	教務部 特別支援コーディネーター
10	教諭	山下 知保	ゆうゆう学級担任	教務部 道徳推進教諭
11	養護教諭	赤堀 真友		指導部
12	栄養教諭	佐藤のどか		指導部 食育推進委員会チーフ
13	事務主任	源藤 将人		事務部 ICT推進委員
14	校務員	遠藤 昌宏		事務部
15	介護員	高橋 千恵		指導部
16	介護員	笹木 香織		指導部
17	学習指導員	坂本 瑠美		教務部
18	教員業務支援員	岩井由紀子		指導部

3 学校経営方針（グランドデザイン）

令和5年度 洞爺湖町立とうや小学校グランドデザイン



みんなと仲良く伸びる子ども

～やさしく□かしこく□たくましく～

果実

豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手！



自分の考えは？

自分はどうなりたいか。
自分はどうでありたいか。

学校行事

各教科

児童会活動

目的をもつ力

チャレンジする力

家庭学習

個別最適化と協働的な学習

失敗をおそれない。
何度でも挑戦する姿。

総合的な学習

まずはやってみる！

幹

主体的・対話的で深い学び
を視点とした授業改善

「学びの質」の共有

学習リーダー

根

道徳教育、規範意識と自尊感情の醸成
家庭・地域との連携、ふるさと教育

新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育課程の編成と実施

第Ⅱ章 研究の概要

1 研究主題

単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探求
～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～

2 研究主題設定の理由

(1) 前研究の成果と課題から

- ① 道徳科において、確かな指導観に基づいた授業の展開を構想することで、本時のねらいに沿った発問やワークシート等の教材を用意でき、ねらいに沿った評価につながるという成果を得ることができた。今年度は、この成果を道徳科に限らず他教科にも広げていきたい。
- ② コロナ禍でしばらく積極的な話し合い活動が行えなかったことから、オンライン対面学習やオンライン児童交流など「対話的で深い学び」に関わる指導の工夫についても考えていきたい。

(2) 本校の実情から

本校の児童数は各学年、毎年8名前後を推移していることや特別支援学級対象の児童もいることを考えると、毎年単式学級で推移する可能性は低い。いつ複式学級で授業することとなっても児童・教師とも困り感なく学習を進められるような体制を早急に構築する必要がある。

(3) 社会的背景から

- ① 学びの質を高める学習指導の探求は、学習指導要領で求められている「児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」につながる。
- ② 洞爺湖町 GIGA スクール構想に基づいた ICT 機器が順次配備されてきていることから、その効果的な活用方法を理解し共有する必要がある。

3 道へき複第10次長期5か年計画研究推進計画との関連

【分野Ⅰ】 学校・学級経営の深化・充実
〈研究課題1〉 『確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びをつくる特色ある教育課程の創造と推進』
○一人一人が目的をもってチャレンジし、元気に通う学校づくり ○洞爺湖有珠ジオパークを活用した学習の推進 ○地域人材の活用や地域に根差した教育活動を通じた人材育成
【分野Ⅱ】 学習指導の深化・充実
〈研究課題6〉 『主体性を育てる学習指導過程の改善と充実』
○リーダー学習・少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫 ○児童の主体的・対話的な学びにつながる ICT 機器の効果的な活用 ○教育効果を高める家庭学習と振り返り学習

研究主題

単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探求

～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～

めざす子ども像

1	2	3
思いやりの気持ちを持ち、力を合わせて活動する子	基礎基本を身に付け、楽しく学び合う子	強い意志を持ち、最後までやり抜く子
お互いを高め、学びの質を高めるためのリーダー学習	児童の主体的・対話的な学びにつながる ICT 機器の効果的な活用法	教育効果を高める家庭学習と振り返り学習

研究の仮説

1	2
複式や少人数教育のメリットを活かした指導の改善・工夫をすることで、主体的・対話的で深い学びの実現につながるだろう。	確かな指導観に基づいた学習指導の改善や工夫は、学級形態や学級規模に関わらず児童の学びの質の向上につながるだろう。

研究の視点・内容

1	2	3
少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫 ～リーダー学習の活用～	ICT 機器の効果的な活用 Chromebook を活用した 相互評価	振り返り、定着につながる 「ぐるぐるノート」の活用

【令和5年度の重点内容】

児童の主体的・対話的な学びにつながるリーダー学習の在り方と

ICT を活かした相互評価の方法

各教科における適切な言語活動

一人一人が目的を持ち、積極的にチャレンジしながら元気に通う子を育む

とうや小の学級経営

スタンダード 5
(町内統一の学習授業指標)

学校教育目標

5 研究内容

(1) 研究期間

3カ年計画（今年度は最終年度）

<参考>

令和4年度 町教研指定公開研究会兼全道へき地複式研究大会 胆振大会
(ファーストステージ)

令和5年度 全道へき地複式研究大会 胆振大会 (ファイナルステージ)

(2) 研究対象教科

算数科

(3) 研究仮説

- ①複式や少人数教育のメリットを活かした指導の改善・充実を図ることで、主体的・対話的で深い学びの実現につながるだろう。
- ②確かな指導観に基づいた学習指導の改善や工夫は、学級形態や学級規模に関わらず児童の学びの質の向上につながるだろう。

(4) 研究内容

☆授業力・指導力を高め、児童が輝くための3本の矢

1の矢…ICT機器の効果的な活用（Chromebook、GoogleMeet、デジタル教科書…）

- ① 児童の主体的・対話的な学びにつながるICT機器の効果的な活用法
 - ・Jamboardを活用した対話的な学び
子どもたちに多様な表現方法を意識させ、自由な自己表現を促す。
他者の考えを知る機会として位置付けるとともに、記載した内容を基に話し合い活動を活性化させる。
学習履歴を蓄積し、適切かつ効果的な振り返りにつなげる。
 - ・Chromebookを活用した授業の振り返り
 - ・個人用デジタル教科書（算数）の活用法
(導入の実態を考慮し、5・6年生からの先行研究とする)
- ② 効果的なICT端末の活用に向けた（低学年の）指導計画の改善・充実
 - ・Chromebook活用に向けたgoogle applicationの導入「事例紹介」「実践発表」

2の矢…少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫～リーダー学習の活用～

- ① 学びの質を高めるためのリーダー学習
- ② 「学習過程における児童の姿」、リーダー学習、ICT機器活用の相互関連
- ③ 学習規律の定着と基本的な学びの学習過程の確立（スタ5との関連）

3の矢…振り返り、定着につながる「ぐるぐるノート」の活用

- ①本校の特色の一つとなっている「ぐるぐるノート」の活用実践例
- ②教育効果を高める家庭学習と振り返り学習

(5) 研究主題と研究内容の関連について

① 学びの質を高めるためには、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つを意識することが大切だと考える。また、実社会で役立つ資質・能力の育成を図るには、「主体的な学び」と「対話的な学び」が、身に付けた知識・技能の活用・発揮につながる「深い学び」に向かうような、確かな学びになっていることが重要だと考える。

この3つの柱の中で、児童に期待する具体的な姿を示したものが下の表であり、本校で意識しているものである。

<3つの視点における児童に期待する姿>

「主体的な学び」の視点	「対話的な学び」の視点	「深い学び」の視点
<ul style="list-style-type: none"> ・興味や関心を高める ・見通しをもつ ・自分と結び付ける ・粘り強く取り組む ・振り返って次へつなげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの考えを比較する ・多様な情報を収集する ・思考を表現に置き換える ・多様な手段で説明する ・先哲の考え方を手掛かりとする ・共に考えを創り上げる ・協働して課題解決する 	<ul style="list-style-type: none"> ・思考して問い続ける ・知識・技能を習得する ・知識・技能を活用する ・思いや考えと結び付ける ・知識や技能を概念化する ・自分の考えを形成する ・新たなものを創り上げる

(NITS 資質・能力の育成を目指す主体的・対話的で深い学びのイメージ図より)

② 「学びの質」を教職員間で共有するために

ア 3つの視点における児童に期待する姿

上の表を本校児童の実態に合わせて「学習過程における児童の姿（算数科）」として具体的にまとめた。本研究を進める上での拠り所とする。

イ ICT 機器の効果的な活用

ICT 機器を積極的に取り入れることで学びの質が一層高まることが期待できることから、研究内容1の矢の具体として、「ICTを活用した学習過程における児童の姿（算数科）」を作成した。(下図参照)

	期待される「質の高まった」児童の姿	中	高	教師の観行方 一目指す方向
課題把握 (つかむ)	・「やってみたい問題を探かしている」 (わくわく・どきどき) ・わかっていること、聞いていることと自分の考えを結び付ける (わかってはいるけど、聞いていることと自分の考えを結び付ける)	・考えを対話的に説明し合っている 「アッ!」「どうして?」「不思議!」 ・聞き手をつかみ、説明の順序をつかんでいる (大事な数字をのべている)	・課題について興味関心をもっている (比較したいなど知的好奇心) ・聞き手をつかみ、説明の順序をつかんでいる ()	興味や関心を高めるための課題の提示 →主体的な学びへ ・「やってみたい」などの課題を提示する仕方 ・授業の興味あるものを選択し提示する ・実社会や生活の中で活用できるものを選択する ・知識や技能を形成するための課題
「見通す」	・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」	・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」	・課題に対してどう取り組むか考えている ・自分のゴールのイメージがもてる ・自分の見通しを説明している ・自分の見通しを説明している	課題に対して取り組むための準備 ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する
自力解決 (考える)	・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	粘り強く取り組むための観行方 →主体的な学びへ ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する
共同解決 (比べる) (深める)	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	互いの考えを共有する観行方 →対話的な学びへ ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する

	期待される「質の高まった」児童の姿	中	高	教師の観行方 一目指す方向
課題把握 (つかむ)	・デジタル教科書の操作をもちよみ、自分の課題を探かしている (わくわく・どきどき) ・わかっていること、聞いていることと自分の考えを結び付ける (わかってはいるけど、聞いていることと自分の考えを結び付ける)	・デジタル教科書の操作をもちよみ、自分の課題を探かしている 「アッ!」「どうして?」「不思議!」 ・聞き手をつかみ、説明の順序をつかんでいる (大事な数字をのべている)	・デジタル教科書の操作をもちよみ、自分の課題を探かしている (比較したいなど知的好奇心) ・聞き手をつかみ、説明の順序をつかんでいる ()	興味や関心を高めるための課題の提示 →主体的な学びへ ・「やってみたい」などの課題を提示する仕方 ・授業の興味あるものを選択し提示する ・実社会や生活の中で活用できるものを選択する ・知識や技能を形成するための課題
「見通す」	・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」	・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」	・課題に対してどう取り組むか考えている ・自分のゴールのイメージがもてる ・自分の見通しを説明している ・自分の見通しを説明している	課題に対して取り組むための準備 ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する
自力解決 (考える)	・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」 ・「自分の見通しを説明する」	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	粘り強く取り組むための観行方 →主体的な学びへ ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する
共同解決 (比べる) (深める)	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する ・自分の見通しを説明する	互いの考えを共有する観行方 →対話的な学びへ ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する ・「自分の見通し」を提示する

③リーダー学習の活用

リーダー学習とは、子どもたちがリーダーを中心に自主的に学習を進める授業形態のことである。いつ複式学級で授業することとなっても児童・教師とも困り感なく学習を進められるような体制づくりが喫緊の課題となっている本校においては、研究を通して、子どもたちに自主的・主体的な学習態度を育成していくとともに、リーダー学習の効果的な活用によって学びの質を高めていきたいと考える。

そのためには、研究を進めながら、授業のねらいに沿った効果的な学習形態の在り方、子どもたちの学び方の定着、学習リーダーの役割、そして適切な関わり等をはじめとする教師の指導観・授業観を改善していく必要があるだろう。

(6) 研究内容に関わる資料編

① 1の矢 ICT機器の効果的な活用 に関わる追加資料（基礎・基本編）

文部科学省『算数・数学科の指導におけるICT活用について』より

ア 学習指導要領に示された領域において

- ・表やグラフの作成

多量なデータでも、目的に応じていろいろなグラフを瞬時に簡単に作成できる。

- ・図形指導の充実

プログラミングで正多角形をかいたり、図形を動的に変化させたりする。

- ・知識・技能の確実な習得

秤などの目盛りの読み方やコンパスの使い方などを視覚に訴えながら理解することが可能となる。

イ 問題解決学習の場面において

- ・問題提示時

問題を瞬時に配布することが可能。また、問題を拡大提示することにより、子どもたちを問題に集中させることもできる。

- ・自力解決時

ノート、ワークシートの代わりに使用することが可能で、子どもたちがICT端末を活用することで、失敗を恐れず何度も試行錯誤することも可能になる。

教師はワークシートを前もって印刷する必要がなく、子どもたちは何枚も自由に使うことができる

- ・学び合い時

瞬時に個々の考えを転送したり提示したりできる。また、同じ画面上に全員の考えを投影することも可能となり、話し合い活動や対話的な学びの充実にもつながる。

- ・まとめ・振り返り時

学習のまとめの全体共有や学習履歴の蓄積が可能となる。

ウ その他

- ・学習内容の蓄積の活用

ICT端末に記録した内容が蓄積されいつでも閲覧が可能となり、容易に既習事項の確認や活用ができるようになる。

- ・個人の状況把握

教師による子どもたち一人一人の問題解決の状況を把握でき、意図的な指名や個の実態に応じた目標や課題提示が可能となる。

② 2 の矢 少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫 ～リーダー学習の活用～

に関わる追加資料（基礎・基本編）

ア 学習形態の観点からの留意事項

・全体学習

学級全体の意見の傾向や反応の確認が容易となる。そのためには、児童が発言しやすい環境構成や子どもたち一人ひとりへの配慮や、学習リーダーの育成が欠かせない。

・グループ学習

多様な考え方を少人数で検討することが可能となり、結論を導きやすくなる。発言の苦手な児童にとっては、全体学習よりも安心して自分の意見を述べやすくなる。



・ペア学習

お互いの考えをより深く話し合えたり、学習状況を確認できたりする。

自分の考えをもっていなければ、意見交流が不活発になる恐れもある。

・個別学習

ひとりひとりの状況に応じて、じっくりと取り組むことができるが、自分の考えをもてない児童には、個別の支援が必要となる。



イ 「主体的・対話的で深い学び」の実現の観点からの留意事項

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業を展開するうえで、言語活動やペア学習、グループ学習などを取り入れる場面を整理し、授業進捗の見通しを立てることが重要である。小規模校においても、意図的にペア学習やグループ学習を仕組むことは効果があると考えられる。もちろん、指導者として1単位時間や単元全体の中で「教師が教える内容や場面」「子どもたちに考えさせたい事柄」を明確にして授業に臨むことは欠かせない。



6 これまでの成果と課題（本研究主題の2年次の反省より）

（1）【研究内容1】ICT機器の効果的な活用について

①「児童の主体的な学び」に関わって

児童は苦手な学習においても、タブレットを取り入れた学習は楽しみにしている。ICTを活用することで児童が興味をもって取り組めるメリットを生かし、今後もあらゆる場面で活用していくことが望ましい。

今年度の何よりの成果は、子ども達がタブレットを日常的に使用できていることである。学習では、写真やグラフを貼り付けて個人の学習のまとめや、友達と共有しながらグループのまとめに使うなど、調べたりまとめたりする時の手段の一つになっている。

一方で、児童のタブレットに入っているデジタル教科書を使いながらの授業は少なかった。しかし、TVモニターのデジタル教科書＋児童の教科書＋黒板という使用をしたり、児童が体感的に操作を通じて主体的に学習に取り組める单元もあるので実践事例なども含めてより良い使用の仕方を研修していきたい。

②「対話的な学び」に関わって

ペア学習、全体交流の場でクロームブック（ジャムボード）は「子ども同士の協働」や「自分の考えを深めること」に大きな効果があった。

高学年はジャムボードを使うことでペア学習に取り組みやすくなり、更に考えを比較したり深めたりするのに効果があった。今後はクロームブックをうまく活用して、話し合いが深められるような指導をしていきたい。

家庭待機児童とのMEETや中学校とのMEETを行ったことで、児童のMEETに対する抵抗感はほとんどなくなった。他校の児童生徒とのMEET学習を8月に行う予定である。

③「教師のICT活用技能向上」に関わって

低学年にクロームブックが割当たる時期が、令和5年度の2学期からという中、低学年の担任の先生も積極的に活用の場面や方法を考えていた。2年生はyahooの平仮名キーボードでの検索やゲーム、担任が用意したジャムボードでの学習（文字は手書き）などができるようになった。3年生以上の方向性が見えてきたので、そこにつなげるための低学年の指導計画に関する研修が次年度ある程度必要になると思う。R2に作成したプログラミングやICT活用の年間計画を見直し、今の実態に応じた計画の原案を提示し、精査していきたい。

（2）【研究内容2】ICT機器活用以外での少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫

①「自主的な学びにつながるリーダー学習」に関わって

リーダー学習では、子どもたちが授業の流れやパターンを理解し、問題に対して自分たちが何をどう考えればよいのかをつかむ必要があるため、まさに子どもたちの主体的な学びにつながっていくと考える。学習リーダーを中心に授業を進めることで、なんとかリーダーを助けなくてはという意識もはたらき、子どもたちの授業に対するやる気や集中力も高まっていた。また、課題を立てる場面やまとめの場面

を子どもたちに託すことで、本時の問題の本質をつかませることができ、何ができた（分かった）授業であったかをまとめることにもつながった。

型にはまったリーダー主導の学習は継続することで、形になりつつあるものの、進め方シートなど使わないと、学習が止まってしまったり、授業の後半は担任が進めたりしてしまう。課題に向かって論点や話題がずれないように学習を進めることは大変高度なことなので、リーダー学習を進めていく上で、各学年の積み上げを系統的に、確実にを行うことが重要と考える。高学年に向けてさらに自ら考えて活動できるように、言語活動も充実させていきたい。

②「学習ルールの確立や基本的な学びの学習過程の確立」に関わって

「学習過程における児童の姿の一覧」の流れで授業を進めることにより、少しずつ学習規律が整ってきた。基本的な授業の学習過程を整えていくことが、深い学びや学習内容の定着につながっていくと考える。今後も聞き方、話し方、書き方名人を意識した学習規律の定着と、リーダー学習や ICT 機器を活用する時の「学習過程における児童の姿」に近づくようにしていきたい。

(3) 3年次に向けて

①【研究内容①】ICT機器の効果的な活用に関わって

- ・ICT機器を使い「振り返り」と「次につなげる」学習の構築。
- ・ICT機器の効果的な活用による、対話的な学びの充実。
- ・改定したプログラミングやICT活用の年間計画を元にした実戦。
- ・児童の思考の流れを可視化する板書とICTの効果的な使い分け。

②【研究内容②】少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫

～リーダー学習の活用～ に関わって

- ・「話す・聞く」力を育て、より学びの質を高めるリーダー学習の継続。
- ・学習過程における児童の姿の一覧と洞爺湖町で統一して取り組んでいる児童と教師のための指標「スタンダード5」との関連を意識した指導。
- ・子どもたちの達成感や学習内容の定着につながる『まとめと振り返り』。
- ・教師と児童との授業観の共有を図る授業アンケートの実施。

③【研究内容③】振り返り、定着につながる「ぐるぐるノート」の活用

- ・発達段階に応じた、習慣づけから内容の充実への継続指導。
- ・他者の取組に興味を持たせたり、家庭学習の意欲喚起を促したりする指導の工夫。

第2分科会

【研究主題】

「未来を創る児童生徒の育成」

～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～



伊達市立大滝徳舜瞥学校

特色ある教育活動



ALT と共にイングリッシュ・デイズ



地域で飼育されている羊の毛刈り体験



地域指導者と共に行う農園活動



関内小学校との遠隔授業



全校児童生徒と地域が力を合わせる
連合大運動会



ノルディックスキー

第 I 章 学校の概要

1 地域・児童生徒の実態

(1) 地域の特徴

大滝区は山間に位置し、自然が豊かで春の山菜取りや秋のきのこ狩りなど四季を通じて楽しむことができる。複数の集落があり、いずれも農業を中心としている。また高地に位置するため、夏は涼しく避暑地として利用されるが、冬は厳しく積雪も多い。大滝区では歩くスキーに力を注いでいて毎年2月に国際スキーマラソンを実施している。老人福祉施設や障がい者福祉施設が数件ずつあり、福祉の地でもある。また温泉地北湯沢には、大型の宿泊施設があり観光客も年間を通して訪れる。

(2) 児童生徒の実態

児童生徒は、全体的に明るくおおらか、純朴である。兄弟姉妹を持つこともあり、世話好きで人に対する優しさをもっている児童生徒が多い。

学習意欲が高く落ち着いた態度で生活している。与えられた課題や作業は真面目に責任をもって取り組む一方、場に応じて主体的に判断し行動すること、自分の思いや考えを表現し、伝え合う面では、更に力を付けていく必要がある。また、年々児童生徒数の減少に伴い、豊かな人間関係を構築していくことの支援や異学年交流等に取り組むことにより、人間性、社会性を伸ばし、社会の変化に主体的に対応することができる生きる力を育成していきたい。

2 児童数・学級編成・職員構成

(1) 児童生徒数・学級編成

(令和5年4月1日現在)

学年学級	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
男子	0	0	0	0	2	2	0	1	0	5
女子	2	1	3	4	0	1	1	1	1	14
合計	2	1	3	4	2	3	1	2	1	19
編成	1		1		1		1		1	5

(2) 職員構成

	職名	氏名	担任	校務分掌等
1	校長	羽根 秀哉		
2	教頭(前)	山崎 泰博		総務部(前期課程)
3	教頭(後)	竹迫 慎司		総務部(後期課程)
4	教諭	木村あゆこ	1,2年担任	指導部 特別支援 CO
5	教諭	高橋 淳	3,4年担任	教務部 研修係
6	教諭	石澤 宣幸	5,6年担任	指導部 指導部長
7	教諭	池田 桂祐	7,8年担任	指導部
8	教諭	高田実千穂	9年担任	教務部
9	教諭	岡本 祐太	7,8,9年副担	教務部 教務部長

10	技芸講師	橋本こずえ		
11	養護教諭	大野きよみ		指導部 保健主事
12	事務職員	金本 利基		事務・管理部
13	業務職員	高橋 広顕		事務・管理部
14	業務職員	石川 祐二		事務・管理部
15	国際交流員	ケイデン・ウォルターズ		

3 学校経営方針

令和5年度 伊達市立大滝徳舜警学校『グランドデザイン』

学校教育目標
ふるさとに誇りをもち、たくましく未来を創る児童生徒の育成
目指す子ども像
 自ら学び、未来を**創造**する児童生徒（知）
 心豊かな**思いやり**のある児童生徒（徳）
 元気で**たくましい**児童生徒（体）

【育成を目指す資質・能力】

自分の考えを伝える力 自分で考え学ぶ力 人を大切にする力 やり抜く力

<p style="text-align: center;">【教職員ビジョン】</p> <p>大滝の児童生徒の成長を第一に考え、自らも成長のためのチャレンジを怠らない教職員</p>	<p style="text-align: center;">【学校組織ビジョン】</p> <p>大滝のよさや伝統を大切にしながらも時代のニーズに合わせて変化し続ける学校</p>
--	--

学校経営の基本方針
『みんなが笑顔で安心できる学校づくり』
 ～義務教育学校・少人数・大滝区のメリットを最大限に生かして～

<p style="text-align: center;">〈確かな学力〉</p> <p>◎学力向上に向けた取組の推進 ○一人一台端末を活用した主体的・対話的で深い学びの実現に向けた組織的な授業改善 ○本校のメリットを生かした学習指導の充実を図るカリキュラムマネジメント ○外国語教育・国際理解教育の充実 ○特別な支援の必要な児童生徒へのきめ細やかな支援</p> <p>◎校内研修の推進 ○北海道へき地複式教育研究大会へ向けた取組 ○キャリアステージに応じた研修の充実 ○服務規律の確保</p>	<p style="text-align: center;">〈豊かな心〉</p> <p>◎心に響く教育活動の推進 ○道徳教育の充実に向けた組織的な取組 ○異学年交流の充実 ○人とのふれあいを大切にしたい挨拶等の習慣化</p> <p>◎組織的な生徒指導体制の推進 ○危機管理・情報共有の徹底 ○いじめの未然防止、早期対応に向けた組織的な取組 ○教育相談や関係機関（SC、SSW等）と連携した支援体制の充実</p>	<p style="text-align: center;">〈健やかな体〉</p> <p>◎体力向上に向けた取組の推進 ○日常の体育授業における運動量の確保と運動の質を高める授業改善 ○地域の特色を生かした体力づくりの継続と運動習慣の定着</p> <p>◎健康教育・食育・安全教育の推進 ○コロナ禍対応における実態を把握した指導の充実 ○発達段階や実態に応じた外部講師の積極的活用 ○自分の命は自分で守る指導の徹底</p>
--	---	--

<p style="text-align: center;">〈家庭・地域との連携・協働〉</p> <p>◎家庭・PTAと連携した組織的な取組の推進 ○生活習慣の改善に向けた連携 ○家庭学習の習慣化と内容の充実に向けた連携 ○家庭・地域への学校情報の校外からの発信</p> <p>◎地域素材を活用した「地学協働」の推進 ○大滝区の教育資源を活用した「おおたき学」の推進 ○地域参画型の学校行事の推進 ○幼小・中高間の円滑な接続</p>	<p style="text-align: center;">〈働き方改革の推進〉</p> <p>◎子どもと向き合うための心の余裕と時間の確保 ○「Road」を活用した組織的な取組 ○ICT等を活用した校務の効率化 ○メンタルヘルス対策</p> <p>◎部活動に係る活動方針に基づく取組の徹底 ○部活動休養日等の完全実施 ○伊達 SC 監や保護者と連携した外部指導者を含む指導体制</p>
--	--

第Ⅱ章 研究の概要

1 研究主題

「未来を創る児童生徒の育成」
～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～

2 研究主題設定の理由

令和 3 年度までの 3 年間の研修を通して、「聞き方や話し方、授業の流れなどの学習スタイルの定着が、児童生徒の主体的な学びにつながった」という成果がある一方、「複式学級での指導や学力差を考慮し学びを深める指導や交流の仕方」、「発達段階による指示や発問の言葉選び、反応を深める教師の声掛け」等の指導力向上に関する課題の他、「少人数や複式学級での話し合いの深まり」、「自分の考えとの違いに気づき言語化し伝えること」等の児童生徒に身に付けさせたい力に関する課題が残った。

また、児童生徒に行ったアンケートでは、インプットの領域である「読むこと」「聞くこと」に比べ、アウトプットの領域である「話すこと」「書くこと」に苦手意識を感じていること、伊達市学力テストの分析結果や教師側のアンケートでは、主体性・言語力・発信力といったコミュニケーション力に課題がある児童生徒が多いという実態が明らかになった。

文部科学省によると、コミュニケーション能力とは「話す・聞く・書く・読む」といった言語活動のほか、非言語による伝達手段（イメージ、音、身体）も含めた広範な活動に関わるものとしており、そのため、「コミュニケーション能力」の向上には、言語能力のほか、非言語能力の向上も必要であるとされている。

また、平成 28 年中教審答申には 2030 年の社会と子どもたちの未来について記載されており、その答申を受けて改訂された現在の学習指導要領の前文には、育成を目指す児童生徒の姿について、次のように記載している。

『これからの学校には、(略)一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともにあらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協同しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。』

この育成を目指す児童生徒像を、本校では「未来を創る児童生徒」と定義し、その育成のためには、少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上が重要であると考え、令和 4 年度より本研究をスタートさせた。

3 道へき複第 10 次長期5か年計画研究推進計画との関連

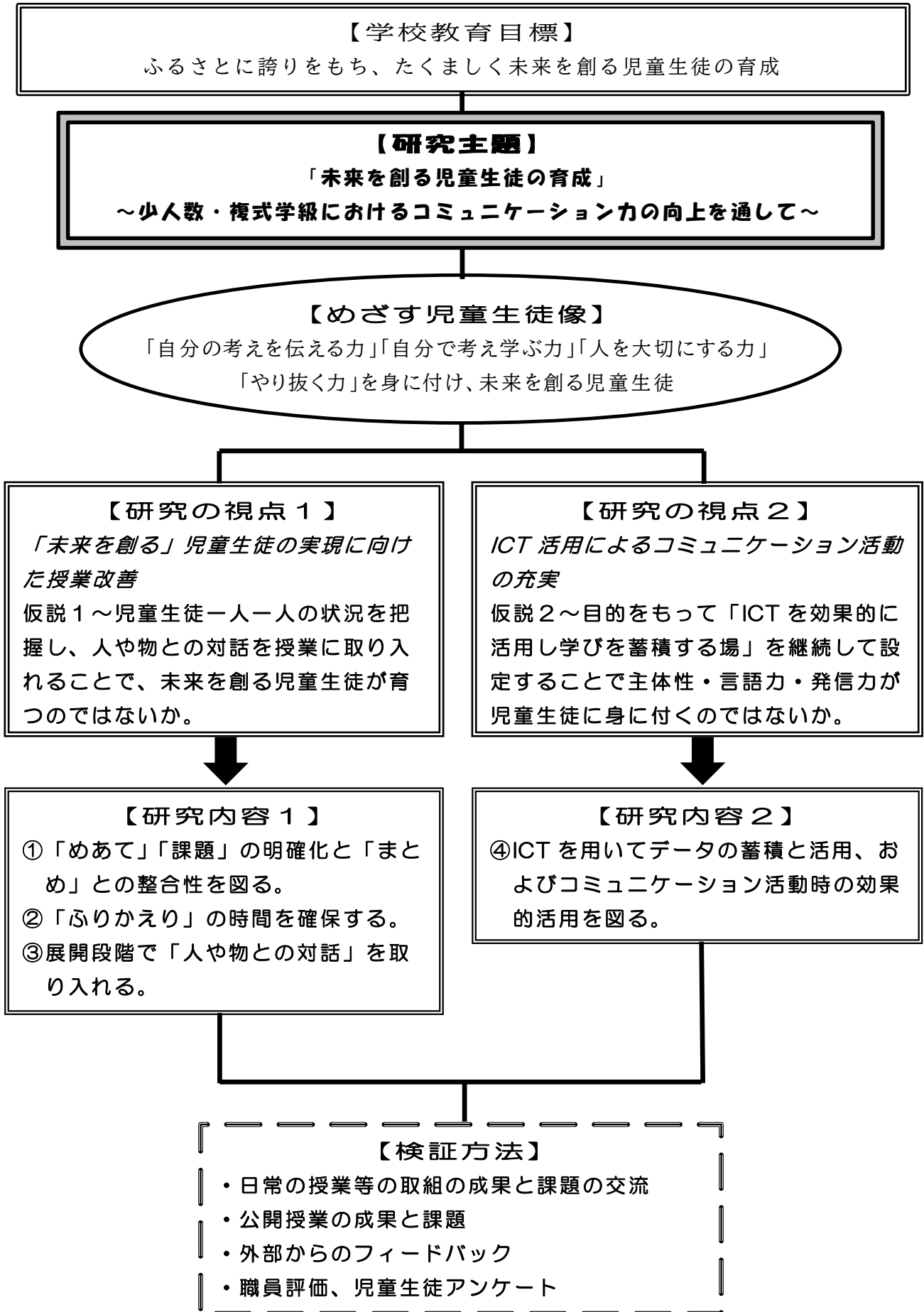
I「学校・学級経営の深化・充実」

1 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びをつくる特色ある教育課程の創造と推進

II「学習指導の深化・充実」

5 学ぶ意欲を高める指導方法の改善と充実

4 全体構造図



5 研究内容

「児童生徒に『自分の考えを伝える力』『自分で考え学ぶ力』『人を大切にする力』『やり抜く力』を身に付けさせることで、未来を創る児童生徒が育つのではないか。」という基本仮説を立て、今年度がスタートした。仮説にある4つの力は、一人一人の「未来を創る力」に必要な資質・能力を育むために必要な力であるとおさえ、

- 自分の考えを伝える力…コミュニケーション力、相手と意思疎通するために必要な力
- 自分で考え学ぶ力…自分を客観的に捉え、意思に従い学ぶ能力、自己調整能力
- 人を大切にする力…周りの人々の気持ちを思いやる力、やさしさ、共感力
- やり抜く力…困難に遭っても挫けずに努力を重ねる情熱や粘り強く取り組む力

これらを児童生徒に身に付けさせたい。

今年度の研修で行うことは、昨年度に引き続き、大きく分けて4つである。「①『めあて』『課題』の明確化と『まとめ』との整合性を図る。」「②『ふりかえり』の時間を確保と充実を図る。」ともに開校1年目から取り組んできた内容であるが、今年度も、「③展開段階で『人や物との対話』を取り入れる。」を重点1、「④ICTを用いてデータの蓄積と活用、およびコミュニケーション活動時の効果的活用を図る。」を重点2として研究を進めていく。

「研究内容1」「研究内容2」のおさえとしては次のとおりである。

【研究の視点1】

「未来を創る」児童生徒の実現に向けた授業改善

【仮説1】

児童生徒が学習に見通しをもって授業に臨み、主体的に学習を進め、自身の学びの過程を振り返り、学習の価値を自覚することで、未来を創る児童生徒が育つのではないか。

【研究内容1】

- ①「めあて」「課題」の明確化と「まとめ」との整合性を図る。
- ②「ふりかえり」の時間を確保し、充実を図る。
- ③展開段階で「人や物との対話」を取り入れる。

① 「めあて」「課題」の明確化と「まとめ」との整合性を図る。

「めあて(目標)」は、単元の導入段階で児童生徒に示す。単元を通して一つの「めあて(目標)」ということもありえる。単元で何がどのようにできるとよいのか、何が身に付けばよいのかを児童生徒に示すことで、主体的な学習を促す。



「課題」は、本時の導入段階で児童生徒に示す。その時間で何がどのようにできるとよいのか、何が身に付けばよいのかを児童生徒に示すことで、主体的な学習を促す。

「まとめ」は、本時の終末段階で、「課題」に正対する形で児童生徒に示す。児童生徒が本時で学習した内容を言葉などで表現しまとめる。

②「ふりかえり」の時間を確保し、充実を図る。








「ふりかえり」は、定着・今後の活用の見通しを持たせるために、児童生徒にアウトプットさせる。

- 「身に付いたこと」「次に頑張りたいこと」「気付いたこと」「疑問に思ったこと」など児童生徒の言葉で記述させる。
- 発達の段階や教科の特性、単元内容などに合わせ「挙手させる」「記号で書かせる」「学んだことが身に付いているかテストし確認する」などの工夫も考えられる。

③展開段階で「人や物との対話」を取り入れる。

展開の段階で、タブレットや付箋・ホワイトボードなどを活用し、自分の考えを自身や他の児童生徒が確認する。








「人や物との対話」で考えられる活動

-  互いの考えを比較する
-  多様な手段で説明する
-  多様な情報を収集する
-  協働して課題解決する
-  思考を表現に置き換える
-  共に考えを創り上げる
-  先哲の考えを手掛かりとする

<物との対話の例>

- ・国語、英語→教材文、図書、新聞
- ・社会→資料、グラフ、地図
- ・算数、数学→ブロック、表、グラフ、式
- ・生活、理科→生き物、資料、グラフ

「対話を通して学びを深める姿」

-  思考して問い続ける
-  知識や技能を概念化する
-  知識・技能を習得する
-  自分の考えを形成する
-  知識・技能を活用する
-  新たなものを創り上げる
-  人の思いや考えと結び付ける

【研究の視点2】

ICT活用によるコミュニケーション活動の充実

【仮説2】

目的を持って「ICTを効果的に活用し学びを蓄積する場」を継続して設定することで主体性・言語力・発信力が児童生徒に身に付くのではないかと。

【研究内容2】

④ICTを用いてデータの継続的蓄積と活用、およびコミュニケーション活動の効果的活用を図る。

④ICTを用いてデータの蓄積とコミュニケーション活動の効果的活用を図る。

単位時間でのICT活用では、導入段階で「前時までの学習履歴（データ）のふりかえりと本時での活用」、展開段階で「学習履歴の保管と活用」「学習履歴の更新（深化・統合・発展）」など、短いスパンで蓄積したデータを活用することが考えられる。また、「人や物との対話」をする時には、昨年まで蓄積してきたデータを1人学級などで活用し、多様な考えを知るなど、長いスパンで活用することができる。

「ICT活用の場の設定」

- 導入段階 前時までのふりかえり、問題提示
- 展開段階 グループや全体での話し合い活動
- 終末段階 ふりかえり など



遠隔合同授業においてICTを用いたコミュニケーション活動の効果的な利活用として、一昨年度から伊達市立関内小学校と道徳(令和3年度、令和4年度)、外国語活動(令和4年度)、外国語(令和5年度)の各教科等で取り組んできている。また、その中で「協働的な学び」の手段として、映像を通しての意見交流やジャムボードを共有しての発表など、試行錯誤しながら実践を重ねてきた。子どもたちの意欲的に交流し合う姿や「ふりかえり」の内容の変容などからも、小規模校ならではの課題でもあるコミュニケーション力の育成や多様な考えに触れながら自分の考えを広げたり深めたりするのにICTを用いたコミュニケーション活動がより効果的であると感じられた。今後も少人数の児童生徒への学びの手段としてICTの利活用が有効であると考えている。



今年度は、令和4・5年度における2か年計画の2年目となるが、開校1年目から取り組んできた研究を踏襲しながら、昨年度の反省を受けての取組となる。今まで培ってきた成果と課題を再確認し、コロナウイルスの関係で変化しつつある現状を見つめ、新たに取り組むべきことを共有しながら全職員で研究を進めていく。

6 成果と課題(ファーストステージ反省を含む)

①「めあて」「課題」の明確化と「まとめ」との整合性を図る。

【成果】

- ・「めあて」「課題」の提示により、児童生徒が身につけるべき学習内容を明確化させることができた
- ・全学年を通して、板書の仕方など統一することができた。
- ・「めあて」「課題」の提示をすることによって、児童生徒自身が授業の見通しを持たせて授業を行うことができた。

【課題】

- 主要教科に比べると芸体系授業では意識がうすく、できていないことが多かった。
- 形式の統一、使用する色の統一など、少し先生方により違いがあった。
- 言語活動による課題の提示を行うとともに、問題解決型の課題を多く設定できるとよかった。

②「ふりかえり」の時間を確保する。

【成果】

- ・1枚のワークシートに小单元ごとに「ふりかえり」をまとめることで、自分の成長を感じ取れた。
- ・「ふりかえり」の時間に、適用問題に取り組んだり、学習について感じたことを発表したりすることで、学習内容の定着や今後の活用の見通しを持たせることができた。
- ・スクールタクトやドキュメント、スプレッドシート入力による「ふりかえり」を習慣化できた。

【課題】

- 授業の内容によっては、授業時数に対して指導事項・内容が非常に多く、「ふりかえり」の時間まで確保すると、内容が進まない。大单元ごとの「ふりかえり」で精一杯のことも多かった。
- 「ふりかえり」の時間の確保が難しい場面があったため、授業改善を通して時間を生み出せるようにしていく必要がある。

③展開段階で「人や物との対話」を取り入れる。

【成果】

- ・教科によっては、学年を超えての対話を取り入れることができた。
- ・ジャムボードを使ってそれぞれの考えを共有することで、多様な考えを知ることができていた。
- ・コミュニケーション活動を帯活動として毎時間取り組むことで、自分の考えていることを表現する習慣づけを行った。

【課題】

- 1人学級や少人数学級の場合は、同級生との対話の経験が非常に少なくなってしまう。また、多様な意見にも触れにくい。
- 1時間の中に「対話」の時間を十分に保証してあげることがなかなか難しい。
- 自分の考えを対比させたり、受け入れたりすることをしない生徒の場合、ただ聞き流してしまっている場面もあった。

④ ICT を用いてデータの蓄積とコミュニケーション活動の効果的活用を図る。

【成果】

- ・作品などの画像データの蓄積は可能だった。前年度分などを参考に考えることもできる。
- ・スクールタクトやジャムボードの活用により、お互いの考えを比較する場面を取り入れることで、書くことを基にしたコミュニケーション活動の充実の一助となった。

【課題】

- データの蓄積と活用について、どのような方法で行い活用するのかを明確にする必要がある。
- ICTの活用場面を選定し、児童生徒により効果的に活用できるようにしていく必要がある。
- 端末とノートを目的や利点によってどのように使い分けるか考慮する必要がある。

第3分科会

【研究主題】

「わかった・できた・伝わったと表現できる児童を目指して」

～個別最適な学び・協働的な学びを通して～



白老町立虎杖小学校

特色ある教育活動



4半世紀続くアヨロ海岸清掃



熊の安全教室



地域の先生と放課後学習「寺子屋虎杖浜」



異学年交流による体カづくり



小学校と保育園合同の地震津波避難訓練



竹浦小学校との遠隔合同学習

第 I 章 学校の概要

1 地域・児童の実態

(1) 地域の特徴

白老町市街から西に約 1.7 km、登別市との境界に位置する。市街地は国道 36 号線に沿って形成されている。市街地部分の国道 36 号線は、平成 14 年から行われた 2 車線工事及び、トンネル掘削工事が完成した。太平洋に面した海岸線は、苫小牧市から登別市まで変化のない砂浜が続いているが虎杖浜周辺は切り立った断崖が波打ち際まで迫り、岩礁が至るところに見られ、アヨロ鼻灯台付近の丘は風光明媚なところである。山側は、広々とした景観を呈し、クッタラ湖の外輪山が望まれる。

地域の産業は、沿岸漁業や水産加工業が主体である。昆布やニジマス養殖、シイタケ、花き栽培も行われているが、職種は会社員やサービス業が増えてきている。漁船が隣接の登別漁港を利用していることにより、登別市と経済交流がある。

地域の歴史としては、アヨロ遺跡やカムイエカシチャシに見られる土器・石器など多くの出土品や遺跡があること、新潟県出身者が多いため越後踊り（伝統芸能）があることから、当時の人々の暮らしの中に秘められたロマンの香りを感じさせられる。

(2) 児童の実態

児童は、子どもらしく、元気で明るく、純朴である。だれとでも仲良く遊ぶことができ、縦割り班活動を通して上級生のリーダーが育っていて、下級生の面倒をよく見るなど、思いやりがあり、お互いのよさを認め合う児童が多い。

新しい学習や体験的学習、作業を伴う場面に興味・関心を示し、意欲的に活動するなど、学習意欲が高く落ち着いた態度で授業に臨んでいる。友達の意見を聞いたり協力を仰いだりして、ものごとを探究しようとする態度や課題を解決しようとする態度が見られる。一方、漢字・計算の基礎力とともに、国語では与えられた条件を満たして書く力、算数では式や図などを用いて説明したりすることといった学力に課題がある。近年では、タブレット PC を活用して、考えや意見を交わしたり、文に表したりすることができるようになり、主体的・協働的に学びに向かうことができる児童を目指している。

2 児童数・学級編成・職員構成

(1) 児童生徒数・学級編成

(令和 5 年 4 月 1 日現在)

学年学級	1	2	3	4	5	6	特別支援	合計
男子	4	6	2	2	2	3	2	21
女子	3	2	2	2	3	2	0	14
合計	7	8	4	4	5	5	2	35
編成	1	1	1		1		2	6

(2) 職員構成

	職名	氏名	担任	校務分掌等
1	校長	関東 英政		
2	教頭	寺沢 圭司		総務部 学力向上 地学協働
3	教諭	鈴木 里佳	1年担任	教務主任
4	教諭	成田 深結	2年担任	教務部 研修 ICT 校外研修 道徳
5	教諭	長谷部 裕也	3、4年担任	生徒指導部長 生徒指導 体育
6	教諭	古村 瞭汰	5、6年担任	教務部 研究主任
7	教諭	北野 亜矢子	自閉症情緒障害学級担任	生徒指導部 児童会 特別支援 C
8	教諭	中村 英介	知的障害学級担任	教務部 図書 文化
9	養護教諭	籠山 美和		生徒指導部 保健 清掃 食育推進
10	事務職員	山口 栞奈		事務部長
11	学習支援員	中西 広満		
12	校務生	對馬 浩二		事務部
13	給食事務	星野 和香子		事務部

3 学校経営方針



【学校教育目標】

たくましく やさしく のびゆく子

～虎のようなたくましさ 人を支える心の杖～

【学校経営の方針】

子どもが笑顔で通い、未来に目を向けて
自己実現力を育む学校づくり

<p>【目指す学校像】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもが主役で、笑顔あふれる学校 地域・保護者と信頼関係で結ばれた学校 	<p>【目指す子ども像】</p> <ul style="list-style-type: none"> 健やかな体を持ち、たくましく生きる子ども 共に学び合う中で、あきらめず粘り強く考える子ども 思いやりのある豊かな心の子ども 	<p>【目指す教師像】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども一人一人に寄り添い、共感的に指導できる教師 自己の向上の為に研鑽を重ねる教師 協働し、信頼される教師
---	---	--

【子どもに育てたい資質・能力】

<p>《スキル》 コミュニケーション力 課題発見力</p> <p>《態度》 粘り強さ</p> <p>《価値観》 自己肯定感</p>	<p>～相手のことをよく知りたい ～「なぜ」を見つけよう ～すぐにあきらめない気持ち ～自分の良いところはここだ</p>
---	--

教育の重点	経営の重点
確かな学力の育成	<p>① 目指す資質能力を育む教育課程の編成・実施・評価・改善</p> <p>② 学び合い・支え合う職場づくりと働き方改革の推進</p> <p>③ 危機管理に基づいた安心安全な学校づくり</p> <p>④ 子どもを中心に置いた連携体制の構築</p>
豊かな人間性の育成	
健やかな体の育成	
特別支援教育の充実	
成果指標	
<ul style="list-style-type: none"> 白老町スタンダードによる探究型授業 ICTの活用 	
<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導の機能をいかした授業 本の面白さに気がつける読書活動 自分からできる挨拶・返事・整理整頓 	
<ul style="list-style-type: none"> 家庭と連携したメディアコントロールと生活習慣の改善 体力作りの意識向上と活動の充実 	
<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育の視点を生かした環境整備 職員の共通理解に立った適切な支援体制の構築 	
<p>【確かな学力】 ・全国学調標準テスト平均点全国以上 ・家庭学習「学年×10分」85%以上</p> <p>【豊かな心】 ・「挨拶・自己肯定感」評定3.3以上</p> <p>【健やかな体】 ・体力テスト全種目全進平均以上 ・平日のメディア使用2時間以下50%以上</p>	

第Ⅱ章 研究の概要

1 研究主題

わかった・できた・伝わったと表現できる児童を目指して
～個別最適な学び・協働的な学びを通して～

2 研究主題設定の理由

本校は昨年度まで「共に高め合う児童を目指して」を掲げ、全教科・領域において、「主体的な学びを支える授業づくり」「協働的な学習を通して、個の学びを広げる・深める授業づくり」を中心に授業改善を行ってきた。具体的には、児童一人一人が学び方を身につけ、友達との学び合いを自分の考えに生かし、学ぶ楽しさや達成感を感じられる授業づくりを目指した。また、学習活動の中に「視点」を与えることで授業の軸がぶれにくい授業づくりも目指してきた。

そして、昨年度までの研究実践によって以下の成果を得ることができた。

- ①児童自身が見通しをもって、授業の流れに沿った学習を行えるようになってきた。
- ②同時間接授業を行うことで、授業をリーダーが進行している間、個に対応した学習指導ができるようになってきた。
- ③教師側から話し合いやふりかえりの視点を与えることで、授業の焦点化ができるようになってきた。

一方で、実践に取り組んでいく中で課題が多く見られた。

- ①教師の介入や視点の提示がないと児童自ら見通しを立て、学習を進められない様子が見られた。
- ②学び合いの中で、考えを伝えるだけで終了し、まとめることができずに終わってしまっていた。
- ③交流学びでは、意見を伝え合うだけとなり、深い交流学びとなっていない。
- ④学んだことを本時以外の場面で活用することが難しそうだった。
- ⑤根拠や理由を持った説明に苦勞している様子が見られた。

このような実態から、「主体的・対話的で深い学び」や「学力向上のため」に授業改善を行っていくことが必要であると考え。そこで、本校としては、「個別最適な学び」や「充実した学び合い」の達成を目標に、わかった・できた・伝わったと表現できる児童を育成したいと考え、本主題を設定した。

3 道へき複第10次長期5か年計画研究推進計画との関連

I 「学校・学級経営の深化・充実」

- 1 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びをつくる特色ある教育課程の創造と推進

→本校の研究との関連

3. 児童生徒一人一人の個性や能力を生かし、多様な体験を重視した教育活動の充実

- 地域素材・人材の活用：寺子屋虎杖浜による放課後補充学習、べこ餅作り
- ◎学校間交流：竹浦小学校との遠隔合同授業・合同研修、幼小連携事業
- 伝統や文化に関する教育：アイヌ文化学習、越後踊りの体験、ふるさと学習

II 「学習指導の深化・充実」

- 5 学び意欲を高める指導方法の改善と充実

→本校の研究との関連

2. 学習効果を高める個別化・集団化などの指導方法の改善と充実

- 個別化、集団化：個人思考、集団思考時間の充実
- ノート指導：学びガイドにて全校で発達段階に応じたノート指導
- ◎学習リーダー：リーダーガイドを用いた授業づくり
- 学習習慣と学習規律：家庭学習の充実、学びガイドを基にした学習規律の徹底
- ◎合同学習、集団学習、交流学习：竹浦小との遠隔合同学習、異学年交流学习

- 6 主体性を育てる学習指導過程の改善と充実

→本校の研究との関連

1. 主体的・対話的で深い学びの視点から、児童生徒一人一人の多様な考え方や個人差・学年差に即した学習指導過程の改善と充実

- 個に応じた学習：机間巡視の充実、個に応じた課題の提示
- 意欲をもたせる課題：児童自ら学習を調整できるような授業の「ゴール」提示
- ◎主体的・対話的で深い学び：個人・集団思考の時間の確保、発表方法の改善
- ◎リーダー学習：リーダーガイドを基とした授業づくり
- ◎ガイド学習：4段階「つかむ」「考える」「まとめる」「深める」の授業形態
- 学習形態の工夫：授業に合った段階が提示できるような段階カードの充実
- 間接指導と直接指導のバランス：指示・発問の工夫、机間巡視の充実
- ◎同時間接、同時間接指導：リーダーガイド学習を基にした柔軟な学習指導

4 全体構造図

<p>学校教育目標</p> <p>たくましく やさしく のびゆく子 ～虎のようなたくましさ 人を支える心の杖～</p>	
<p>研究主題</p> <p>わかった・できた・伝わったと表現できる児童を目指して ～個別最適な学び・協働的な学びを通して～</p>	
<p>研究内容</p> <p>○個別最適な学びを支える授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が見通しを立てられる導入 ・指導と評価の一体化 ・ICTの効果的な活用 	<p>○協働的な学びを通し、学び合いが充実した授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問いを発し合えるグループ学び ・深めた・広げた学習内容を整理し、活用できるようにする授業の終末 ・ICTを利用した空間的・時間的制約の緩和
<p>研究を支える土台</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ゴールの活用 ○リーダー学習 ○授業の見通しの充実 ○授業内での児童との効果的な関わり方 ○ICTの有効活用 ○グループ活動の充実 ○ICT機器に関する知識 ○デジタル教科書の有効活用 	
<p>検証計画</p> <p>チャレンジテストや全国学力学習状況調査、CRT標準学力調査を用いた検証 研修での検証・反省・分析 参観者の振り返り 児童アンケートの結果・分析</p>	

5 研究内容

基本の考えとして、個別最適な学びを支える授業づくりや、協働的な学びを通し、学び合いが充実した授業づくりとは何かを研究するのではなく、どのようにするとそれらを実現させていくことができるのかを研究するという視点で校内研修を行っている。

【個別最適な学びを支える授業づくり】

○ゴールの活用

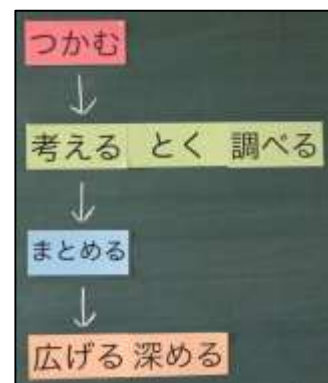
本校の授業では、授業の導入段階で「ゴール」を児童と確認している。授業の終末を言語化することで、学習過程に対し、児童が見通しを立てやすいと考える。

また、本時の指導事項を教員側から提示することで、指導と評価の一体化を行いやすいという側面もある。



○授業の見通しの充実

授業の見通しを充実させるには、既習事項の確認が大切である。児童は既習事項を想起し、どの既習事項を活用すれば課題解決につながっていくかを考え、学習計画を立てていくことだと考える。その上で、児童が「こうやろう！」「こんなヒント・ツールが必要」=子どもたちが〇〇を使いたい、〇〇したいと考えられるような見通しの充実を図っていくことが大切である。4段階のカードを使った指導をすることで、児童自ら「どんな学習したらよいのか。どのように授業を進めていくのか」見通しを立てやすくなったと考える。予め板書に段階カードを示すことで、児童が段階を考えながら、タイムマネジメントを行うことができる。



○めあてと課題の考え方

課 題→新しい知識や技能等がある時
めあて→学習したことを活用して問題を解く時

従って、課題は、「5W1H」の形になることが多く、めあては、「Let's」の形になることが多い。

例：課 題～かけ算の筆算はどのように計算するとよいのだろうか。
めあて～かけ算の筆算をマスターしよう。

○視点の提示

児童が思考する際に、考える視点を与えるようにしている。視点を示すことで、学びに対する焦点化を図ることができる。

学習活動を通して何をどうしたらよいのかを「視点」という形で伝えるようにしている。

例：グループで最も「はかせ」で解けると思う考え方を見つける。

○学習が苦手な子に対するアプローチ

より具体的な指示を出すようにしている。またリーダーになっても困らないように「進行役・タイムマネジメント」の2つの視点に焦点化している。児童が、授業の流れをある程度固定することで、機械的にはなってしまう側面はあるが、安心して学べる環境になる。

○リーダー学習

リーダーガイドを元に授業を行っている。リーダーを、輪番制にして行わせることで、授業を学年みんなで進めていこうとする姿が見られる。指導内容により集団思考を充実させたり、個人思考の時間を多めに取ったり、集団思考と個人

過程	A学年	教師	B学年	過程
つかむ	1, 学習課題を確かめる。(課題とゴール)		1, 学習課題を確かめる。(課題とゴール)	つかむ
	2, 学習の手順を確かめる。		2, 学習の手順を確かめる。	
考える	3, 一人学び	同 時	3, 一人学び	考える
	4, グループ学び		4, グループ学び	
まとめる	5, 発表, 交流	同 様	5, 発表, 交流	まとめる
	6, 学習課題の解決, まとめ(まとめ)		6, 学習課題の解決, まとめ(まとめ)	
深める	7, 練習問題		7, 練習問題	深める
	8, ふり返し(ふりかえり)		8, ふり返し(ふりかえり)	

思考の順を入れ替えたりするなど、柔軟に対応するように活用している。児童の考えに不足があるときには、教員が付け加える形にすることで、子どもが教えられている感を感じないようにしている。低学年も同じガイドを用いることで、国語、算数以外の教科でも授業を同じ過程で進めるようにしている。リーダー学習に慣れるまでは基本形を変えず、時間配分の工夫などで対応していく。(例：一人学びが厳しい場合～早めにグループ学びに入る、一人学びとグループ学びを入れ替えて行うなど)

○学習の系統性を意識した授業づくり

複式学級では、下学年の授業を先に行い、上の学年を後に行うことができる。そのようにすることで、上の学年を授業する時に、下学年の学習内容を生かし授業を進めることができる。今、示した逆の方法も可能であり、上の学年の授業を先に行うことで、次年度の学習内容を見据えた授業づくりも行うことができる。

例：5年生 算数 小数×小数 → 6年生 算数 分数×分数 につなげる。

○デジタル教科書の活用

学びの質を高めるために ICT の活用が有効である。国語科では、デジタル教科書を使った学習を基本としている。今後は「思考ツール」や「マイ黒板」の機能がさらに有効に活用をしていけるよう研修を行っているところである。現段階で本校が活用している使い方は以下の通りである。

【道具機能】

教科書に文字を書き込んだり、ハイライトを引いたり、付箋を貼る、スタンプを使うなどの機能である。一番シンプルで児童が最も使いやすい機能である。

【学ぶ機能の「漢字」】

单元ごとに学習する漢字の書き順を確認したりできる機能である。漢字フラッシュカードや筆順の復習は空き時間など短時間でできる。

【学ぶ機能の「ワーク」】

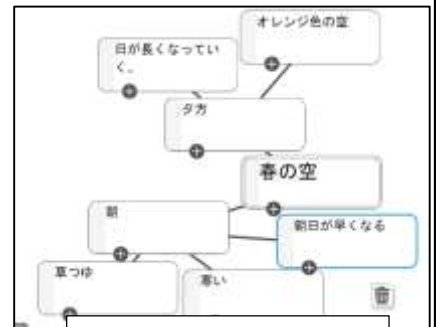
授業内容に即したワークシートを用いて、学習することのできる機能である。教科書の挿絵や下部にある挿絵の説明や参考資料などが一覧で表示されたものを活用している。また、小单元では、練習問題をデジタル教科書で解くこともできる。

【学ぶ機能の「マイ黒板」】

デジタル教科書の横に黒板画面を表示できる機能である。手書きで書き込むことや教材文を切り抜くこともできる。ノートに模写するよりも短時間で行うことができる。

【学ぶ機能の「思考ツール」】

思考していることを視覚化することができる機能である。人物の関連図を考えたり、キーワードの整理に活用できる。季節ものの单元では言葉集めなどで活用がしやすい。この機能は児童が使うには少々難しい部分がある。



思考ツールの使用例

○指導と評価の一体化

单元全体で「知識・技能」「思考・判断・表現」「態度」の観点を見通し、1単位時間で「知識・技能」「思考・判断・表現」のいずれかを区別し指導している。教材を通して何を学ぶのかが大切である。

例：×ごんはどんな気持ちになったのだろうか。

○ごんの気持ちを読み取るときには、どんなことが大切なのだろうか。

【協働的な学びを通し、学び合いが充実した授業づくり】

○グループ活動の充実

グループ学びを行う際には、その学び合いで何をしてほしいのか、どのような結論を出してほしいのかをできる限り伝えるようにしている。また、児童自ら「なぜ？」「どうして？」といった理由や根拠を伝え合えるようにしている。

○発表上手を目指して

大勢の前でも発言できる子、相手意識を持ったコミュニケーションを取る子を目指している。盛り上がる話し合いをするためのステップとしては、

①聞く姿勢、態度を育てる。 ②聞いたことに対して一言伝える。

③聞いたことに対してつつこみを入れる。(最初は教員が手本として行う。)

④自然とつっこみが生まれる環境になる。

○問いを発する児童を目指して

問いに対し、問いを持つ。問いが問いにつながっていく発問の吟味を行っている。まず、スタート段階としては、「5W1H」になる発問を心がけるようにしている。そして、児童がつぶやいた言葉を漏らさないようにしている。また、発表の際には意図的に児童がつっこみをする事で更なる問いを作らせることもある。

○ふりかえり活動の充実

「表現できる児童を目指して」という観点からもふりかえりの充実を図っている。授業で学んだことを振り返ることで学習の定着を図ることと、次時の内容にスムーズに入れるようにすることを目的にしている。

■振り返りの在り方	
○児童が本時どのような学びをしたのかを振り返るため、基本的に毎時間実施する。	
○振り返りの視点は、教師が提示する。	
【振り返りの視点的例】	
レベル1(およそ1・2年生)	
わかったこと	「きょうのじゆぎょうでは、〇〇がわかりました。」
できるようになったこと	「きょうのじゆぎょうでは、〇〇ができました。」
レベル2(およそ3・4年生)	
自分や友達のがんがよかったところ	「友だちの〇〇の考えが分かりやすかったです。」
学び合いからの学び	「学び合いの中で、〇〇を話し合うことができました。」
次に学習したいこと	「次は、〇〇について調べてみたいです。」
予想した「答え」「考え方」はどうだったか	「〇〇と考えていたけれど、結果とちがっておどろきました。」
レベル3(およそ5・6年生)	
今までの学習と比較する	「〇〇のように考えると、解きました。」
→似ているところや違うところ	「〇〇はとちがちがちがって、おどろきました。」
日常生活で活用できそうなこと	「〇〇の時に使ってみみたいです。」

○遠隔合同授業に関する事前準備

遠隔合同授業を行うためには、以下の準備が必要である。

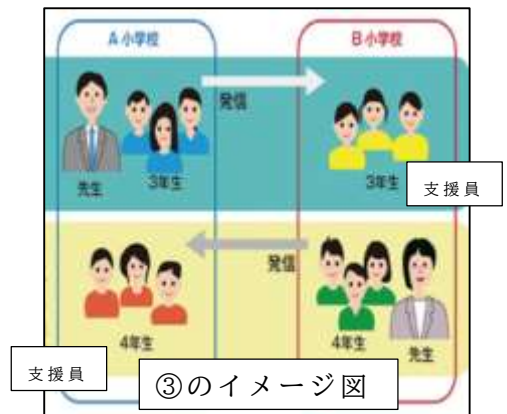
- ・ 合同遠隔授業の日程調整を行う。
- ・ 遠隔授業を行うための合同研修を行い、研究内容の検討を行う。
- ・ 接続方法についての検証・検討を行う。
- ・ PDCA サイクルを築き、持続可能な遠隔合同授業を目指しているところである

○負担感のなく効果的な遠隔合同授業

本校では、「必要な時に、必要な授業で」を念頭に置き、効果的な遠隔授業を行うようにしている。

方法は、①複式双方向型

ファイナルステージで公開する授業スタイルである。学年ごとに担任が分かれて指導に当たる。メリットは、それぞれの学年に教員がつくことができることである。その一方で、指導と評価の一体化に関する部分には課題を残している。



②一体型

昨年度本校が公開した授業である。道徳や総合など、2学年が同じ授業を行える教科で、双方向をつなぐやり方。教科は制限されてしまうが、最もシンプルに行うことができる。

③同時間接授業同士の複式型

この方法は、同時間接授業をそれぞれつなぐ方式である。もっとも難易度の高いつなぎ方であり、両校の学習ガイドをそろえる必要があるなど、土台となる部分の研修も必要である。本校では、国語の本の紹介などの小単元で行っている。

※最初から最後まで遠隔で行う場合と一部のみ遠隔で行う場合がある。

6 課題と成果

【成果】

- 校内での学習の決まりごとを焦点化することで、指導者側も児童側も共通理解の元で指導にあたることができている。
- 低学年の段階からスモールステップの考えを元に、ガイドを用いた授業づくりを行っていることで、リーダー学習が身につけてきている。
- 同時間授業を行うことで、個別指導を行う時間の確保ができるようになってきている。
- 説明したり、根拠を述べたりすることができる児童が増えてきている。
- 板書のスタイルやノート指導などの様々な形を試行錯誤することで、本校のスタイルをある程度確立することができるようになってきている。
- 教員がゴールを示すことで、児童自らが授業の見通しをもちやすくなってきている。
- デジタル教科書をはじめとしたICTの活用を進めることができている。
- 竹浦小学校との合同研修を計画的に行えるようになってきている。

【課題】

- 必ずしもすべての授業がリーダー学習で進める形に当てはまらないという課題がある。
- デジタル教科書やICT機器の活用にあたっては、担任の裁量によるところが多いため、ICTへの理解や熱意によって活用状況が変わってしまう。この場面では活用する等の共通理解を図るマニュアル等の整備が必要である。
- 遠隔合同授業の環境整備や年間計画通りに行うことの困難さがあること。
- 児童同士の学び合いでは、聞いて拍手で終わることが多いため、発表会のような学習活動になってしまっている。
- 学習ツールの多様化により、指導と評価の一体化を図ることが難しい。

7 今後の方向性

- 児童が授業に対する見通しをもちやすくしていく。
- 日常生活へも生かしていけるような授業づくりを進めていく。
- ICTに関する活用状況をリスト化し、活用への負担軽減を図り、指導者による差をなるべく作らないように整備していく。
- 学習ツールが多様化していく中で、指導と評価をどのように結び付けていくのか研修していく。
- 充実した学び合いにしていく。
- 児童の授業の記録を、デジタルとアナログで両立させて残していく。

第4分科会

【研究主題】

「主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成」

～リーダー学習の取組を通して～



苫小牧市立樽前小学校

特色ある教育活動



椎茸販売にむけて（袋詰め作業）



見学学習



うさぎの飼育体験



お店集会



スケート学習



かんじき体験

第 I 章 学校の概要

1 地域・児童の実態

(1) 地域の特色

樽前地区は、苫小牧市の中心より約 16 km 西方に位置し、酪農、畜産を主に一部漁業が営まれている市街化調整区域である。

かつては、「本村ハ活火山樽前山（海拔参千参百五拾参尺）ノ麓ニ位置シ地層ノ大部分ハ、火山灰ヲ以ッテ形成セルガ故ニ産業方面ノ発達遅タトシテ振ハズ・・・」（沿革史抜粋）と記されており、零細な暮らしであった。その後、土地改良が進み、農業地域に発展、昭和 30 年前半には児童数が 120 名までに増加した。しかしながら、ここ数年は過疎化が進み、戸数は 80 戸ほどで、産業は酪農、畜産が主体であり老人福祉施設が 3 施設ある。

学校の前方には、JR 室蘭線や国道 36 号線が通り、電車や自動車の行き来を見ることができる。背後には、道央自動車道があり、その奥の溪谷には神秘的な樽前ガローを見ることができる。

(2) 児童生徒の実態

今年度の児童数は 16 名（樽前地区 3 名、特認 13 名）であり、特認児童の占める割合は全体の 81% である。どの子も素直で明るく、少人数のため異学年で協力したり、上級生が進んで下級生の面倒を見たりしている。発表する機会が多くなることから、人前で話すことに慣れている子どもが多い。しかし、根気のいる作業を苦手とし、楽しいことや楽なことを求める傾向も見られる。

2 児童数・学級編成・職員構成

(1) 児童生徒数・学級編成

(令和 5 年 4 月 1 日現在)

学年学級	1	2	3	4	5	6	合計
男子	0	0	3	2	2	2	9
女子	0	1	0	4	0	2	7
合計	0	1	3	6	2	4	16
編成	—	1		1	1		3

(2) 職員構成

	職名	氏名	担任	校務分掌など
1	校長	中嶋 清人		
2	教頭	渡辺 奈美		
3	教諭	小保内 知博	4 年担任	教務部
4	教諭	瀧川 明	2, 3 年担任	研修部
5	教諭	奈良 美里	5, 6 年担任	生徒指導部

6	養護教諭	吉多 千明		保健体育部
7	事務職員	稲見 明子		事務・管理部
8	公務補	高瀬 則彦		事務・管理部
9	事務補	小笠原 理沙		事務・管理部

3 学校経営方針



第Ⅱ章 研究の概要

1 研究主題

「主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成」
～リーダー学習の取組を通して～

2 研究主題設定の理由

（学習指導要領から）

学習指導要領は、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、児童に生きる力を育むことを目指すこと」を求めている。

（学校の現状から）

本校は全て複式学級である。複式であるがゆえに学習の中で、児童が発言したり学習リーダーになって学習を進めたりする機会が多く、自主学習や集団学習を行う習慣を形成しやすい。

（児童の実態から）

全体的に明るく素直な児童が多く、学習にも真面目に取り組んでいる。家庭学習の定着率も高い。

一方で、

- ・前の児童が発言した内容につなげて発言すること。
- ・学習リーダーがマニュアルにとらわれてしまうこと。
- ・活用問題が苦手な児童が多い。

ことなどが、課題として挙がっている。

（リーダー学習を切り口に）

授業は、教師と児童が共に創るものである。リーダー学習を取り入れて、児童だけで授業を完結させることを目指してはいない。また学習リーダーに授業の進め方のマニュアルを手渡せばうまくいくものでもない。

リーダー学習を切り口にするすることで、教師の授業観の転換や児童にどんな力が必要なのかを考えるきっかけとなる。そのことを通して、主体的・対話的で深い学びの実現を目指していきたい。

(教科の選定)

児童に生きる力を育むことは、学校教育の全ての領域や教科で求められることではあるが、教科としては「算数科」を選んだ。

- ・令和元年度から3年間算数科の研究を進めていて、その蓄積があること。
- ・教科書を使った授業の流れや学習内容の系統性が比較的明確なので、学習リーダーを育成しやすいこと。

が選定の理由である。

以上のことから、少人数のよさをいかし複式での学習指導を構築することで、子どもたちが主体的に学習を進め、互いの考えを伝えることを通してともに高め合うことを目指し、本研究主題を設定した。

3 道へき複第10次長期5か年計画研究推進計画との関連

学校・学級経営 の深化・充実	研究課題1：確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進
(本校教育との関わり)	
・小規模、少人数の利点をいかし、地域に根ざした特色ある教育活動を計画する。 ・多様な体験を重視し、児童一人一人の個性や能力に応じた教育活動を推進する。	
学習指導の 深化・充実	研究課題6：主体性を育てる学習指導過程の改善と充実
(本校研究との関わり)	
・学習の見通しをもって、粘り強く課題を解決する。 ・つなげる発表を心掛け、発表の質を高める。 ・リーダー学習の確立を目指す。	



4 全体構造図

(学校教育目標) 豊かな心でたくましく生きる樽前っ子の育成

- ・ 自分から進んで学習する子
- ・ いつも明るく思いやりのある子
- ・ 心もからだもたくましい子
- ・ ねばり強くがんばる子



(研究主題) 主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成
～リーダー学習の取組を通して～



(研究内容)

めざす児童像		
主体的に学ぶ子	ともに高まろうとする子	学び合う子
研究仮説と検証方法		
(研究仮説1) 児童に目的意識や学びの見通しをもたせることで、学習に主体的に取り組む、学びの成果を実感できるのではないか。	(研究仮説2) 友だちとの関わり方や交流の仕方を工夫することで、児童はともに高まろうとするのではないかと。	(研究仮説3) リーダー学習を取り入れることで、児童が学び合いを続けることができるのではないかと。
(仮説検証1) <input type="checkbox"/> 学習過程の構築 <input type="checkbox"/> 目的意識のある課題設定 <input type="checkbox"/> 効果的な振り返り ・ 数学的な見方・考え方を明確にした振り返り <input type="checkbox"/> 基礎基本の定着	(仮説検証2) <input type="checkbox"/> ペア学習 <input type="checkbox"/> つなげる発表 <input type="checkbox"/> 質を高める全体交流	(仮説検証3) <input type="checkbox"/> リーダー学習

授業を支える日常的な取り組み

- ・ 樽前スタンダード
- ・ 四則計算プリント
- ・ 教室の掲示物
- ・ ICTの活用
- ・ 学習のやくそく

タブレットの活用→



5 研究内容

(仮説1) 児童の主体性を育む学習展開の工夫

児童に目的意識や学びの見通しをもたせることで、学習に主体的に取り組み、学びの成果を実感できるのではないか。

(仮説検証1)

・主体的な学びには、「なぜ学ぶのか？」という学びの目的と、「できた。」「わかった。」という学びの実感が必要である。

①課題意識の高まりについて

・教科書には課題が書いてある。ただそれを自分事として考えている児童は少ない。児童に対して、課題に迫る発問をしたり解決の見通しをもたせたりする必要がある。児童の「やってみたい」「解いてみたい」という思いを引き出すには、様々な方法が考えられるが、大切なのが数学的な見方・考え方である。児童がどんな数学的な見方・考え方を働かせればよいのか、また児童にどんな数学的な見方・考え方を身に付けさせたいのかを教師が明確にしておくことで、児童も目的意識を焦点化することができる。



↑解決の見通しをもたせる

②学びの実感について

・まとめも教科書に書いてあるので、「今日のまとめは何か？」と問いかけると、それを読み上げる児童もいる。ただ必ずしも児童の学びの実感がこもっているとは言えないこともある。児童一人一人が学んだことを能動的に振り返る必要がある。

やり方としては、

低学年→児童に「今日学んだことは何だったか」を尋ねて、教師がまとめをする。

中学年→「今日学んだことをキーワードにするとどうなるか」を尋ねて、教師と児童でまとめをする。

高学年→児童が主体となって、まとめをする。

と考えられる。

最初から教科書のような模範的な文章はできないかもしれないが、キーワードからなので、問い掛けていくことが必要である。自分が今日学んだことはこれだ、としっかりとと言える児童を育てていく。

③単元テスト後の時間の活用

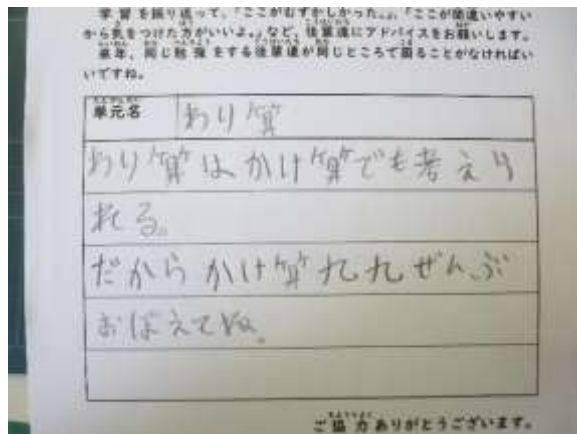
・主体的な学びには、学習の見通しと振り返りが大事である。そこで取組を2つ行う。

ア 後輩に伝える振り返り

・テストが終わった後に、「先輩として、後輩に伝えることはないだろうか？」と投げかける。「〇〇がむずかしいから気をつけて」「〇〇を解くには、こうすればいい

いよ」という児童の生の声を集める。児童が困ったと感じたことやつまづいたことは、樽前小学校の共有の財産となる。

次年度には、先輩達が自分たちに伝えてくれたこととして、受け止めて同じ轍は踏まないようにしようとするはずである。また一見、後輩に伝えるために振り返っているようだが、実は自分自身への振り返りでもあるので、「次は気をつけよう」と考えるはずである。



↑ 単元学習後の振り返り

イ 単元の見通しに関わって

・新しい単元が始まる前に、単元の終わりの「たしかめよう」の1番最後の問題を解いてみる。

- ・全く手も足も出ない子
- ・何とか解いてみようとして、四苦八苦する子
- ・すんなりと解ける子

など様々である。その児童が難しい問題にどう対応するかを見取することもできるし、レディネスにもなる。

時間は5分程度で切り上げて、「解けなくも大丈夫だよ」と伝えておく。児童は、これからこんな勉強をするのだと見通しがもてるし、単元の学習が終われば、当然その問題が解けるようになっているので、学びの成果を実感することもできる。

(仮説2) 友だちと協働的に学ぶ交流の工夫

友だちとの関わり方や交流の仕方を工夫することで、児童はともに高まろうとするのではないか。

(仮説検証2)

①ペア学習の活用について

- ペア学習の目的を
- ・全体交流の練習
 - ・単純な間違いの修正
 - ・解決のヒントをもらう

として考える。

誰と誰をペアにするのかというのも教師の工夫のしどころである。



↑ 全体交流の前のペア交流

②前の人につなげた発言

・話し合いとは、対話である。対話では、話し手と聞き手が交互に入れ替わる。前年度までの取組で児童の話す力は付いているが、聞く力についても焦点を当てていきたい。

「相手の話を聞いているよ」ということを示すためにも、発表が2番目の児童からは、「つなげる言葉」を使って発表させる。ここで言うつなげる言葉というのは、「つけたしで」とか、「別の視点で」という言葉である。この言葉を使うためには、前の児童の発表を聞いていなければならない。

・「□□さんの考えにつけたしです。○○という言葉を入れるともっとわかりやすくなると思います。」

・「ぼくは、□□さんとは、別の視点から考えました。それは・・・」

といった発表ができると、話し合いの内容が充実してくる。



↑ホワイトボードを使った交流

③質を高める全体交流

・これは、2つの側面がある。

1つは、それぞれが働かせた数学的な見方・考え方をもち寄って、よりよいまとめにしていく全体交流である。

例えば、

・「○○という理由で、□□さんの発表がわかりやすかったです。」

→発表の質を競う。(よい発表を評価する視点が必要)

・「□□さんと答えは同じだけど、こんな解決方法もあるよ。」

→解決への視点を広げる。

もう1つは、間違いにも価値を見い出す全体交流である。友だちの誤答に対して、単に「間違っている」と言うのではなく、「どのように考えたのか」「どんなところに気をつけると正解になるか」と捉える姿勢を育てていく。間違いをだめなことと捉えるのではなく、みんなが気を付けるべき落とし穴と捉えるとクラスの共有の財産になる。「次からどうすればいいかな」と投げかけると児童からいいアイデアが出てくるはずである。

そのためには、普段から失敗を受けて止めたり、「わからない」と言えたりするクラスの雰囲気作りが大切である。

(仮説3) リーダー学習の確立

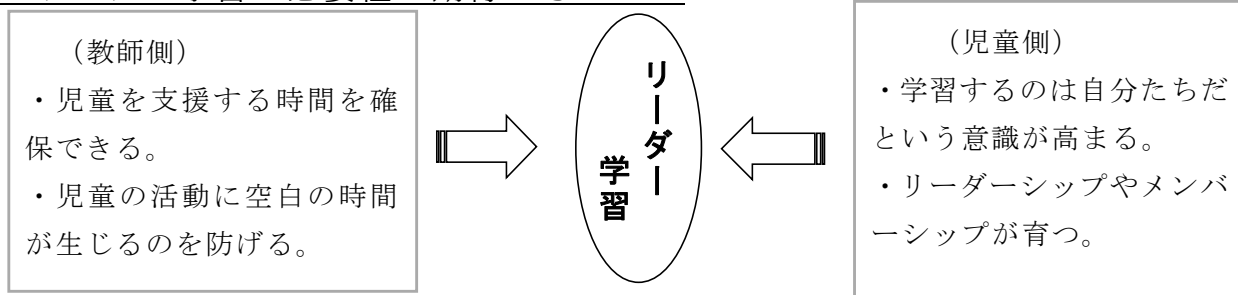
リーダー学習を取り入れることで、児童が学び合いを続けることができるのではないか。

(仮説検証3)

① リーダー学習とは

・学級の児童を「学習リーダー」として、学習を進める方法である。

② リーダー学習の必要性と期待できること



・決して、教師が手を出さず児童の進行だけで終わってしまうような授業を目指しているわけではない。深い学びのために、教師による発問や揺さぶりは必要である。ただ、学習の主体を少しずつ児童に移していくことで、できることを増やし自分で学び続けられる児童を育てていきたいと考える。

また、リーダー学習が円滑に進むようになるには、児童にどんな力が必要なのかを考える過程の中で、授業のあり方や教師の役割などを見直すことも期待できる。



↑ 学習リーダーによる進行

③ リーダー学習に必要な力

・リーダー学習を円滑に進めるためには、児童全員に次のような力を身につけることが必要である。

- | | | |
|---------------------|---|------------|
| ア 学習の流れを理解していること | } | 1年次の研究との関連 |
| イ 一定程度の学力が身についていること | | |
| ウ わかりやすい発表ができること | } | 2年次の研究との関連 |
| エ 児童同士で話し合いができること | | |

(アについて)

○児童の活動が止まってしまうのは、次に何をしたらいいかわからないからである。学習の流れをある程度パターン化し、進め方を児童が理解することで、学習に見通しをもつことができる。

(イについて)

○学習リーダーが、自分が出した答えに不安を感じているようでは困る。学習リーダーが自信をもって進めることができるように、どの児童にも算数の力を付ける必要がある。ただ、すぐ忘れてしまう児童もいるので、学んだことが定着するような方策も必要である。

◇第72回全道へき地複式教育研究大会
胆振大会実行委員会組織図

◇北海道へき地・複式教育研究連盟の組織

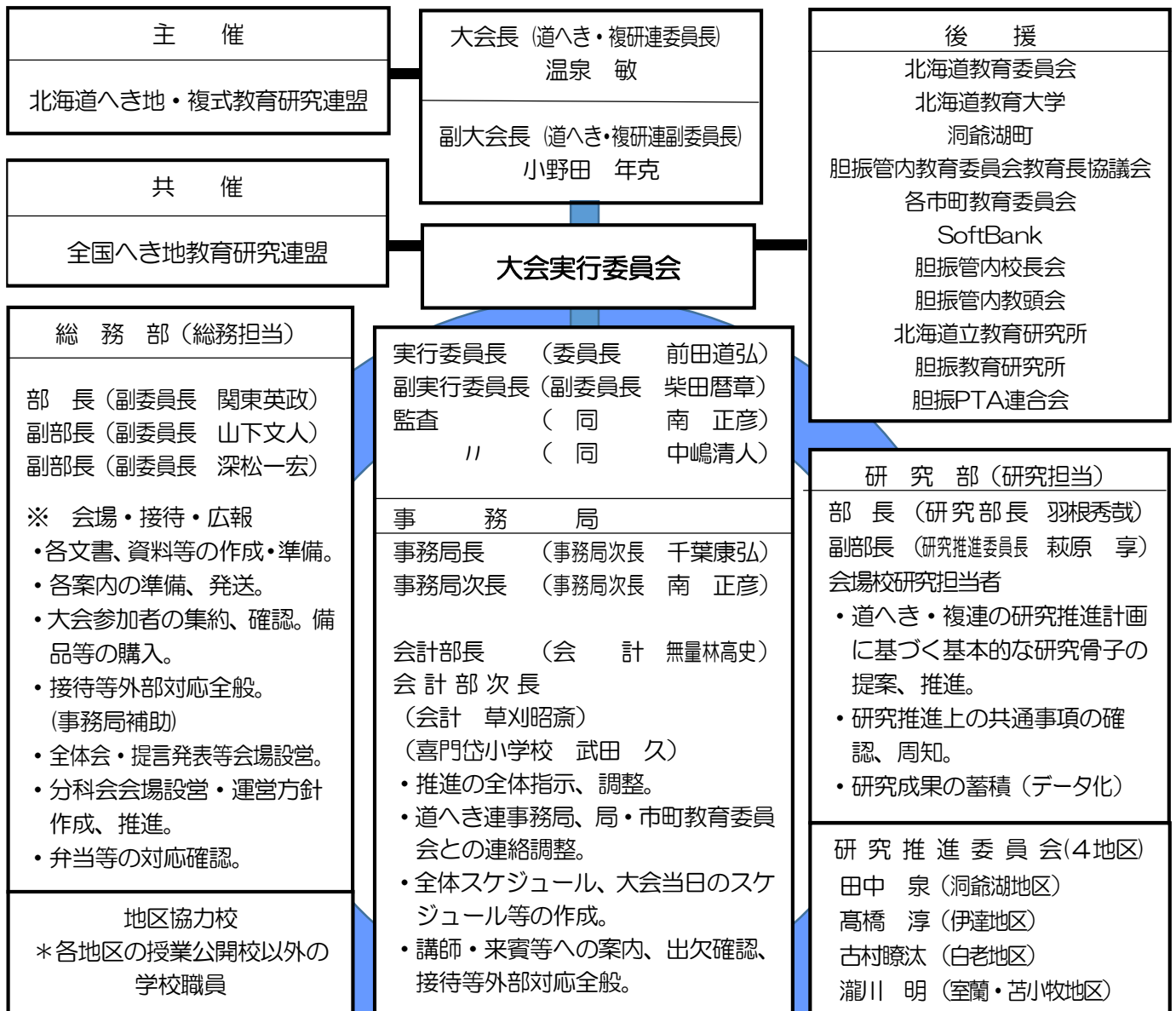
◇あしがき



炭鉄港 室蘭市 旧火力発電所

令和5年度第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会ファイナルステージ
 <全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会>

実行委員会 組織図



地区ブロック実行委員会 <委員長・事務局長会議>

地区ブロック実行委員による、分科会推進の取組

- 地区ブロック実行委員会は、役員と各地区ブロックの委員長・事務局長で組織し、全体運営・連絡調整にあたる。(管理職のみの構成)
- 胆振管内を4ブロックに分け、4か所にて公開授業・研究協議を実施する。
 <洞爺湖地区、伊達地区、白老地区、室蘭・苫小牧地区>
- 各地区ブロックにて大会実行委員会・研究部との連携の下、研究公開校(会場校)を中心に、分科会運営に向けた取組を推進する。(4ブロックでの共通理解)
 - ・分科会に向けての準備計画、役割分担、会場設定、研究内容(提言・授業内容)等の確認
- *研究公開校は研究内容の提言、授業公開に専念し、公開校以外の学校が事務的な準備作業や当日の運営を行う。

※ 基本的には総務・研究の2部制とする。(会計は事務局の中に含める)

※ 研究部は従来の研究推進委員会をベースとし、各市町の会場校の研究担当で組織する。

令和5年度 北海道へき地・複式教育研究連盟 役員名簿

役職名	氏名	地区	学校名	電話番号
顧問	柿崎 秀顕 (全国へき地教育研究連盟会長)		北海道教育大学札幌校	011-778-0684
委員長	温泉 敏	上川	美瑛町立美沢小学校	0166-92-4960
副委員長	総務部長 小野田 年克	十勝	幕別町立明倫小学校	0156-67-2306
	研究部長 前田 道弘	胆振	白老町立白老中学校	0144-82-2026
監査	小島 康秀	宗谷	稚内市立大岬小学校	0162-76-2010
監査	國行 宏昭	空知	岩見沢市立メープル小学校	0126-44-2205
財政部長	北村 剛	石狩	千歳市立駒里小中学校	0123-23-3237
事務局長	井上 隆一	上川	占冠町立占冠中央小学校	0167-56-2824
事務局次長	道下 誠	後志	積丹町立美国小学校	0135-44-2044

令和5年度 北海道へき地・複式教育研究連盟 研究推進委員

地区	役・担当	氏名	学校名	電話番号
留萌	研究推進委員長	村元 隆一	留萌市立港北小学校	0164-42-0335
檜山	研究推進副委員長	黒川 貴功	今金町立種川小学校	0137-82-0506
日高	研究推進副委員長	高橋 郁子	えりも町立えりも岬小学校	01466-3-1114
十勝	学校・学級経営部長	増田 覚	音更町立東士幌小学校	0155-43-2311
後志	学校・学級経営部	葛西 統実	黒松内町立白井川小学校	0136-73-2012
渡島	学校・学級経営部	中田 和久	八雲町立浜松小学校	0137-62-2462
オホーツク	学校・学級経営部	木下 めぐみ	北見市立相内小学校	0157-37-2824
上川	学習指導部長	池田 幸則	中富良野町立西中小学校	0167-44-2062
石狩	学習指導部	岡山 拓	石狩市立厚田学園	0133-77-5356
空知	学習指導部	土谷 直樹	栗山町立継立小学校	0123-76-3151
宗谷	学習指導部	菊地 俊雄	枝幸町立音標小学校	0163-66-1073
釧路	学習指導部	西村 浩一	標茶町立中茶安別小中学校	015-488-6133
根室	学習指導部	原 健一	根室市立海星学校	0153-25-3725
胆振	学校・学級経営部	羽根 秀哉	伊達市立大滝徳舜警学校	0142-82-7020

令和5年度 北海道へき地・複式教育研究連盟 委員長(会長)・事務局

地区	委員長		事務局長		
	氏名	学校	氏名	学校	電話番号
石狩	徳田 和之	石狩市立浜益小学校	高橋 基	千歳市立東小学校	0123-21-3200
空知	古畑 聡子	深川市立北新小学校	橋本 卓也	深川市立多度志小学校	0164-27-2005
後志	道場 伸哉	仁木町立銀山小学校	姉帯 隆文	赤井川村立赤井川小学校	0135-34-6860
渡島	大山 真由美	北斗市立島川小学校	小野 元嗣	七飯町立峠下小学校	0138-65-2415
檜山	安田 善紀	厚沢部町立鶉小学校	中川 真一	上ノ国町立河北小学校	0139-55-2151
日高	佐藤 正寿	新ひだか町立桜丘小学校	熊谷 真	えりも町立えりも岬小学校	01466-3-1114
上川	温泉 敏	美瑛町立美沢小学校	早坂 昌俊	富良野町立鳥沼小学校	0167-22-2903
留萌	佐藤 美智子	天塩町立啓徳小学校	建山 和則	小平町立鬼鹿小学校	0164-57-1160
宗谷	小島 康秀	稚内市立大岬小学校	中村 繁仁	稚内市立天北小中学校	0162-74-2414
オホーツク	落合 利広	湧別町立開盛小学校	宮崎 浩	北見市立おんねゆ学園	0157-45-2126
十勝	小野田 年克	幕別町立明倫小学校	岸 研吾	芽室町立上美生小学校	0155-66-2009
釧路	佐藤 義行	弟子屈町立美留和小学校	太田 諭	釧路町立昆布森小学校	0154-63-2013
根室	加藤 和広	根室市立落石小学校	角田 俊幸	別海町立中西別小学校	0153-75-6628
胆振	前田 道弘	白老町立白老中学校	関東 英政	白老町立虎杖小学校	0144-87-2009

あとがき

全道へき地複式教育研究大会胆振大会ファーストステージから早1年を迎え、再び、「変動する大地との共生」をキャッチフレーズとする、ユネスコ世界ジオパーク認定地の洞爺湖町をはじめ、北海道を代表する観光地である胆振の地に、道内各地からたくさんの方の参加を得て、第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会ファイナルステージを開催できますことに心から感謝申し上げます。

「産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から 子どもたちに未来へ飛躍する力を」の大会スローガンのもと、昨年度はコロナ禍における人数制限もありましたが、2日間で延べ400人ほどの参加をいただきました。大会運営は、参集とオンラインのハイブリット型開催とし、ライブ配信はもちろんのこと、ワンモア配信、オンデマンド配信の新しい試みで実施いたしました。

ファーストステージでは、多くの成果をあげるとともに、また課題も見つかりました。その一つが、オンライン参加者が分散会時に会場の参加者と交流ができなかったことです。今大会では、「遠隔合同学習方式」を取り入れて、オンライン参加者と会場の参加者との意見交流などが行えるように改善しました。「遠隔合同学習方式（遠隔合同授業）」とは、遠隔会議システムを利用して、離れた学校の学級同士をつないで行う授業のことですが、「多様な意見に触れる機会が少ない」「コミュニケーションを育成する機会が少ない」「学習活動の規模が小さい」などのへき地・小規模校での悩みを解決できる授業形態として有効な手段の一つであると考えます。この他にも、たくさんを試みを行う大会となっております。実行委員会、公開校においては何度も試行を重ねて参りました。是非、御参加いただいた皆様の忌憚のない御意見・御指導をいただき、今後の活動につなげて参りたいと思います。

今年度は、北海道へき地・複式教育連盟第10次長期5か年研究推進計画の最終年度となっております。研究主題「新時代を開発し、主体的・創造的に生きる子どもの育成」、また、胆振へき地・複式教育連盟では、「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」を研究主題として研鑽を重ねてきました。これらの研究主題への一つの回答となるべき大会として、そして次の上川大会への一助となる大会となりましたら、これまで取り組んできた各実行委員の苦労も報われることと思います。

結びになりますが、本研究大会の開催にあたり北海道教育委員会をはじめ、北海道教育庁胆振教育局、胆振管内教育委員会教育長協議会、胆振管内各市町教育委員会並びに関係機関の皆様には並々ならぬ御支援を賜りましたことに心より感謝申し上げ、あとがきの言葉とさせていただきます。

第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会

副実行委員長 柴田 暦章

(洞爺湖町立洞爺湖温泉小学校長)

北海道へき地・複式教育研究連盟
—令和5年度—
第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会ファイナルステージ
(全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会)

研究紀要

発行 令和5年9月13日

編集 北海道へき地複式教育研究大会胆振大会実行委員会

編集責任者 北海道へき地複式教育研究大会胆振大会実行委員長
白老町立白老中学校 前田 道弘

事務局 白老町立竹浦小学校(事務局長) 千葉 康弘
〒059-0642 白老町竹浦198-8
TEL・FAX 0144-87-2118・87-4827

印刷 (有)村上印刷
〒052-0026 伊達市錦町95番地1
TEL 0142-23-2625 FAX 0142-25-2459
[MAIL murakamiprinting@amber.plala.or.jp](mailto:murakamiprinting@amber.plala.or.jp)